
void

az

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

void

【Nコード】

N2026J

【作者名】

az

【あらすじ】

2088年9月、快樂の未死亡するドラッグプログラムが存在が噂されるようになった。ヴァンは友人のたのみから、ドラッグプログラムについての調査をはじめが、ハッキングされたりモルモットにされたりとだんだん渦中へ巻き込まれてゆく。現実と仮想現実が交差した世界で繰り広げられる、幼女(?)とやる気なし少年(?)の探偵ごっこ物語。ラノベ風。GL要素有とありますが、ほとんどないです。エロもなし！更新頻度限りなく遅め。

void

void

「形」

- 1 《法》 契約などが 無効の、法的拘束力のない (void) .
- 2 (形式) (…が) 欠けた、ない (of . . .)
- 3 からの、空虚な、何も無い .
- 4 (詩) (無益な、効果のない、むだな .
- 5 土地・家などが あいた； 地位・職などが 空席の、欠員の

「名」

- 1 (通例 a) (空虚感、喪失感、物足りなさ、心の空隙)
- 2 (通例 the) (空間、虚空、真空、空白状態)
- 3 (通例 a) (空所、空隙^{けき}、(壁などの) すきま、割れ)
- 4 (地位などの) あき、空席、欠員 .

「動」(他)

- 1 《法》 契約などを 無効にする、取り消す .
- 2 (形式) (…の) (中身を) あける、便を 排泄^{せつ}する、

∴を放出する．

3 部屋・場所・容器などから ∴を（取り除く，からにする，きれいにする）（of . . .）（ . . .）

（自）（手術前などに）排尿する，排便する．

「アングロフランス語 ラテン語^{からの}vacuus . . . VACUUM」
『グレッシブ英和中辞典 第4版』

2088年9月10日(金)

2088年9月10日(金)

オレはギアを手首につけた。捻る。カチ、と音がして、接続された。身構える。パルスが走った。わずかな快感、オレは身体を震わせた。

一瞬で景色が雑多な部屋から、雑多なビルが乱立している裏路地に変わる。いつものくせで、手を見た。少年のものだ。見渡す世界は、すっかり様変わりしていた。視界が違う、身体が普段よりも軽い。オレは手を握りしめた。

DR、偽装現実と言われている。言葉のまま、現実を偽装する技術だ。一昔前のネットの中にもう一つの世界を作る仮想現実とは違い、ここは、本物の「現実」だ。目の前にうつるビルも、現実に存在し、目の前を歩く人間たちも、現在この時間この場所にいる。ただ、オレの様なAR - 拡張現実、実態を持たないただの映像体 - も、人々の流れに混ざっていた。

AR自体の歴史は長い。ARは2010年頃に開発された技術で、現実にならないものを現実へ投影する。ARが開発された当初は、WEBcomの前に紙を置くと、ディスプレイには紙の上に3Dフィギュアが表示され、踊るといった他愛のないものだったそうだ。今ではあちらこちらにARの広告が溢れている。空を飛ぶ文字であったり、地面からよきによき生えた絵が踊っていたり。そのARを発達させたものがDRだった。DRは約十五年ほど前から急速に発達した技術で、人間自身を偽装し、AR化させることを言う。つまり、このオレの姿は本来のオレではなく、オレが望んで作り上げたものだ。だが、この偽装したオレでさえ、「現実」に存在した。

鏡にうつる偽装した姿、アバターは、ありふれた深緑のTシャツ

に半ズボンのクソダサイ服を着ていて、どこにでもいるクソガキの姿だった。茶髪に色素の薄い鳶色の目も、どこか生意気に見える。まさに、オレの精神そのものを体現していた。

オレは裏路地を出た。すでに深夜のはずなのに、チカチカしたネオンとARで、昼間よりも明るく思える。雑多なビルの隙間には、ハングルやら簡体字、繁体字のごじゃごじゃした広告ARが出ている。日本語はない。広告ARの区画は法律で定められているはずなのだが、この場所にはそんなもの通用しないようだった。大久保は百年前からこんな場所だと聞いたことがある。新宿からたった一駅、その距離で途端に異国と変わる。行き交う人も、東南アジアや韓国、中国系が多い。ただし、こちらはあくまでも実体だ。AR化された人間、DRには、青色の髪や緑の肌など、国籍不明なやつらが多かった。中には人間ですらない姿も見える。ペンギンやらクマやらもいた。当然中身は人間だ。

「遅かったね」

声が出た方を向いた。大通りを跨いで、人ごみの中に辛うじてお馴染みとなった姿が見えた。短髪、17歳ぐらいの少年。他に20歳前後の金髪碧眼に縁なしフレームの眼鏡をかけた青年、ふわふわした5歳程度の白欧系幼女が屯していた。

「そうか？」

ギアを見ると、23:00と表示されていた。「いつも通りだろ」

「早くおいでよ」

促され、人波を避けながら道を横切る。実体の人間は、ARを視ない人も多い。大久保の多くはギアやARのパルスを視覚野に同調させるチューナーを持っていない人たちだが、ARに煩わしさを感じ

じたくない人間も、意図的にA Rとの同調をオフにする。そういつたA Rを視ない人たちは、当然オレたちD Rを認知せず、歩く。A Rはただの映像だから、決して実体の人間とぶつかることはないが、自分の身体を通り抜けられるのは、決して気持ちいいことではない。だから、オレたちD Rが実体を避けるといのが通常だった。人ごみだと、その避ける技術も高度なものが要求される。やっとの思いで対岸にたどりついたときには、軽い疲労感を感じた。

「ヴァンく、だっこ」

幼女が小さな両手をオレに差し出した。つぶらなピンク色の瞳がオレを見上げる。波打ったハニーブロードにふっくらした頬という非常にかわいらしい外見の幼女だが、中身はオッサンだとオレは断定している。仕草がかわいいはなりきっているからだろう。最近のガキよりもよっぽど愛らしいのが恐ろしい。オレの中で立派に変態の称号を与えている。それでもオレは、ルネの頭を撫でた。気持ちよさそうに目を細める。そうやって、抱きついてこようとすることを、頭を抑えて阻止した。

「で、こんなところに集まってどうしたんだ？」

「あのね、ルネたち賭けしてたんだよ。ヴァンがどこから出てくるかって。セインはこっちで、カインはあっち。ルネは今日はもう来ないって方にしたんだ。みんな外れだね」

「……」

あどけない口調で、さらりといった。人差し指を口元において、視線は斜め上だ。

「ルネはオレに来てほしくなかったのか」

「違うもん。最初から期待しないでいれば、ヴァンがこなくてもがっかりしないでしょ？ それに、来てくれたときはとてもうれしくなるよ」

とろけるような笑顔がよけいに胡散臭い。そうかそうか、と頭を撫でて、ふわふわした髪をくちやくちやにしてあげた。

「ごめん」

黒髪の少年が俯いてすまなそうにつぶやく。

「いいさ」オレはセインに向かつて笑いかけた。大したことじゃない。どうせルネにうまくのせられてしまったただけだろう。

「カイン、何を賭けてたんだ？」青年は誤魔化すように眼鏡を調整した。

「さあ？」

目が泳いでいる。ロクでもないことだ、とあたりをつける。が、お流れになった賭けだ、まあいい。ぼんぼん、とルネの頭をやさしくたたいて、オレは賭けを忘れることにした。

オレたち四人は、こうやって夜の大久保でつるむ。別段約束をしているわけではない。なんとなく気がついたら暇つぶしに来ていた。大抵はみんなでゲームしたり、雑談したり、たまに散策という名の冒険をしたりする。ルネはオレをいじり、オレはいじられ、セインとカインは肩を寄せて苦笑する日々だ。

さて何するか、とカインとセインへ向いた。今日は金曜だ。学生の二人を気遣うことなく、とことん遊べる。

「ねえ、ヴァン。ルネが」

「ルネ？」

オレは屈んでルネを覗き込んだ。ルネは絶えずはしゃぐ。そのルネが黙った。

焦点のあわない目。ゆっくり左腕を上げ、どこかを指で示した。その様子は何か操られているみたいだ。

「こっち」

ピンクの瞳に光が戻った。この変な行動はわざとだろうか。ルネならば珍しくはない。一応訊いてみた。「何が？」

瞬間、オレの左手首に、ルネが抱きついた。ビックリして手を引こうとしたが、抜けない。

「こつちにヒマツブシがあるの！」

幼女にあるまじき怪力で、ルネはオレの腕を引っ張り、闊歩した。ルネの身長は低い。オレは傾きながら、バランスを崩さないように、とても情けない姿で連行された。

三回実体にオレの身体を通り抜かれた時、ルネの向かう先から悲鳴があがった。

「何だ？」

人が集まってどこかを見ていた。

カインが背伸びをして先を覗く。カインは背が高いのでこういうときは得だ。カインが息を飲んだ。ルネが「ルネもルネも」と先を急ぐのを抑え、オレが道を作る。ルネは外見だけはちびで幼女だ。こいつが先頭では、下手をすると人ごみに押しつぶされるかもしれない。どこから人がわいてくるのだろうか。

人の壁が消えた、と思ったら最前列だった。飛び込んできた光景が一瞬理解できなかった。ルネが一步遅れてオレの隣に顔を出し、セインがルネの後ろに立った。

目の前で繰り広げられる奇劇にオレは何も言えなかった。セインも呆然としていた。

「うわぁ」

ルネの無邪気な声が響く。

DRのカップルが重なって路上に倒れている。血は流れていないが、唸り声が痛みを伝えていた。加害者だろう。DRの男が口から涎を垂らしながら、鉄パイプを振り回していた。

ARを視ていない女性が歩いている。男は女性をめがけて、鉄パイプを打ち込む。そして、女性の身体をすり抜ける。女性は男に気づかず、歩く。狂った光景だった。男は、女性と同じように、次々と通行人を襲う。ヒツヒツヒツと謎のうめき声をあげていた。

ARを視ない人ならよかった。深夜残業をしていたような疲れたサラリーマンも、酔っ払ったオヤジも、汚らしい浮浪者も、男の鉄パイプをすり抜けていった。次に男が標的にしたのは、浅黒い肌のアジア系の子供だった。手にはカードを持っている。娼婦に手振り身振りで話していた。物売りなんだろう。ARがすっかり視えるのに、商売に夢中で今までの喧騒に気づかなかつたらしい。男の鉄パイプは娼婦の頭をすり抜け、一緒に少年まで切った。少年は急に押し黙り、目を見開いて男を視る。娼婦は少年の変化に眉を顰め、きびすを返した。男はもう一度鉄パイプを振る。子供は逃げようとして、足を纏れさせ、倒れ込んだ。

少年は震えていた。オレたちは遠巻きに見物する。DRのオレたちにとって、あの狂った男も鉄パイプも実体だった。だから近寄れなかった。男は、少年に標的を定め、何度も鉄パイプを振り上げた。

「ひどい」

セインが顔を手で覆った。「そうだね」カインがセインに寄り添う。

幼女はオレの手を握りながら、子供ならではの無邪気さを装い、「ほおお」と奇行を凝視していた。

何度も何度も鉄パイプが少年の頭を通過する。虚ろな目で男を凝視していた。足元には商品が散らばっている。

「ドラッグだ」

ルネの澄んだ声が聞こえた。

「最近流行ってる、ドラッグプログラム」

オレは無意識にルネの手に力を込めた。

DRたちがだんだん集まってくる。ARの視える人間も、DRの男には触れない。誰も男を止めることができない。少年の足元に、液体が流れでた。

多分、大人なら、たかが映像だと、鉄パイプを無視できたかもしれない。あるいは同調を切断するとか。だけど、また小学生ぐらい

の子供だった。目から涙を流し、男が鉄パイプを降り下ろす度に殺される。警察は来ない。気分が悪くなった。

「ヴァン？」

顔を背けたオレを、ルネが不思議そうに覗き込んだ。

「……確かに、見て楽しいものじゃないね」

幼いのに、変に老成した声だ。

男がまた鉄パイプを振り上げた。もう少年は反応しない。男の唾液はまだ口から溢れだし、周囲に散る。鉄パイプが、少年の頭を通り過ぎようとした。

「あ」

瞬間、男が消えた。声を発したのはカインだったか、セインだったか。

自失呆然とした少年にやっと異変を感じたのか、ARの視えない人々が少年を介抱しはじめた。

「終わったね」

セインが口を開いた。俯いている姿は女性的だ。

「残酷だった」

現場から離れた一心で、大久保の雑居ビルに場所を移した。廃ビルで、浮浪者や不法滞在者の寢座になっている場所だ。一ヶ所だけ、実体では侵入不可能な場所、完全に埋め立てられてしまった地下に、DR専用の部屋がある。オレたちしか知らない特別な場所だ。カントリー風に部屋が統一されていて、パッチワークのカーペットが敷かれている。ルネは唐草色のソファにちよこんと座っていた。

「ルネ、さっきドラッグっていつてたけど、何？」

「んー？」

ルネが小首を傾げる。視線は斜め上。カインは真剣にルネを見つめていた。オレは仏頂面でソファにもたれかかっていた。セインもあれから俯いたままだ。

「この前一人でここに来た時もああいうの見たんだ。あそこまで酷

くはなかったけど、虚ろな眼で、ブツブツとつぶやきながらどこかへ歩いてた。DRだったよ」

カインが眼鏡を押し上げる。

「ぼくも……。気味が悪かった。梅田で見た」

「ヴァンは見たことある？」「ない」ルネの声に即答する。今日はおもしろくない。空気が重い。さっさと帰ってやるうと思った。帰っても何もすることがないが。

「最近ね、」

ルネが頬杖をついて、DR化されたジューズを啜った。

「ドラッグプログラム？　っていうのがあるんだって。ルネも見たことなかったんだけど」

「電子ドラッグ」

「んーちがうかなあ」

ルネはカインの言葉を否定した。「電子ドラッグてのは、60年ほど前に流行ったんだけど、あれって動画なんだ」のほほんとした台詞で、ルネはのんびり説明しはじめた。電子ドラッグが登場したのは1990年代の終わりかららしい。チカチカした動画と独特なリズムの音楽で視聴者に酩酊感や多幸感、たまに幻覚をもたらすものだ。依存症も多少はあるが、睡眠薬よりも酷くはない。何度も電子ドラッグを視聴することで耐性が出来、そのうち「見たい」なんて欲求もなくなる。一時的に流行することはあるが、すぐに廃れる。このサイクルを今まで数度繰り返してきた。

「要は電子ドラッグに飽きちゃうってことなのかな」

あんなの、ドラッグですらないよ、とかわいい口が吐き捨てた。

オレは帰るタイミングを伺いつつ、ルネの説明に耳を傾けていた。

ルネはコンピュータやネット、いわゆるITサービ系に強い。

裏の情報は何でも知っているんじゃないかと思われるぐらいの博識だ。しかも今だけではなく、古いものまでよく知っていた。だからオレは勝手にルネの中身をIT業界で働いているオッサンだと見ている。どう考えても10代や20代で得られる知識量ではないだろ

う。

「今日のは多分ドラッグプログラムってやつなんだけど、それはね」
ルネの小さな指が、ぼーっとしているオレの額をつつく。

「ここにね、直接作用するの」

「やめるよ、ルネ」

ルネの手を払おうとするのを見事によけて、さらにオレの頭を指した。

「セイン、カイン。人がどうやって快楽を感じるか知ってる？」

二人はオレの予想通り、首を横に振った。

「ここに、腹側被蓋野っていうのがあるんだ。生物で習ったかな？
中脳にあるんだけど」

「確か、大脳への信号中継だっけ」

カインの台詞に、うんうん、とにこやかにルネが頷いた。

「ここからね、このへんの奥に大脳基底核っていうのがあるんだけど、
ここに向かって、ドパミンが分泌されるんだ」

オレの頭をルネの指がなぞった。

「ドパミン？」

興味を引かれたのか、セインが顔を上げた。ルネは得意そうな顔を
をして、さらにオレの頭を触りまくる。

「快楽物質とか、脳内麻薬物質っていったほうが通りがいいかな。

このドパミンが分泌されて、さらにドパミン受容体と結合すると、
こう」ルネが謎のポーズをとった。「びびび〜と電流が走って気
持ちよくなるんだ」

「なんだか難しいね」

「別に理解しなくてもいいけどね」

「ドラッグプログラム？ は……」 「ドラッグプログラムはね、そ
の快楽を感じるプロセスを、プログラムでなぞるものなんだよ」カ
インの後をルネが引き継ぐ。セインとカインの頭の上に、大きなク
エッションマークが浮かんでいた。ルネは一息ついた。袖をたくっ
て、自分の細い腕を見せた。細いのにぶっくらして、大きいマシユ

マロのようだった。上腕に見覚えのあるギアがつけられている。オレのオンボロとは違い、最新版だ。水晶のようなアクセサリがギアに垂れ下がっていた。

「ギアがどういうものかは知っているよね。DRと実体の変換器。DRでも味覚、聴覚、触覚、痛覚、臭覚があるのはなんでかな？」

どうして、自分は「実体」じゃないのに、実体と同じように現実を感じられるのかな？」

ルネは別に答えを期待しているわけではなかった。ルネは自分のギアを撫でる。

「このギアが、ルネたちの感じるものをパルスに変換して、直接脳に流し込むんだよ」

桜色の小さな口が、ゆつくりと動いた。

「つまりね、ギアがルネたちの脳神経を制御してるの。こいつを狂わせたら、ドーパミンも流し放題なんだよ」

静寂。

オレはだんだん疲れてきた。今日はこんくだらない話をしにきたわけではない。単なる暇つぶしだとしても。だが、まだ話が終わらないことをオレは知っていた。誰かの口が開くのを待つ。

「でも、何でそれがあんなに狂ってしまうんだ？」

カインだ。ルネもその問いを待ち構えたように、にこやかに笑った。

「統合失調症と一緒になの。ドーパミンは興奮を伝える神経伝達物質だから感情に作用するでしょ？ それを不自然に増やしたら、当然情緒不安定になるわけ。幻覚もね、それかな。それに、ドーパミンが過剰に分泌されたままだと、ドーパミンを受け取る場所、ドーパミン受容体っていうんだけど、そこで受け取るドーパミンの量が減っていつちやうの。そしたら、ドーパミンがたくさん脳にあっても、あまり快楽を感じなくなっちゃうでしょ。結果依存症になって、アウト」

ルネが人差し指で首を切る真似をした。

「麻薬と、同じだよ」

「……」

セインとカインの中身は学生だ。オレと同様に重い話かもしれない。一人嬉々としているルネだけが浮いていた。

「オレ、帰るわ」

一息ついてオレンジジュースを飲むルネの頭をぽんぽん、と軽く叩いた。

「じゃあな」

ルネが何かいう前に、セインとカインに挨拶し、ギアを捻る。パルスが流れ、その先は、相変わらず汚いオレの部屋だった。

2088年9月13日(月)

2088年9月13日(月)

セインからメールがあつたのは、あれから3日後のことだった。どこかで会えないかというたってシンプルな内容で、それ以外は何も書かれていない。オレはセインと格別親しいというわけでもなく、メールですらやりとりをしたことは数えるほどしかなかった。不思議に思いながら、オレはただどしく了承の返事をした。

あの日から、何となく大久保には行っていない。元々大久保へは毎日行くこともあれば、3ヶ月ほどまったく近寄らないこともある。今は気分が乗らなかつた。だから、セインとは代々木で待ち合わせをした。しばらくあの少年の身体になる気にもならなかつた。ガラスが写すオレの姿は、セインと同じような十代後半の身体だ。黒髪で中肉中背、かっこよくもなく、といって格別醜いわけでもない。グレーのパーカーにはき古したジーンズ。まず人々の記憶に残らない平々凡々の姿だ。

22:30。代々木駅西口の端でギアを確認する。約束の時間だが、まだセインの姿は見えなかつた。代々木駅も、実体とDRが溢れている。東京は人が多い。やはり少年の姿でくればよかつたかな。とため息をついてギアを弄る。セインにオレがわかるだろうか？ オレのギアは驚くほど古いため、ろくな機能もなく、当たり前前の映像付き通信すらできない。識別信号さえ発することもできないし、受信することもない。壁にもたれかかつて、人ごみを見た。

モノレールを使うのは実体のみで、改札口と駅構内はDR避けのバリアが張られている。見事に実体の人間のみの世界と、実体、DRが混沌としてまじりあっている世界に、改札口という境界線が引かれている。意外におもしろい。まるでオレたちDRが異分子みたいに、改札口から先にいけない。ふざけたパンダのDRが改札口に

突進しては、見えない壁に弾かれている。DR初心者なのだろう。どうして先に進めないのか、わからないようだった。決められた物のみを通す機能は選択透過性っていうんだっけか、遙か昔に教わった記憶が頭を掠めた。

「ヴァン？」

振り向いたら、高校生ぐらいの少女がいた。DRだ。黒のセミロングに黒のワンピース、少女らしい清楚感がある。表情が固いのは緊張しているからか。どこことなく、雰囲気じゃ覚えがあった。

「セイン？」

「あ、やっぱりヴァンだったんだ。そのギア、絶対そうだと思ったんだ」

彼女は頬を染めて破顔した。確かに、今時こんな旧式をつけているやつはいない。オレの複雑な表情に、セインは拗ねた顔をする。

「もう、これがないとわかんなかったんだからね」

「すまない」

オレだけが謝るのは違う気がしたが、セインが満足そうに微笑むので、まあいいか、とオレも有耶無耶な笑みを返す。

「セイン、それで、用件はなんだ？」

「うん、あの、ここじゃなくて、どこか落ち着ける場所ないかな？なるべく人のいないところで……」

恥ずかしそうに俯く姿が、少女姿にはよく似合った。このセインの様子に、慣れてない男ならきつと勘違いをするだろう。オレは不安になってきた。セインの仕草は打算的な女性のもでもなく、男性が女性に扮した大げさなものでもなく、自然な少女らしさがある。無言でセインを見ていると、急にはっとしたように彼女が顔を上げる。真っ赤だ。

「あのっ、べ、べつにそんな」

「わかってるよ」

セインが普段の少年姿をしているのは、恐らく知人に見られても

他人と認識させるように、という意味だろう。代々木は大久保から近いし、オレたちはよくこの辺で集まる。知人も多くはないが、いないわけではない。

「どこか、そういう場所に心当たりある？」

彼女は首を振った。オレはため息をついた。

「この辺だったら、一ヶ所だけ知ってるよ。後は……、一回リブートしないと行けないな。北海道とか、大阪とかだから」

「じゃあ、そこにいこう」

オレは曖昧に頷いた。

「ヴァン……、ここって……」

セインは引きつった笑みを浮かべながら、壁に向かって指さした。心なしが、顔が悪い。

「ああ、そうなんだ」

オレは神妙な顔をした。

壁からうねうねと赤黒く気持ち悪いものが動いている。ぬらぬらと薄暗い照明を粘膜が反射していた。

「触手クラブなんだ」

観念したように告白した。セインは何とも言えない表情でオレを見上げる。その顔には、でかかど「変態」と書いてあった。

「あのなあ……」オレは触手を避けつつ、壁に近づく。ギアに手を当て、短い信号を壁の小さなアンテナに送った。触手が溶けて消える。

「オレはこんな趣味はないよ。大久保の地下ほどじゃないけど、穴場なんだ。極一部のマニアックなヤツしか知らない。しかもDR専用で、個室。こんな店だから、セキュリティだけは充実してるだろ。秘密話にはもってこいだ」

「そうなんだ」

耳まで紅色に染めながら、無理矢理納得したようにセインがつぶやいた。学生にはまだ早い店だったかもしれない。

伝統的な悪徳の街、新宿歌舞伎町の裏路地にひっそりと構えている店で、すべてARで作られている。そのくせカモフラージュされているので、一見するとただの壁だ。一ヶ所だけDRバリアが張られていない場所があつて、その壁をすり抜けると、このいかにも如何わしい触手クラブなる場所に出る。オレのクレジットから幾許かのお金が引かれ、この気色悪い部屋に導かれた。

「まあ、落ち着けよ」

気休め程度にセインを宥めた。触手が消えた後にソファとテーブルが出てきたので、オレは遠慮なく座る。

「う、うん」

恐る恐る、彼女はソファを触った。

「これ、あの变なの出てこないよね」

「大丈夫だよ、オフにしてるから」

「そ、そう」

意を決したように、思い切つて腰かけるセインがかわいらしい。オレの隣、距離は60cmほど離れている。隅っこの隅っこだ。想像以上に初々しいぞ。大久保では見たことがない一面だったから、新鮮だった。

セインは一息ついて、ワンピースのポケットから、小さなチップを取り出した。どこにでもある量産品で、缶コーヒー一杯程度の値段で購入できる。

「これ」セインの目は真剣だった。「ドラッグプログラム……だと
思つた」

「……」

チップを手にとつた。DR化されているが、現物はセインの本体が持っているのだろう。裏を見ると、小さな文字で、256M、と

書いてある。256×8×10の6乗ビット。だけど、実際はこれよりもはるかに小さいプログラムだろう。

「3日前あんなことがあって、ずっと怖くて……、それで」

セインの目が潤んでいる。必死に言葉を紡ごうとしては、言い淀んでいた。

「これ、みてみていい？」

小さく彼女は頷いた。

ギアにチップを当てる。チップとの接触部分が一瞬だけ青白く光った。オレの前にスクリーンが映し出され、文字が流れた。スクリーンをなぞって、中身を読み取るうとした。

「だめだ、壊れてる」

スクリーンの文字は意味をなさない。オレの操作にも何も反応しなかった。ファイル構造さえわからない。

スクリーンを消して、チップをセインに返した。

「コピーガードが使用制限がついてたのかもな」

セインはびくつとしたように反応し、俯いた。

「どこで手に入れたんだ？」

その台詞が引き金となつたのか、急にガタガタと震えだす。彼女は背を丸めて、必死に震えを抑えようとしていたが、その姿が余計に大げさに見せた。

握りしめた彼女の手に、雫がぼたぼたと落ちてきた。オレは肩をすくめる。「まあ、いいんだけど」嗚咽がきこえた。

待った。彼女が落ち着くまで、オレはぼーっと天井を眺めた。セインはここが触手クラブってことすっかり忘れてんだろうな、なんて思いながら。

「それ、学校の先輩から、貰ったの」

ぼつん、とセインが言った。

「一週間ぐらい前に、先輩がおもしろいものあるからって。誰も言っちゃだめだよ、特別だからって」

オレは黙って聞いていた。セインの声は震えていた。

「私、大阪に住んでるんだ。3日前の、梅田で見たっていった狂った人、先輩だったの。私、その時は実体で、何もできなかった」
DRと実体は、触れ合うことができない。DRはただの映像だから。

「駅の構内に座り込んで、シャープペンシルを自分の手に刺して啞ってた。でも、血は飛ばなくて、みんな気づかなくて、私も怖くなくて、逃げたの」

セインの手に力が入る。

「先輩、昨日死んじゃった」

「……」

「わ、私、ドラッグプログラムなんて知らなかったの！ 麻薬なんて、そんな……、知ってたら、絶対使わなかった……！ あんな風に狂うなんて、私は！」

オレは、60cmの距離を詰めて、セインの頭を撫でた。さらさらとした髪の毛が指の隙間を流れる。小さな肩。

「ヴァン、助けて」

呟きにもならない、小さな声だった。幼い子をあやすように、撫でつけた。セインの顔は見えない。

「なあ、なんでオレ？」

素朴な疑問だ。格別コンピュータにも詳しくないし、コネもない。とても頼りになるとは思えない人間だ。

「ルネのほうが格段に詳しいだろ。カインも頼れるし」

「無理だよ。ルネ、怖いし」

嬉々としてドラッグを語るルネ、わかる気がする。

「それに、カインは、あの、学校の同級生なの」

関わらせるのはまずいな。セインも知られたくない、というように顔を背ける。

「それで、もう頼れるのって、ヴァンしかいなくて……」
消去法かよ。

申し訳なさそうにオレを見るセインに、思わず笑みがこぼれた。

普段ルネにやるように、ぽんぽん、と軽くセインの頭をたたく。
「いいよ、できる限りのことをやってみる」

2088年9月14日(火)

2088年9月14日(火)

「ただし期待するなよ」

そう逃げ場を作ったので結局何もませんでした、じゃまずいよな？ オレは自問した。

現在、東京都新宿区大久保一丁目、築五十年の廃ビル。1Fからしかないビルで、オレは迷わずB1Fへのびる階段を降りた。例のルネの隠し部屋だ。ボロボロでひび割れた木のドアを開けると、スタイリッシュな部屋が現れる。透明なテーブルに黒色のソファ、ワインレッドの小物がアクセントになっていた。この部屋はすべてARでできているので、模様替えに金銭はかからないし、手軽だ。ルネの気分によって簡単に家具や壁紙が変わる。金曜までは木がベースのカントリー調な空間だった。六畳ぐらいの大きさで、四人で入ると、ちょうどいいか狭いぐらいだった。今はひどく広い。

「ルネは、いないか……」

18:03、社会人ならまだ仕事かもしれない。オレはソファに腰掛け、スクリーンを出した。数時間前に「ドラッグ」「プログラム」「DR」「麻薬」「チップ」等をキーワードとして情報を抽出するエージェントを流しておいたのだ。運がよければ有益なサイトがヒットしているかもしれない。AR、DRが発達した現代であっても、情報の主流はテキスト・動画ベース、つまりインターネットから得られることは昔から変わりがない。エージェントは、これらインターネットを巡回し、有益な情報を収集する。

一覧のほとんどは巨大掲示板からの投稿だった。51302件。

一般サイトや動画はほとんどない。オレの予測通りだ。巨大掲示板は、ガセ・真実が混在した場所だ。一般ユーザが匿名と信じているからこそ、犯罪やそれに近い情報が平気で投稿される。

オレはスクロールし、軽く一覽に目を通しはじめた。

「ふうん。ドラッグプログラム」

思わず手が滑ってスクリーンが消えた。

「ルネ?!」

振り返えると、愛らしいピンク色の瞳とぶつかった。少々視線を下にずらすと、床に箱があって、さらにその上に小さな靴が見える。高さが足りなかったらしい。

「驚かすなよ」

オレがこの部屋に来てから、まだそんなに経っていない。

「いつからいたんだ?」

「ヴァンがおもむろにスクリーンを出した時からだよ」

ルネはトテトテと歩いて、向き合うようにオレの膝の上へちよこんと座る。

「はじめたね。ヴァンがこの時間に、しかも一人でここにくるなんて。ルネに用事?」

ルネは小首を傾げた。この部屋はルネが作った場所で、「いつでも遊びにきてね」といわれていたが、ずうずうしく訪ねたことはなかった。ただ、確実にルネに会いたければ、ここしかない。オレと同じく、ルネもいつも大久保に現れるわけではないのだ。そして、オレはルネの連絡先を知らない。

「ああ。ルネ、ドラッグプログラムで知ってること全部教えてくれないか」

「ドラッグプログラム、興味あるの? この前のルネの話、耳を塞ぎたいって顔してたのに」

「色々あるんだよ」

ルネは上目遣いでオレを覗き込んだ。思わず目を逸らした。無垢そうな表情だが、それがただの錯覚だということをおレは知っている。

「ルネ、おすすめしないなあ。好奇心だけで手を出すと危険だよ」唇を尖らせてる少女はなかなかかわいらしい。宥めるようにふわ

ふわの頭をなでなでしたら、幼女は気持ち良さそうに目を細めた。

「まあ、いいか」

くるりとルネが回って、オレに抱きかかえられるように座り直した。

「さっきのスクリーンだしてみて」

スクリーンの光を細いルネの金髪が反射する。スクリーンには、エージェントが拾ってきたドラッグプログラムに関する情報の一覧が並んでいる。一瞬で目を通したのか、軽く頷いた。

「よく集めてるね。ヴァン、それじゃこれ、時系列順に並べてもらっていいかな」

一瞬で並び替えが終了した。一番古い情報は、2075年12月だ。そこから、2077年6月、2083年9月と続く。年月も飛んでいて、キーワードで偶然引っかけたような内容だった。2085年から徐々にヒット件数が増える。9076件目、ルネが指さした。「ストップ」

2088年8月20日。

「……」

ルネは何もいわない。オレはスクリーンを走らせた。2088年8月20日、2088年8月20日……2088年8月21日……。

「ルネ、これは」

「うん、気づいたね。2088年8月20日から急激に『ドラッグプログラム』の情報が増えるの。2088年8月20日前後は単なる噂話だったんだよ。ドラッグプログラムってのがあらしいてぐらいの、他愛もないもの。ルネが存在を知ったのもこの頃」

ルネが指を走らせ、一点を指した。2088年8月25日、ドラッグプログラム体験談のようだった。

「この日から、体験談が増えていくよ。そして、9月2日には……」

小さい手がスクリーンを操作する。オレが集めた情報ではない。どこかへアクセスしているようだった。パッとスクリーン一杯にでたのは、変死体の情報だった。死体の身元や、発見状況、解剖の記

録が綿々と綴られている。「外傷なし」「薬物反応なし」「ドパミン過多」の文字が目飛び込んだ。オレは喉を鳴らした。

「多分、ドラッグプログラムの中毒者。体験談の登場から一週間ちよいつてところかな」

オレは別のところで恐ろしくなった。震える指がスクリーンをさす。

「なあ、ルネ、これって……、警察のマル秘情報じゃないか？」

「そうみたいだね」

「オレまた不正アクセス禁止法でしょっ引かれたくないんだけど」

「大丈夫。警視庁とか警察庁にアクセスしたわけじゃないよ。この手の情報は探せばネットに落ちているもの」

「でもなあ……」

なんていいながら、しつかりオレはその情報を自分のサーバに保存した。

「それから、こういうのもあるよ」

ルネがオレの膝から飛びおりる。肩のギアを操作した。ガラスのテーブルの上に、小さな映像が浮き出た。

「これ……」

ミニチュアの男が鉄パイプを振り上げ、暴れていた。つい先日見た光景だ。

「あの人だかりの誰かが撮ってたみたい。それと」

映像が消えて、代わりに浮かびあがったのは、先ほどと同じような変死体の報告書だ。顔写真は、弱そうな黒縁眼鏡で七三の学生だ。死亡日時は9月11日午前3時だった。

「あのDRの実体だと思うんだ。ほら、この写真の手首にしつかりギアついてるでしょ？ あの動画の男と同じギアだよ。量産品の安物だけど、同一人物って可能性はあるよね」

オレはルネの情報収集に舌を巻いた。それと同時にルネが空恐ろしくなった。

「ルネが教えるのはここまで。ドラッグプログラムの販売経路？」

とか、入手方法？　とか、そういった情報はほとんど出回ってないよ。何だか得体が知れなくて、気持ち悪いね。追って危険かどうかの判別もつけ難い。だから、ヴァンもあまり関わらないほうがいいよ」

ルネが言外にこれ以上の情報収集は安全を保証しない、と告げた。オレよりもよく知っているルネのことだから、そうなんだろう。頭には、セインのDRがちらついた。うつむいたときの小さな肩。震えた声。

「ありがとう」

改めてルネの頭をなでる。

セインはオレにどこまで求めているのだろうか？　どう助けて欲しいのだろうか？

「おかげで助かった。じゃあ、行くよ」

オレはギアに手を当てる。ルネがじつとオレを見上げていた。

「ヴァン、あとね」

「何？」

「サイバー課が、ドラッグプログラムの件で動き始めたよ」

無表情でルネが告げた。

広大な北海道の草原に、ぽつんと一件の建物がある。ファンシーが外観で、きらびやかな赤、青、黄、ピンクのケバケバしいランプが点滅していた。夜、暗闇に浮かび出たその場違いな建物の正面には、曲がりくねった文字でこう書いてあった。

『アリスの国』

建物はARでできているため、ARのパルスを受信しなければ、当然見ることはできない。DRでなければ入店は出来ない。いかに

もいかがわしそうなその建物のピンク色の扉を、勇気を出してギギと開く。すると、かわいらしい幼稚園児や小学生ぐらいの少年少女が「おかえり」と歓迎する。一人だけタレ目の青年が、「今日はどの子とおねえねしますか」とにこやかに訪ねる。来訪者を一様に見つめるつぶらな瞳。

ここは、幼児や少年少女の姿をしたDRの、売春宿だった。

そんな売春宿の、子供部屋を模したおもちゃの散らばる部屋にいるのは、オレと、男。決して子供ではない。

「やっと遊びに来てくれたのかと思ったのに」

タレ目の男がボヤいた。残念ながら、オレにはペドだとかロリだとか、さらにはシヨタだとか、そんな趣味も性的指向もない。だから、この店のオキヤクサマになることは、今後ともないだろう。それを、この男はいつまでたっても理解しようとしない。

オレの冷たい視線に気づいたのか、男が姿勢を正した。

「な、なんだよヴァン。別に法に背いているわけでもないし、お前に非難されるいわれはないぞ」

開き直った。この幼児趣味専用の売春婦・夫はDRこそ小学生までの少年少女の外見をしているが、中身は立派に成人した実体であるらしい。高額で雇っている。さらにはほとんどが男性であるそうだ。男のほうに男の扱い方を知っているから、とはタチバナの弁だ。ごもつともだ。だから一部では人気の店になっている。

このタレ目の男、タチバナは歴とした『アリスの国』の経営者である。

そして、幸か不幸か、オレの唯一の実体での知り合いだった。

「別に責めているわけじゃない。仕事中に突然来て悪かったな」

「いいさ、俺がいなくても店回るし。というか、いない方が店的には売上が高くなるんだよな。でも、あそこにいると保父さんになった気分になって楽しいんだよ」

「あっそ」

タチバナは子供に欲情する嗜好はない。だからこそ純粋にビジネスとして店が成立していた。オレにはどうでもいいことだが。

「で、どういった用件なんだ。ヴァンがここにくるなんてものすごい珍しいことなんだけど」

「ああ、あのな……」

洗いざらいにドラッグプログラムのことを話した。セインのこともだ。ルネからもらった情報もスクリーンに映して見せた。タチバナが唸る。

「もっかい見せてもらっていい？ さっきの変死体のやつ」

スクリーンにルネからいただいた調査書を表示した。

「すごい！ 本物か！」

「何が？」

不思議そうに訊くオレに、「マジかよ」とタチバナが天を仰ぐ。

「これって、あれだろ。エマノン」

「はあ？」

「天才ハッカー。しらねえの？ すごい騒ぎになってんのに」

「知らない」

タチバナが額に手を添えてため息をついた。こいつの動きはオバーすぎる。

「お前、山籠りしてたの？ どの情報弱者よ」

「……」

オレはハッカーなどに興味はない、そう言おうとしたら、タチバナが勝手に語り始めた。

「つい最近な、警視庁のサーバでルートキットが発見されたんだ。

それな、置かれたの3年前なんだよ。3年前！ すごくないか、3年間も警視庁ハッキングされて気づかねえの」

「何かのネタか？」

ルートキットは、ハッカーがシステムに侵入した後、2回め以降のアクセスを楽にするために置くツールだ。警視庁は防衛庁とともに、日本でもっともハッキングしにくいシステムとされていた。そ

の警視庁に3年もハッキングしてて警視庁が気づかないとは、作り話にもほどがある。オレはタチバナの顔を窺った。至極真面目だ。「ヴァン、見てないのか？ 今ちようど警視庁が『ペネトレーションテスト実施しました』て慌てて公報したの、祭りになってるぞ。三年間もペネトレーションテストはないわな。ハッキングされたの誤魔化しすぎ。」

警視庁にアクセスしたら、タチバナの言う通り、小さくハッキングをわざと行ってもらってセキュリティ強度テストしました、という旨の記事が載っていた。

「で、タチバナ、それとこれがどう関係あるんだ？」
調査票を示した。

「大有りだろ。それ、多分エマノンがハックして流した情報だろ。じゃないとこんなもんネットにあるわけねえよ。ほらみる」

スクリーンに「極秘」の文字が見えた。ルネがどこにでも落ちている、と言っていたので、すっかり忘れていた。

「へえ」

「なんか感動だな。まさか現物見えるとは思わなかった。で、何の話だっけ」

脱力した。

「お前なあ。タチバナ。ドラッグプログラムだよ。さっきからずっと言ってるだろ」

「ああ、そうだった」

タチバナがタレ目を細めた。タチバナはこんないかがわしい店を経営しているだけあって、セキュリティや法関係は専門家の域だ。警察のサイバー課の行動や世間の空気には敏感だ。タチバナはルネとは違う視点でこの世界をみていた。

「正直、俺は今までドラッグプログラムなんぞ聞いたことがなかった。俺の客にはこんなジャンキーみたいなやつがこなかったし、話題になるといつても、一部のアングラだけだ。俺の業界とはずれてる部分だしな」

オレは頷く。

「でも、このドラッグプログラムですでに分かっていることもある」「合法」

声が重なった。タチバナがニヤリと唇を歪める。

「わかっているじゃないか。そうだ、このプログラムは法の範囲内にある」

ドラッグプログラムは、薬物ではない。だから、各種薬物取締法には触れない。ドラッグプログラムはコンピュータウイルスではない。だから、サイバー系の法にも触れない。つまり、現時点では、ドラッグプログラムを大々的に販売することも可能だ。

「噂レベルではじまって、実際に被害も出始めているが、販売サイトはない。販売経路すら不明、ね」

カラカラとおもちやのプロペラが回っていた。今はもうレトロになった飛行機の模型だ。この守られているような聖域で子供を犯すやつらは、一体どんな怪物だろう。

「ま、そういう販売方法もあるだろう。需要が高い分だけ、値段は釣り上がるもんだ。麻薬のような依存型なら、その売り方はどうかと思うけどな」

「そうか」

オレはタチバナの手に視線を移した。トントン、と机を叩く。

「まず、整理するか」

- ・ 噂 2088年8月20日
- ・ 体験談 2088年8月25日
- ・ 中毒者死亡? 2088年9月2日
- ・ 合法(サイバー課が動いている?)
- ・ 256MBのチップ

スクリーンに出したオレに、タチバナが生ぬるい視線を送ってきた。

「おいおい、なんだこの微妙なまとめ方は。オレの話聞いてたのか？」
確かに5行で終わってしまった。だが、現状ではこれだけしか分かっていないのも確かだ、とオレは思っていた。タチバナがスクリーンに付け足す。

- ・販売者？
- ・販売経路？
- ・販売規模？
- ・作用？
- ・中毒者の摂取頻度と回数？

「まだパツとだしただけでも、わかっていることがこれだけある。まずはこの表を埋めることだな」

さすが経営者だ。

「それから、ヒントだ。チップ、見たっていったよな」

「ああ、DR化されているけど、元は実体だよ」

「だな、お前鈍すぎだ」

デコピンされる。

「よく考えるよ、ドラッグプログラムは実体で提供されてるんだ。

そこから探れば、ある程度はわかってくるだろう」

「ああ、そうか」

打たれたところがジンジンと痛くなってくる。どれだけ力を込めたのだろうか。セインだな……、弱々しい彼女を思い浮かべて、オレは額を抑えた。

「俺の方でも何か調べてみるよ。裏の道は裏っていうしな」

「ありがとう、タチバナ」

「いいさ」

タチバナがにこやかに笑った。

「今度店を利用してぜひとも感想を聞かせてほしい。着飾らない意

見が欲しいからな」

「死ね」

「冗談だ」

真顔になった。

「まあ、ドラッグプログラムのソースが手に入るようなら、欲しい」
「なんでだ？」

タチバナが、オレを見た。

「ドラッグプログラムを参考に性的快感を思いっきり高めるプログラムを作る。それを店で使つと……、大繁盛だな」

「つぶれるこんな店」

オレは立ち上がった。深夜0時近い。そろそろ店が忙しくなる時間帯だ。

「じゃあな」

「危なくなつたら引けよ」

オレとタチバナは互いの拳を合わせる。これがオレたちの挨拶だ。

2088年9月15日(水)

2088年9月15日(水)

オレは、逃げた。一昔前の摩天楼のような建物、スラツと地面から伸びている。歴史構造物のエンパイア・ステート・ビルディングやクラスタールビルディングのようなクラシック要素を備えた超高層ビルが整然と並んでいた。誰が思うだろう。このビルの一つが学校だとは。

大久保が生ゴミのようなごじゃごじゃした饅えた臭いで、新宿は埃っぽい産業廃棄物の臭いがした。三宮は、ほんのりと清楚で甘い香りだ。走りながら、ほんやりと思った。

久々にみる太陽がまぶしくて、オレは目を細める。地面は、無愛想なアスファルトではなく、茶色やクリーム色のレンガが敷き詰められている。歩行者用の柵にもレリーフが掘ってあった。60階を越える高層ビルが乱立しているにもかかわらず、三宮はどこか乙女らしい雰囲気は漂うおしゃれな街だった。DRバリアがあちこちに張り巡らされているためか、DRの姿は少ない。そして、東京のよくな奇抜な姿のDRは皆無だった。街全体がオレには似合わないと思難しているように感じた。

「待つてよ、ヴァン」

清楚な女子校生が追いかけてくる。オレは逃げる。少女は走る。

オレも走る。「すまん、帰る！」

「ちよつと、恥ずかしがることないじゃない！ DRと追っかけてこしてる私のほうがッ、よっぽだよ。待つてって！」

当然待たない。

一瞬、少女の気配が途絶えた。不思議に思っ後ろを振り返って足を止めると、オレの進行方向で声がする。

「ヴァン」

「セイン……？」

につこりと笑った黒髪でかわいらしい彼女に、引き攣った笑みを浮かべようとする。どことなく黒いオーラが漂って見えるのは、ギアの故障だろうか？ 実体のセインはDRよりもちよっぴり怖いみたいだ。

「誰がどう考えたって逃げるだろ。セインが挨拶した途端、チューナーつけた警備員がオレに向かってくるんだぞ。しかも怖い顔で。オレは犯罪者か？ 第一聞いてないぞ」

お嬢様だとは。オレは精一杯怒った顔をしてセインを睨んだ。

聖ベルナデッタ学院はこの地域では有名な学校らしい。その高い偏差値もさることながら、生徒の中身が。オレは三宮は初めてで、待ち合わせの学園を確認するために30分ほど早く来た。学校というから、古くさいコンクリートの打ちっ放しに、定番の大きなセインスがない時計を建物につけて、正面には広大なグラウンド、という定番の土地を探した。当然ない。ここは天下の三宮で、オールドファッションな超高層建築物乱立地帯で、グラウンドみたいなダサイ土地の使い方はしないのだ。三回目に通りがかってやっとみつけたセインの学校は、69階建ての、てっぺんを見上げたら首が痛くなりそうなビルだったわけだ。ちょうど下校の時間で、ビルの入り口前にあるターミナルでは、黒光りするいかにもな高級車が列を連ねていた。と思ったら、空には何台ものヘリコプターが舞っていた。「別に、一般人だよ。親がすこっしお金持っているだけの」

「……」

コーヒーが注がれたチャイナボーンのティーカップに、セインが口をつける。ブラックなのが少々意外だ。今は聖ベルナデッタ学園近くのビルの、最上階のカフェでのんびりティータイムだ。オレはDRなので、注文はしない。ルネのように、実体のオレンジジュースをこちらにも投影させて、実体で飲んでDRで飲む真似をするなんて器用なこともしない。ため息をついてセインを見た。

実体だ。この前の女姿のDRとよく似ていた。真っ白い肌にピンク色の唇で、化粧っ気がない分清楚に見える。艶のある髪が肩口でさらさらと揺れた。かわいらしい制服を着ている。昔のセーラー服を現代風に変えたようなデザインで、クリームと緑がベースになっていた。結ばれた赤いリボンがアクセントになっている。スカートは驚いたことに膝丈だった。それが、どこことなくお嬢様の雰囲気醸し出していた。セインだけでなく、あの学校の規程なのかもしれない。

「セイン」神妙な声を出してみた。

「うん？」

「あの学校でさ、どこに校庭とか体育館があるんだ？」

オレの出身校は東京だが、ちゃんと校庭と体育館があった。四階建ての学校の屋上という場所だが。

彼女はティーカップをソーサにおいて、改めてオレを見た。

「やっぱり変わってるかな、校庭、ビルの中にあるとか、体育館も、ビルの中にあるとか、ヘリポートで送迎されている生徒もいるとか」

「十分規格外」

見るからに肩を落とす。

「そっかー、だから私とカインってどこか浮いてたんだね。うん、浮いてるのはあの学校なんだけど……」

大久保で、どこか世間ズレしているセインとカインを見かねてオレが拾った。その時を思い出しているのかもしれない。

「ねえ、そういえば、あのDRさつきからこっち見てなスクリーンに、セインから貰った先輩の情報を画面に表示したい？」

「気のせいだろ」

そういいながら、セインの指さした方へ向いた。雑誌を持って顔をかくしたDRがいた。女性のようだったが、ここからだとはよく分からない。ものすごく不自然だ。雑誌を持ったDRなど、オレは今まで見たことがなかった。わざわざ雑誌をAR化して読むなどと面倒臭いことをするよりも、スクリーンを開いた方が手間もないし便

利だ。しかも、目の前には実体のコーヒーが置かれていた。当然口はつけられてないし、コーヒーカップに触れることさえできないだろう。

「なんだろう？ 初心者かな？」

「かもな？」

初めてDRになった人間で、たまにAR、DRのことをよく理解しておらず、実体と同じような行動をしてしまう人がいる。例えば、場所を移動しようとして、モノレールの改札口につっこんでみるとか、飲食店に入ってつい注文してしまうとか。雑誌のAR化も、その延長なんだろうか。

「それでね、ヴァン、これが頼まれてたものだけど……」

セインがカバンから緑色の小さな箱を取り出す。

「へえ、tez社のRX300」

「うん。昨日買ったんだ」

小さくてかわいらしい箱にしか見えないそれは、カメラだった。取得した画像は必然的に設定を行ったサーバへ送られる。カバンにぶら下げておけば、アクセサリとしスクリーンに、セインから貰った先輩の情報を画面に表示したても違和感がない。最近人気が出てきた商品だった。

「じゃあ、サーバのアドレスを登録しよう」

オレの指示に合わせて、セインがカメラを操作する。オレは自分のサーバに接続し、カメラ用の通信ポートとMACアドレスを設定する。スクリーンを出して、接続確認をした。カメラを覗き込むセインの顔がうつった。

「OKだよ。じゃあ、目立たない場所につけて」

「うん……」

セインがカバンにカメラを取り付けるのを眺めていた。どこことなく手つきがぎこちない。

「あのさ、ヴァン」

「何」

「なんだか、探偵みたいだね」
頬をわずかに上気させたセインが、上目遣いでオレを見た。

そう、オレたちは今日、例のセンパイの家へ突撃するのだ。

2088年9月15日が始まったばかりの新宿、セインはうつむいていた。さらさらとした黒髪が流れる。少女姿だ。オレも前回とあわせ、アバターは青年にした。タチバナとの話の後、「会えるようなら会いたい」とセインを呼び出した。

「すまないな、急に呼び出して」

彼女は左右に首を振る。心なしか、顔色が悪かった。視線を上げようとしない。何か、おぞましいものから目を逸らすように……。

相変わらずの触手クラブの一室だった。今日は深緑色の、茶色い疣がついた肉塊がうごめいていた。扉を開いたら、セインが悲鳴をあげて逃げた。オレは醜い触手を消して、セインを呼びにいったのだが、入り口の角で丸くなっていて、なかなかついてきてくれなかった。前回よりも精神的ダメージが大きいらしい。赤黒い触手よりも、緑の疣のほうが悪手なのか。今も精神が回復していないようだ。

「もうわかっていると思うけど、ドラッグプログラムに関することだ」

セインの肩が揺れた。

「少し調べただけど、ドラッグプログラムはいまのところ合法だよ。だから、安心していい」

サイバー課が動いているというのが気にかかったが、伝えない。

「そうなんだ」

ほっとしたのか、セインの肩の力が抜けた。

「ただ、副作用のほうなんだけど、正直にいうとよく分からない。セインがいったように、ドラッグプログラムの所為で死人が出てい

るのは確かだと思う。金曜日の男覚えてるか」

「うん」

オレはセインの反応を窺った。「死んだらしい」顔をあげた。これまで調べたことを簡単に纏めた。ネットでは噂になっているものの、ドラッグプログラムの販売経路や実体が不明なこと、ドラッグプログラムの中毒者らしき人が何人が死んでいること。金曜日に暴れたらしき人物の変死体が発見されたこと。

「たださ、麻薬ってのは何回か使ううちに身体がボロボロになる。

一回のみの使用で死者が出るなら、セインもとくに死んでいるだろうし、ネットでもこれだけの書き込みはないだろうとみている」

「うん」

「だから、セインは犯罪に手を染めたわけでもないし、ドラッグプログラムで死ぬこともないだろうってことだ」

あれから、ルネとタチバナからの情報と、手持ちのデータを見比べながら、3時間かけて導き出した結論だった。

「……」

彼女は神妙な表情で床を睨んだ。助けると叫んだ彼女を、これで救ったことになるだろうか？ さて、タチバナにはどう話をつけようか。「解決した、ありがとう。ソース？ トンカツソースなら持つていつてやるよ」とでも。オレは立ち上がって伸びをする。話は終わったという合図だ。

「あのね、ヴァン……」

「なんだ？」

彼女はオレを見上げた。

「こんな短期間に調べてくれてありがとう。安心できたよ」だが笑みはなかった。真剣な表情だ。「でもね、私真相が知りたくなかった。何で先輩があんなものを持つてたのか。何で私にくれたのか。死んで、悔しい」

セインが顔を歪める。

「転入生だった私に優しくしてくれたのが先輩だったの。それから

ずっとお世話になってたんだ。それなのに。なんだか、自分だけ安全でしただってというのは、ずるい。私、調べたいんだ」

「あなの」

「これ以上は迷惑なのわかるから、私が調べるよ。でも、どうすればいいのかわからないの。よ、よければ手伝ってほしい」

オレは自分の額に手を当て、わざとらしくため息をついた。オレがこの時点でドラッグプログラムにけりをつけたかったのには、それなりに理由があった。一つは、セインにある程度の安全が望めるだろということ。もう一点は……。

スクリーンに、セインから貰った先輩の情報を画面に表示した。

「分かてるのか？ これ以上は、セインの実体と関わる必要がでてくるんだ」

タチバナとも確認済みだった。ドラッグプログラムを追うには、セインの実体の近辺から洗っていくのが確実だ。必然的に、セインの実体がオレにバレる。DRはハンドルネームで呼びあう。大昔のネット時代から続く風習だ。DRはネットと同じく、匿名同士の付き合いだ。ほとんどのDRは自分の実体を他のDRに関わらせることはないし、自分の実体を詮索されるのを嫌うDRも多い。いくら信頼をされていたからといって、実体を晒すのは好ましいことではなかった。実体が女性の場合は、さらに実体とDRの切り分けについて気をつかう必要がある。数年前、実体が女性だとわかった途端、築き上げたDR同士の友情が破綻し、友人だったDRがストーカー化して、実体の女性が自殺する事件があった。

彼女は話したことがないが、オレはセインの実体が女性であることを半ば確信していた。いくら男の格好をしていようが、仕草の一つ一つに女っぽさを感じるのだ。

「ここから先は、まずセインの先輩とやらを調べないといけないのはわかるだろう？ 先輩の氏名、通っていた学校、交友関係……。セインの実体の学校名も当然オレに知られるだろうし、実体と接触することもあるかもしれない」

おすすめでできない。そう締めくくった。

「別に私は構わないよ」

「おい」

オレはネットの常識とDRとしての意識、行動を語った。前から思っていたが、セインはどこかずれている。

「でもね、私、ヴァンのことは信用しているし」「そういう問題なのか」「だよ」

頭が痛くなってきた。

「大昔にはネットで知り合った人同士が集まって騒いでたってルネがいったよ」

「廃れた文化だろう」

オフ会というらしい。DRが広まってからは、そういうこともなくなつた。

「とにかく、私は自分の実体がヴァンに知られてもかまわないよ。でも、ヴァンが迷惑なら」

両膝におかれたセインの手がぎゅっと握りしめられた。

「私だけでやるし」

「……」

乗りかかった船というやつだろうか。最初にルネから「ドラッグプログラム」という言葉をきいたときも、聞き流すつもりだった。セインが助けてと叫んだときも、必要以上に関わる気にならなかつた。これも縁なのだろうか？

「わかつたよ」

諦め混じりに吐き出す。やっと、セインが微笑った。

現在時刻、16:53。カフェにはオレ一人が座っている。スクリーンの左には、セインのカメラから送られてくる映像が流れている。セイン曰く、三宮駅の北方面に例の先輩が住んでいたマンションがあるそうで、弔慰するのだそうだ。例の先輩は一人暮らしだっ

だが、急の訪問にも遺族が快く応じ、特別にマンションへ入る許可をもらった。セインと先輩との仲の良さが窺われた。ただし、高級なマンションに一人暮らしとは氣にくわない。

オレはここでお留守番だ。住宅等のプライベート空間には、DRが侵入できないよう、DRバリアを張るのが普通になっている。もしオレが実体であったとしても、生前関わりのなかったオレが訪問し、死者を弔うのは変だし、セインとの関係を説明するのも労力だ。オレがついていけなくても、オレの目代わりになるように、と用意させたのが例のカメラだった。

セインはまだ移動中のようで、カメラにうつるのは、地面にしきつめられたお洒落なレンガだ。オレは自分のサーバにアクセスする。セインの実体に寄り添うボーイッシュな少女の写真がスクリーンに表示された。背が高く、美少年という言葉が似合う。聖ベルナデッタ学院高等部3年生、秋山このみだ。スポーツメーカーMIMEの幹部秋山泰造の一人娘。陸上部、成績優秀で友人も多かった。典型的なお姉様と慕われるタイプに見えた。セインから貰った情報は、客観的な情報で丁寧なまとめられていた。校内新聞メーリングリストでランキング上位に入っていたこと、陸上部で応援にきた下級生の数、一日に貰うラブレターの平均等。少々マニアックすぎる情報まであった。

別のスクリーンを表示させ、サーバからドラックプログラムの被害者と思われる情報を引き出す。セインと今後の方針を決めた後、電子の海を彷徨って発掘した文書だ。ルネの言の通り、警察の機密文書は、ネットの至る所に落ちていた。夜は文書の発掘で時間ばかり、中身は吟味できていない。「秋山このみ」を探したが、オレが取得したデータにはなかった。秋山このみが死亡したのは2008年9月12日(土)だ。文書が流出した時点で報告書が作成されていないかったか、あるいは、「変死」扱いではないのか。

後でセインに詳しい死亡状況を訊くか。

オレはルネが示した一番初めの被害者らしきファイルを開く。中

野佑介、18歳。9月2日死亡。大阪、か。

カメラからの映像を見ると、セインがマンションの玄関に到着したようだった。

そろそろ本番だ。オレはファイルを閉じようとした。

「！」

飛び上がる。急に、肩に手を置かれたのだ。

「なっ」

振り返る。そこには、あの初心者らしきDRが鬼のような形相で、オレを睨んでいた。

「あの？」

咄嗟にスクリーンを消す。「なんですか？」

「お前ツ！ 不正アクセス禁止法違反で逮捕するツ！」

「はぁ………？」

困惑しつつ、オレはじろじろとそのDRを見た。外見は東洋人なのに金髪に茶色の肌色でセーラー服を着ている少女だ。古典の漫画に出てきそうな格好だ。口紅は白色だった。

「お前今警視庁の機密ファイルを見ていただろう。エマノン、現行犯だ。言い逃れはできないぞ」

「あのさぁ」

閉じたスクリーンを再び表示する。昨日見つけた機密文書を保管しているサーバに接続する。

「ここで普通に見えるんだけど？」

「………」

そのDRは、勝手にオレの正面に座り、足を組んだ。スクリーンとサーバの情報を見比べ、唸る。自分のスクリーンをたちあげ、何やら入力しはじめた。どことなく武骨な仕草だ。成りきっていない。実体は男だ。

「エマノンめ」

外観に似合わず忌々しげに吐き捨てる。エマノン、としばし記憶を探ってみたら、世間を賑わす大ハッカー様だった。

「誰？」

はっとしたように、彼？ 彼女？はオレを見た。

「あ、ああ」

カメラの映像が気になったが、画面を消した。

「す……、ごめんね。ちょっと見間違いつてかんじ？」

「……。別にいいけど」

拳動不審に照れた仕草をする。だけど、ガニ股だよ。

オレはイライラと指で机を叩く。彼？ 彼女？ は立ち去る気配がなかった。

「な……、ねえ。さっきの子、聖ベルナデッタ学院の生徒だろ？」

「じゃなかった。だよ」

「それが？」

「最近死んだ生徒のこと知らないか、秋山このみっていう」

生徒手帳にありそうな彼女の写真を見せた。先ほどみたものより若干幼い。オレは目を細めた。ルネの情報源は確かだ。この間抜けで演技の下手くそな人物はサイバー課に違いなかった。

「知らないね。彼女がどうしたんだ？」

「しらばっくれた。」

「……」

彼？ 彼女？ は目を細め、スクリーンを見た。

「ね、ねえ。なんでこの情報を見てたんだ？」

変死体と秋山このみとのつながり、すなわちドラッグプログラム。冷汗がじんわりと感じられた。DRはかかないはずなのに。

「おもしろい変死体だから気になったんだよ」

問い詰めようと口を開くサイバー課を、オレは押し止めた。

「もう行くよ」

間髪入れずギアをひねる。セッション終了。時代遅れの少女のぽかんとした顔にノイズが走って消えた。

少年姿のDRに変わって三宮に降り立つ。

三宮駅の前を闊歩しながら、通信に耳を傾けた。小さくスクリーンにカメラの映像を呼び出す。どうやら秋山このみのマンションには彼女の母親が来ているようだった。セインの慰問に感謝の言葉を投げていた。

「いえ、先輩にはお世話になりましたから」
涙声だ。

「わがママをきいていただいてありがとうございます。少しでも、先輩のこと忘れたくなくて。いえ、何も気づかなかったのも私ですから、悔しくて……」

穏やかにセインが切り出した。カメラが動き出す。揺れて、秋山このみの母親が一瞬うつった。若くて綺麗な女性だったが、真っ黒なワンピースで、化粧が涙で崩れていた。セインが動き出すとともに、カメラの視点も変わる。ドアが閉められ、スクリーンに部屋全体の映像が表示された。

「ヴァン、先輩の部屋」

「ああ」

ボーイッシュな少女だったが、部屋は意外にも女の子らしさで溢れていた。八畳ほどだろうか。明るいオレンジとピンクが混じり合ったカーテン、ベッドには大きくまのぬいぐるみに、小さいうさぎのぬいぐるみが2個転がっている。ふわふわのカーペットの上には、ピンク色の小さなローテーブルがあった。窓に面して置かれている白い机には、ペンダント型のチューナーが置いてあった。

「セイン、ギアを見せてくれないか？」

この姿だと、下手に三宮を彷徨けばカインに見つかる。オレは東遊園地公園へ向かった。

「えっと……」

画面がアクセサリを映し出した。黒を基調としながらもワインレッドのラインがほどよいアクセントになっている。「tez社のG

N407。少し前に流行ったやつだ」セインがギアを手にとった。オレにも聞き覚えがあった。デザイナーズギアという触れ込みで、元来の機能面を重視した武骨なデザインではなく、多少性能を落とすとしてよりスタイリッシュに仕上げたギアだ。半年前に発売され、女子高生を中心に、今までDRに関心のなかった若者たちを引き込んだアイテムだった。細く軽く、リストバンドというよりは少し太いブレスレットに見える。

「セイン、起動させてみてくれ」
「うん」

ギアのワインレッドのラインがピンク色に光った。「秋山このみのサーバにアクセスできるか？」セインの正面にスクリーンが表示された。文字が流れる。「大丈夫、先輩は機械オンチだったから、ログインは省略してると思ったんだ」

オレのサーバに膨大なデータが流れ込んできた。秋山このみのサーバに保存されていた全データの送信が始まったのだ。打ち合わせ通りだった。

残念ながら、オレもセインもインターネットには素人並だ。ハッキングやクラッキングという言葉を知っていても、具体的な手段は全く知らなかった。だから、秋山このみのギアからサーバに乗り込んでデータをいただく。真っ当な方法だから、特別なスキルなどは必要ない。入手するべきは、秋山このみのアクセス履歴であり、サーバ内に保存されているかもしれないドラッグプログラムに関するデータだった。

「あとは……」
セインが白い机の引出しに手をかけた。
「どうした？」

「開かない。鍵がかかっている。机の上にも鍵らしいものはないし、チップもない」

「他の場所は？」
「ちよつとまって」

カメラの視点が回転した。画面の隅でドアが開き、ブランドのスリッパが写り込んだ。秋山このみの母親が入ってきたのだろう。「ええ」「はい」セインの相槌がきこえる。

オレは一旦スクリーンを切った。ため息をついてまわりを見る。

いつの間にか小さな公園にきていて、潮の香りがした。環状に公園を囲むように木々の植えられた道が何階層にも伸びていた。まわりの高層ビルとつながっているようで、サラリーマンの姿がちらほら見える。位置情報呼び出すと、東遊園地公園、と出ていた。奥まった場所にひっそりと設置されていたベンチに腰かけた。セインと秋山このみの母との会話はまだ続いている。

夕暮れ時だ。東京のようなどこか埃っぽいものではなく、空は、鮮やかな赤色に染まっていた。

「？」

目の端にうつったものを確かめようとして、顔を向けたが見失ってしまった。

セインと同じ制服姿を見た気がしたのだが、気のせいだったのだろう。ここはセインの学校から近いので、いたとしても不思議ではないが。

オレは頭を振った。サイバー課が動いているという事実が気持ち悪かった。あの骨董品のような格好をした少女を思い浮かべる。秋山このみの捜査をしていたということは、秋山このみは何らかのサイバー犯罪に関わっていたと見ていいだろう。オレの見ていた変死体資料にもすぐに反応したことから、ドラッグプログラム関連か。警察はどこまで把握しているのだろうか。

セインにも、サイバー課のことは伝えるべきか？

彼女がこちらに手を振りながら走ってくる姿が見えた。オレは軽く手を挙げる。

彼岸花が風に揺れた。

2088年9月16日(木) その1

新宿に立った。埃っぽい空気が不思議と肌に馴染む。きつかり深夜0時、セインはもう来ているだろうか。秋山このみのギアからデータを入手した後、セインは塾ということでも一旦お開きになった。12時頃少しかけ会おうということになった。行き先は当然触手クラブの予定だが、さすがに三度目だとセインが激しく抵抗しそうだ。オレは無視することにする。

さて、と、喧騒の中へ足を繰り出した瞬間、手首を捕まれた。

「見つけた」

華奢な指だ。長い爪にはゴテゴテの飾りがしてある。振り向いて、オレは顔を顰めた。

「お前」サイバー課。

今日、いや、昨日みた奇抜な姿の少女がオレの手をしつかりと掴んでいる。

「なんだお前、ストーカーかよ」

「なっ」顔を赤めたのかもしれないが、何分褐色の肌だからよくわからない。

「違う！ お、俺はっ、たただの……」

手で制した。オレは一呼吸置く。

「何の用？ どうやってオレを探したわけ？」

「あ、ああ。そのギア、tuz社のDRモデルだろ。そのサイズだし、独特のデザインだから目立つ」確かに、ゴツいが……。

「しかも一番初期のもの。未だに使っているヤツなんてかなり少ないからな。ちょっと調べただけですぐに分かった。お前、有名人なんだな。『ルネのお守りヴァン』」

「……」

今、とても不名誉な二つ名を聞いた気がする。確かにセインもこのギアでオレを判別していたし、DRを使い分けても意味がないこ

とは、たった今証明された。それはそれで考えものだが。なんだ、その『ルネのお守り』とは。

「ちょっと話がしたいんだ。付き合っただけいい。『ルネのお守り』
アッ」

「……」

脳裏にハニーフェイスの少女が思い浮かんだ。愛らしい微笑みなのに、どこかしら黒さがにじみでている姿だ。確かめる必要がある。どこの誰がそんな二つ名をつけたのか。

「いいよ」

サイバー課の目に安堵が浮かんだのを見取って、オレは当初とは逆の方向へ歩き出した。サイバー課は奇抜な格好だ。これ以上変な噂を立てられても困る。

「で？」

さすがに触手クラブではなかった。大手チェーンのカラオケ屋の一室、鈴木エーナの歌が背後で流れている。ここは実体もDRも利用可能とあって、人気が出ていた。曲名を端末に送れば、音楽とともにイメージにあったARが出る。歌う人を自動的に認識し、音量を増幅させる機能があった。カラオケは3年ぶりだが、あれからさらに進化しているのだろうか。

セインには遅れる旨の連絡をしたら、明日に変更ということになった。すまない。

「何の用なんだよ、サイバー課」

彼？ 彼女？ の顔が強張った。

「なぜそれを……」バレバレだろうが。

「男、ガッツ、DRの素人、ここまででは誰が見てもわかる」

「……。確かに、DR化したのは、一昨日が始めてだったが。ガッツ、なのか……」

「ガッツだろ。その姿にガニ股はどう見ても違和感がありすぎだろ」
「むむ」

「普通はそんなド素人がサイバー課であるはずがないと誰でも思う。だが、流出したファイルを見て『逮捕する』だ。疑念も木っ端微塵に吹き飛ばす。発言だけでサイバー課だ」

「違うか？ とサイバー課を睨みつけると、完全に沈黙した。バレバレすぎて哀れに思えてくる。」

「俺……、覆面捜査官なのに」
「ぶ」

吹き出してしまった。まじまじとサイバー課を見ると、顔を伏せて肩を落としている。不謹慎だと思いつつも、声が震えて、腹筋が震えて、肩が震えた。

「つくつく……ふっ」

せめて、口から笑い声が漏れないように、苦心する。ああ、腹が痛い。明日は筋肉痛だ。

「ははは、くツハハ」

我慢できない。ポップな曲に合わせて肩が震えた。覆面捜査官はいくらなんでもない。恰好がひどい。素人っぷりがひどい。よっぽど親切な人ならば相手にするかもしれないが、普通の人はまず避けるに違いない。

すうっと息が吸い込まれる音が微かに聞こえたような気がした。

「笑うな！！」

大音量が耳を突き抜けて、オレの笑いは止まった。

BGMには鈴木エーナの、「トワイライト」。変調のどこか寂寥感の漂うメロディに鈴木エーナの澄んだ声に乗る。6月にリリースされて、未だにトップを譲らないヒット作だった。

「俺は、本当に苦手なんだ。コンピュータなんてさっぱり分からないし、ギアの使い方もよく把握していない」

「ぼつぼつとサイバー課が勝手に語り始めた。要旨はこうだ。」

当初彼は捜査三課の下っ端だった。あまりに使えないので交番課に行くことになった。たまたま同期で名前も同じ優秀な人物も出世

という形でサイバー課に異動になるはずだった。が、職員番号の登録ミスで、見事入れ替わってしまった。公的な処置なので、今のところどうにもできない。

あまり同情できないよな、と思いつつオレは耳を傾けた。出世のはずだったのに交通課に飛ばされてしまった同姓同名の警察官のほうで悲惨だ。南無三。

サイバー課は一部に犯罪者崩れのハッカーやクラッカー、それからコンピュータ犯罪に強い職員で構成されている。目の前の間抜けな人物には不相当に思われた。

「まあ……」

オレは小さい肩にほんと手のひらを乗せる。

「諦める?」

彼女の潤んだ瞳がオレを直撃した。ガシッと逆にオレの両肩を掴まれる。驚異的な握力で、尖った爪が肩に食い込んだ。

「イツ」「頼む!!!」

痛い、ものすごく痛い。DRにも痛覚がある。痛い。

「俺を一人前の調査官にしてくれええええええええええ!」

「イテエつつってんだろ」

これはセクハラか? 否。実体は男だ、問題ない。オレはサイバー課の股間を蹴り上げた。サイバー課の動きは早く、オレの脚を両手で抑えた。オレは瞬時に距離をとった。肩がジンジンと痛みを保持っていた。この男は……。

「一人前に、なりたいんだよ」

男はしよんぼりつつぶやく。

オレはため息をついた。

「サイバー課、条件次第だ」

ぱあつとした顔で、サイバー課がオレを見た。

「そっちではドラッグプログラムについて調べているんだろ? その情報がオレはほしい」

「なぜそれを」

「その情報が出せるなら、一人前のDRにしてやるよ」
「ごくり、と彼女の喉が鳴った。」

「よく見て？ 私の言ってることちゃんと理解してるの？ こうよ。
脚ががに股になってたら駄目。寄せて」

タチバナは容赦なくハルカを蹴り上げた。

「いい？ 大切なのはいかになりきるか、ということよ。そのもの
になるの、心も」

「は、はい」

「もう一度やるよ」

大きな鏡の前で、サイバー課は強く頷いた。タチバナは「こう」
とお手本を見せる。オレは、傍観していた。

サイバー課は姿をすっかりと改めた。どうしてそんなアバターを
使っていたのかと聞けば、サイバー課のハッカーが作ってくれたら
しい。同時にサイバー課の彼に対する評価もよくわかった。バカに
されている。彼はハンドルネームという概念もなく、オレは一瞬天
を仰いだ。「ハンドルネーム？」キョトンとした顔で聞くので、思
わず「源氏名だ」と答えてしまった。サイバー課の名前はハルヒコ
らしいので、安直にハルカと名づける。姿も、一般人と変わらない
ようにオレが作り替えた。

胸まで伸びたサラサラの黒髪で、姬カットにする。白い肌、ピン
ク色の爪で顔の造作はいじらない。かわいいというよりは綺麗な少
女が出来た。服も白いワンピースにチェックのジャケット、黒のブ
ーツを用意する。正直に言って、アバターにしたらかなり素晴らし
い出来だ。姿恰好を作るのはかなり難しく、技量がないとオレみた
いな平々凡々の姿になる。ハルカは、元々ハッカーが作った造作が
良すぎる出来で、オレのコーディネートも素敵だ。街に出ると確実
に声をかけられるだろうなと思う。

中身がいなければ。

スゲースゲーとガニ股で鏡を見る姿に、オレは軽く眩暈がした。気を取り直して、タチバナに電話する。

「どうした？」

タチバナはすぐに出た。

「頼みたいことがある。一人、演技指導をしてほしいんだが……」

「へえ、報酬は？」

「ドラッグプログラムに関する情報」

「俺には利点がないな」

「サイバー課とのコネクション」

「どこに行けばいい？」

そして、タチバナは妙齡の女性の姿で、カラオケ屋に降り立った。タチバナはプロだ。店は内容上、高い演技力が求められる。外見は子供でも、中身は大人であることを悟らせてはいけない。『アリスの国』は子供たち好きへの樂園なのだ。例えアノ最中でさえ、子供であることを貫き通す。そうだったプロフェッショナルな子供にするために、従業員へ演技を教えるのもまたタチバナの仕事だった。

「ねえ、ハルカちゃん。あなたはとっても綺麗よ。この大きなお目々も、小さな唇も」

タチバナはハルカの唇に人差し指で触れる。何をやっているのか。BGMはいつの間にかバラードになっていた。

「さらさらの黒髪、淡雪のような肌。私、そういうの好きよ。今にも押し倒しちゃいたいぐらい」

ハルカは呆然とタチバナを見ていた。実体も奥手そうだ。

「でもね、それだけでは駄目なのよ。もう一度言うわね。人はどこでその人物を見ると思う？ 外見だけかしら。それだけだったらハルカちゃんももう完成よ。だけど、誰から見ても、ハルカちゃんは女の子だとは思われないわ。ガサツで無愛想な男にしか見えない」

タチバナはハルカの太股に手を這わせた。

「このことか」

もう片方の手で、ハルカの華奢な手のひらを持つ。唇で指先を舐めた。

「ここもね」

「ッ」

ハルカは頬を紅色に染めて、目をぎゅっと閉じた。

「全部出来てないんだって何度言ったらわかるんだよ！」

あ、タチバナが切れた。

「よく見る！　これがお前だ」

タチバナは妖艶な脚をガニ股にして、ゴリラみたいな肩を作る。

ハルカとそっくりだ。

「これがどうやってたら女に見えるんだ？　あ？　誰がそんなやつと親しくなりたいと思うんだ？　言ってみるよ」

かれこれ6時間もやっていたら、切れたくもなるだろう。空はもうすっかり明るくなっていくはずだ。ガニマタの修正と武骨な手の仕草改善だけでこれだ。まだ歩き方、食べ方、言葉遣い……etcが残っている。二人の演技稽古が熱心すぎて、とてもドラッグプログラムについて聞けそうになかった。

「寝るか」

オレは今更ながら、今のハルヒコで違和感のないアバターを用意した方がよかつたんじゃないか、と思う。が、言わないことにする。そっとギアを捻ってオレは立ち去った。

2088年9月16日(木) その2

あまり認めたくないことがある。だからあつさり目を逸らしてしまえばいい。ほら、世界は平和は途端に平和になる。

「ヴァンく。逃亡阻止！」

脚に絡みつく小さな腕。オレは空を仰いだ。嗚呼、今日もネオンが綺麗だ。

「デイスつても駄目。ヴァンがヴァンなの、ルネはちゃんと知ってるよ。今更隠しても無駄だと思うけどな」

「え、ええと……、お嬢ちゃん、人違いじゃないかな」

オレは戸惑いながら、金髪をふわふわと靡かせた幼女に向かって答えた。若干口元が引きつっている気がする。今のオレは普通の少年姿ではなく、立派な青年だ。このアバターでルネと接触したことはなかった。

「ヴァン、この旧型のギアってかなり目立つよ。今のギアと違ってゴツいから一目瞭然。さらに、小型ギア一号機だったりするから、マニアにとっては涎が出ちゃうぐらいにレアなんだよ。未だに可動してるのって、もうヴァンのものぐらいしかないんじゃないかな。そんでもって、旧型を一目見ようって人、結構多かったりするんだよね。ルネの言いたいこと、わかるかな？」

「あの」

「ルネ傷ついたなあ。ルネに隠れてこそこそセインとデートしてるの。ルネから情報聞くだけ聞いて後はしらんぷりって、ひどいよね。これでバれてないって思ってるんだったら、頭のお花畑、満開過ぎて花粉で涙が出てきちゃう」

薄々と嫌な予感がしていた。セインにもサイバー課にも、ギアのおかげであつさりとおレが見破られた。アバターを変えることがいかに無意味かということは、昨日、いや、今日の深夜証明された。オレがどこで何をしようが、一部のマニアには筒抜けだってことだ。

『ルネのお守りヴァン』だしな……。そして、目ざといルネが、ルネを避けて行動するオレに気づかないはずがなかった。

ここは一つ。

「ごめんなさい！」

45度の完璧なお辞儀で、ルネのきらきらと輝く目とあった。ルネはにつこりと笑って、両腕をオレに差し出した。

「だっこ」

結局、お馴染みの大久保だ。ダークブラウンとワインレッドに統一されてたルネの部屋で、オレはがっくりとソファに沈んでいた。向かいでは、ルネとセインがしゃいんでいる。女の子のセインをルネはすっかり気に入ってしまったらしく、ペタペタとセインを触ったり着せ替えを楽しんだりしている。オレは、力尽きた……。

新宿でルネを抱っこしているオレに、セインは驚いたらしいが、「ヴァンがいるなら大丈夫」と謎の言葉を吐き出した。ルネの底知れない怖さは、すべてオレに向かうらしい。こうなることも予想していたようで、うまく踊らされていたことにやっとオレは気がついた。女は、計算高い。清純系に見えてこれだ。オレは頭の中の要注意人物リストにセインの名前も追加しておいた。

「それで、ヴァンとセインはどこまで調べたのかな」

セインとの着せ替えごっこにも飽きたようだった。とてとてとルネが側に寄ってきた。セインといえば、いわゆるゴシッククローリータという恰好で、恥ずかしそうにもじもじとしている。黒と赤のレースにボーダーのソックスで、一部には受けそうだった。

オレは簡単にこれまでの出来事を話した。セインの先輩が死んだこと、セインがドラッグプログラムを一回だけ使用したこと、セインの先輩のデータをいただいてきたこと。

「ヴァンがんばったんだね」

いいこいいこ、とオレの頭を撫でようとするのを、さりげなくかわした。ルネはさして気にするわけでもなく、オレに手を差し出し

た。

「じゃあ」

そのデータ、さっさと出しちゃってよ、とルネは軽やかに言った。セインが軽く頷いたので、オレはサーバにアクセスする。呼び出したデータをスクリーンに投影して、ルネに主導権を渡した。

ルネは上唇をチロリと舐めた。つぶらなピンクの瞳に、猛禽の鋭さが宿る。

「秋山このみ、聞いてあげる。何を残したのか」

ルネの指が恐ろしいスピードで動き出した。瞬きすらせずに流れる情報を目で追う。

「うわあ」

セインが感嘆の声をあげた。普段ぼけーっと戯れているだけのオレたちなので、ルネが本格的にコンピュータをいじる姿を目にするのははじめてだった。五多重にスクリーンを開いて同時に操作する。圧巻の一言につきた。スクリーンは次々に表示を変えて、オレはさっぱりついていけない。ルネ、さすが、IT系だ。

と、唐突にルネが指を止めた。オレとセインを見て、にやりと唇を歪める。

「セイン、ヴァン、残念なお知らせがありまーす」

ルネは勢いよく右手をあげた。まるで「先生、質問です」というかのような。

「なんと、お二人が苦勞して手に入れたデータに、ドラッグプロگرام関連の情報はありませんでした」

「はあ？」

「メールも、サイトの履歴も、消去跡のデータも、他様々なものを見たけど、全然入ってないよ。全然カスタマイズされていないライトユーザのサーバだったから、ルネ、本当にこの人ドラッグプロگرامに関わってたのかなあって不思議に思っちゃう。アングラなものも全然ないし」

ルネは柔らかそうな唇に指をあてて小首を傾げた。

「でも、先輩は確かに……」

セインは秋山このみが狂った姿を見ている。幼女はかわいげにうんうん、と首を振って、邪悪な笑みを浮かべた。

「じゃーん」

眼前に巨大化されたスクリーンが浮かんだ。「きゃあ」といつてセインは両手で顔を覆う。ルネはにたにたとそんなセインの様子を満足げに見た。

「だから、交友関係から責めてみるよ」

『聖ちゃん&自分&甲斐ちゃん（ハート）』

少女三人が写っていた。真ん中のボーイッシュな少女が両脇の少女たちの首に手を回している。右はセミロングのどこか清潔さを感じさせる少女で、ぎこちない笑みを浮かべていた。先日見たときよりもどこか幼い。左の少女は細い眼鏡を掛けていて、鋭利そうな視線を向けていた。三つ編みおさげで、あんな目つきをしていなければ、思わず委員長に推薦しているだろう。

「秋山このみのアルバムだよ。これ、文化祭の時の写真フォルダみたい」

頬を赤らめるセインに、楽しそうなルネ。幼女の姿をしたおっさん（？）は、すっかり分かっているみたいだった。オレは死者を暴いているようでなんだか落ち着かない。セインも、「いいのかな」と小さくつぶやいている。ルネはそんなオレたちに頓着なしだ。

「聖だからセインかあ。なるほど。実物はこのアバターよりもかわいいね」

ぎゅーっとセインにハグをしてルネが言った。ターゲットはオレからセインに変更されたらしい。オレは安心してスクリーンを見つめた。

甲斐というのがおそらくカインなのだろう。金髪眼鏡のクールそうな姿が浮かぶ。纏う雰囲気そのままだった。そして秋山このみだ。彼女は二人を抱きかかえてにっこりと笑っていた。八重歯がの

ぞいでいて、どこか愛嬌がある。スカートを履いていなければ、美少年がハーレムを楽しんでいるようにしか見えない憎らしい構造だ。写真の端に幾人もの女生徒が三人に視線を飛ばしていることからも、大体当時の様子が想像できた。

「素晴らしき青春の一頁だね。次いくよ。『自分&甲斐ちゃん（ハート）』」

どうやらスライドショーが始まったらしい。セインは自分が写っていないことをいいことに、途端にのめり込みはじめた。

写真は家族のものと学校のものとで大半を占められていた。一枚一枚ルネもオレもセインも見入る。時折セインは写真を見て、涙を零した。見ていて気づいたのが、学校生活での写真は必ずといっていいほどカインが写っていた。同級生らしきものとのショットもあるが、カインと比べると驚くほど少ない。秋山このみが高校2年生になったところから、セインも入るようになった。オレの記憶では、秋山このみはセインとカインの一個上だ。そしてセインとカインは同級生だった。さすがにこの頻度では、不自然に思う。

「なあ、セインとカイン、秋山このみってどういう関係だったんだ？」

「ルネも聞きたいな」

幼女はスライドを操作する手をとめて、小首を傾げた。動作が日々核心的だ。中身を知らなければこ憎たらしいほどかわいらしい。

スクリーンには、もうすぐ行われるのだろう体育会の練習風景が表示されていた。二人三脚をしているセインとカイン、シャッターを切ったのはおそらく秋山このみだ。『甲斐と聖二人三脚風景』

「うん、少しだけ待って」

セインは涙を拭って、三回深呼吸をした。思いを馳せるように、そつと目を伏せる。

「もうバレちゃってるけど、カインこと甲斐綾乃は業界最大手のスポーツジム、カイスポーツの社長の娘なんだ。秋山先輩はスポーツ用品の社長のご令嬢で、昔から仲が良かったんだって。聖ベナルデ

ツタ学院は幼稚園から大学までのエスカレーター式で、幼年期からの知り合いなんじゃないかな。同じ弓道部で、いつも行動を共にしていたの」

カインが秋山このみと親しいのは予想外だった。

「私、二宮聖が高校1年の夏に転校してきて、同じクラスの綾乃ちやんと仲よくなって、それで自然と先輩とも親しくなったの」

「そうか」

「先輩があたしのことどう思っていたのかは、よくわからないけど……、でも色々と親切にしてくれたよ。女生徒たちから呼び出されたときに、一緒に行ってくれたり、食堂で躓いて昼食を落としてしまったとき、綾乃ちやんと先輩がわけてくれたり……。ドラッグプログラムも、親切心からくれたと思う」

また涙があふれてきたようで、セインは両手を顔にあてた。ゴシツクロリータの涙すがたもそるな、と不謹慎な感想が頭を掠める。オレは健全な男だ。

「秋山このみは、カインとセインの他に仲いい人いなかったのかな？」

「私が知ってる限りでは……。先輩が言ったの。みんな自分が話しかけてもよそよそしくて、まともに会話が成立しないって」

「……」

ルネと目が合って、お互い考えていることがわかった。天然麗人もセインも、とてもとても鈍いらしい。

「まあいいや。ルネ、もう一つだけ、不思議に思ってるんだけど、ルネたち、秋山このみに会ったことないよね」

セインは頷いた。

「先輩、ものすごい機械オンチだったの」

ルネが大いに同意する。秋山このみのデータから素人さが滲み出てたまらないみたいだ。

「私と綾乃ちやんがDRデビューしたのが、昨年2月ぐらいで」「ルネたちと出会ったころだね」

「うん。鈴木エーナのファンになって、私たちもやってみようってことになったの。すぐにヴァンに拾われて……」

2086年から2087年にかけて、ギアの急激な値下がりとDRのアイドル歌手鈴木エーナブームでDR人口が急激に増えた。ギアの操作が簡単になり、コンピュータに詳しくない人でも簡単にDR化できるようになったことも要因の一つだ。今まではよっぽどのコンピュータ道楽かその道の専門でないと敷居が高かった世界が、一般人に開かれ、さらに鈴木エーナの知名度も手伝ったことで、一気にDRが広まっていった。

「なるほどね」

「先輩はずっとDRに興味があつたらしいけど、夏におしゃれなギアを見つけて、やってみることを決心したって言ってた」

tu z社のGN407が頭に浮かんだ。アクセサリ要素が強くて、女性に人気のギアだ。

「それで何度か私と綾乃ちゃんで、先輩を教えたり、色々な観光地に遊びに行ったりしたの。だけど、そうだね。ここには来たことがなかったね。綾乃ちゃんも全然行こうなんて言わなかったし」

それはオレかルネが信用されてないってことに他ならないだろうか？ 断然ルネが怪しいわけだが。

「それでセイン、そのDRで遊んだ時の写真っていうのがこれかな？」

ルネがスクリーンに新たな画像を表示させた。自由の女神をバックに、三人が写っている。『聖&自分&甲斐 in New York』
「うん。私帰国子女で、っ少しだけ英語が出来るの。それで、ちよつとだけ観光に行ったんだ」

DRは降りられるポイントが開放されていればいいので、距離はあまり問題ではなかった。それこそ、南極でも月でも環境さえ整っていれば一瞬で行くことが可能だ。しかし、オレは日本語しかできないため、今まで国内から出ようとしたことがなかった。今度セインを引き連れようと決心する。

「で、秋山このみはこの真ん中でいいのかな？」

ルネが写真を指さした。性別不詳、黒髪でオレと同じあまり特徴のない顔つきなのに、どこか気品を感じさせるアバターだった。

「そう。それで、こっちが綾乃ちゃん」

意外だったのが、カインがかわいらしい少女姿だったってことだ。実体の写真でも、オレの知っている金髪眼鏡の青年でも、クールな雰囲気は漂わせている。セインの示した彼女は、茶色の髪のツインテールで、ウェーブがかっていた。服も女の子という言葉がよく似合う、レースのブラウスに花柄のスカートだった。目つきだけがカインだ。

「へえ……」

「まだ他にも画像あるよ」

写真が変わって、カインと秋山このみのツーショットが出てきた。

『甲斐&自分』夜の東遊園地公園らしい。

「あ、私に秘密で遊んでる。カインずるいなあ」

目を細めて微笑むセイン。ルネは一通り満足したのか、オレに操作の主導権を返した。

「全部セインとカインとの幸せな記録だったね」

「うん……」

ルネがオレに目配せをした。「これ以上叩いても何も出てこないから、この辺で切り上げよう」と言っている。瞬時にルネの思考が読み取れて、オレは多大な疲労を感じた。ルネのお守り。

23:30に近かった。セインに時計を示すと、多少慌てたようだ。明日は数学のミニテストがあると云っていた。

「ヴァン、ルネ、ありがとう。そろそろ帰るね」

睫毛が涙で塗れていたが、セインの顔に浮かんだのは憂いのない笑みだった。

「ああ」「またね」

セインの姿が消える。部屋にはルネとオレだけが残った。ルネはソファに腰かけて、足を組んだ。幼女のくせに堂々とした恰好で、

謎な威圧感がある。葉巻を吸っていても、決して違和感を覚えないだろう。

「ヴァン」

「ああ、キーパーソンはカインだな」
ルネが満足そうに唇を釣り上げた。

2008年9月17日(金)

2008年9月17日(金)

ところで、忘れていることがあるのではないだろうか。そう、サイバー課だ。オレのメールボックスには大量の、タチバナからの苦情が送りつけられていた。ボイスメールを開いて、すぐさま後悔する。ひどい怒鳴り声で、内容はオレがさっさと帰ってしまったことに対する文句と、ハルカの飲み込みの悪さに対する愚痴で占められていた。一朝一夕で演技力がついたら、誰でも役者になれるに違いないと呆れたが、タチバナの店の子供たちを思い出して、オレは首を振った。タチバナなら誰でも一日で役者にできる。オレは最後の一通のみ残して、タチバナからのすべてのメールを削除する。苦情に違いないからだ。最後の一通、2009/9/17 12:03:56に送られてきたメールを開こうと思ったのは、苦情メールよりもデータ量が非常に小さかったからだ。早速内容を聞く。「立った……。クララが立った！」

タチバナからの遺言だ。一日中指導していたということだろうか。オレは静かに合掌した。

いつもの少年姿で汚い壁に寄りかかり、オレは顎に手をあてた。高層ビルのガラスが鱗雲の浮かぶ空を映し出していた。人通りはまばらで、DRも少ない。誰もオレを気に留めなかった。

「さて、これからどうするか」

カインと会う前に、ある程度の情報は仕入れておきたい。昨日は徹夜だったと思われるサイバー課ハルカに連絡してみたが、予想通り反応が返ってこなかった。「公務、大丈夫なんだろうな……」オレのつぶやきは虚しく虚空にこだまする。こちらも合掌。

オレはスクリーンを出して、サーバから秋山このみの情報を呼び

出した。結局昨日は全てをルネ任せにし、オレ自身で目を通していなかった。暇つぶしにはちょうどいいだろう。

データ量は多くなかった。それも八割は画像動画だ。サーバにデフォルトで付属しているソフトウェア以外はインストールされていない。特別操作しやすいようにカスタマイズしているわけでもなかった。ルネがものたりないと感じるのもわかる気がする。

ずっと変な違和感がオレの中で燻っていた。

オレは昨日見た写真をスクリーンに写した。写真はどれもカイン、セイン、そして秋山このみのものばかりだ。秋山このみはずっとポイツシユなベリーショートで、私服はどれもカジユアルな、一見男とも見間違えそうな服装だ。スカート姿は一枚もなかった。

もう一つのスクリーンに、秋山このみの部屋を撮った動画、三枚目のスクリーンにDR姿の写真を出した。オレは三面を見比べて首を捻る。秋山このみの部屋はやはりファンシーで、女の子という言葉がよく似合う。オレのような乱雑で無秩序なコーデイナーでもないし、秋山このみの外見から想像できるような少年っぽいものでもない。そのくせ、秋山このみのアバターは現実世界そっくりで、性別だけが不詳な外見だ。

「ああ、これだ」

オレは違和感を突き止めた。秋山このみの『中身』とアバターが合っていないのだ。

不可抗力で女になっているハルカは例外として、DRは一種、人の変身願望を実現させるものだった。アバター作りには技術があるが、自分の希望するアバターが手に入れば、人はそのアバター自身になれる。つまり、外見に自信のない人が美男美女になることも、パンダに憧れる人がパンダになることも可能になる。アバター職人と呼ばれる人々にお金を払ってまでして、自分の希望するアバターを作ってもらう人も多い。そして、大抵は実体とかけ離れた外観のアバターを使う傾向にあった。

秋山このみの部屋は女の子らしさで溢れていた。そういう少女が、わざわざ男性とも見紛うアバターを選ぶだろうか。カインの少女姿のほうがよくばどらしかった。

スライドさせ、別のDR姿の写真を写す。カインと秋山このみのツーショットで、手を握り合っていた。斜め上からのアングルで、解像度が荒い。街中に設置された街頭カメラから取ってきたものだろう。街には犯罪抑止のためカメラが所々設置されているが、一般市民も自由に使用できるように開放されていた。

次の写真は、先ほどの写真をズームしたもののようだった。次。オレはどんどん写真を進める。昨日抱いた、プライベートを赤裸々に覗く気持ちはなくなっていた。秋山このみのチグハグ感が、オレを急き立てていた。次、次、これも次。

セインが混ざっているものを除いて、カインと秋山このみの写真はほとんどが街頭カメラで撮影されたものだという事に気づいた。だんだん頭が混乱してくる。どういうことだ。

オレが次に出した写真は、カインと秋山このみが手をつないで街中を歩いているものだった。実体と派手な恰好をしたDRが多く、オレ自身も見覚えのある建物から、その場所が原宿だとわかる。正面からの撮られたもので、カインは今までみたことがないような満面の笑みを浮かべていた。

「こんな顔もするんだ」

カインはクールとばかり思っていたので、オレは珍しくてスクリーンを操作する手を止めた。カインはツイントールを風で揺らしながら、街頭カメラに向かって笑いかける。秋山このみはカメラに気づかないのか、迷惑そうに顔を背けていた。

「あれ？」

カインを中心に画像を拡大する。女の子らしい少女の笑顔に、八重歯が覗いていた。

ボーイッシュな少女の笑顔が、この写真とダブった。実体の写真を見ると、女の子と同じ笑顔が張り付いていた。外見は違う。だが、

癖までは抜けない。

オレは生唾を飲み込んだ。

ここ数日、アバターが違っていてても実体を見破られることを、身をもって体験した。ツインテールの少女の手首を大きく拡大する。

tuz社のGN407。ワインレッドの、ブレスレットらしいギア。ア。

「まさか」

オレは驚きの気持ちを抑え、次の写真にスライドさせた。

絶句。

この一枚にカインと秋山このみの全てが集約されていた。

「ルネ！ ルネいるか?!」

大久保のルネの隠れ家に駆け込んだ。扉を開くと畳にちゃぶ台、座布団があり、床の間の再現までばっちりだ。だが、肝心の主がい

ない。

「あ……」

ちょうど15時を回ったところだ。ギアが今日は平日だということとを主張していた。仕事かもしれない。オレはへらへらとその場に崩れ落ちた。

「忘れてた」

「何忘れてたの？」

「ルネ」

空間からルネが現れた。セインの着せ替えに触発されたのか、ピクトール人形のようなゴシッククロリータ衣装だ。黒と白のレースを重ねてふわふわ感を出している。シルバーの細いチェーンが腰に巻かれていて、ほどよいアクセントになっていた。手には綿のはみ出

たうさぎのぬいぐるみを抱えている。その姿はダークで愛らしいお人形さんだが、さすがに畳なだけあって、靴は履いていなかった。

「ルネ、大好きなヴァンのためならいつだって駆けつけるよ」

「あ、ああ。ありがとう」

靴はいらないので消す。畳に倒れこんだ。イグサの香りが鼻孔から入ってくる。これぞ日本人だ。

「ヴァン、ものすごく慌ててたけど」

うつ伏せのオレの頭をペシペシと叩きながらルネが言った。

「急ぎでお願いがあるんだが、いいか？」

「何？」

「数日前の街頭カメラから画像を取ってくることでできるか？」

クスクスとルネが笑った。

「楽勝だよ。時間とポイントさえあれば、すぐにでもできるよ。街頭カメラの画像、奇特的な団体が採取してるんだよね。リアルタイムじゃなくて10分おきに1枚で、解像度もそんなに高くないけど」

「そんなところあるのか」

「うん」

オレは口を開いた。「9月8日19時から20時、梅田」

「わかった」

ルネが立ち上がって、偶然スカートの中が見えた。真っ白のズロースだ。ロリータファッションの再現度に、思わず親指を立てる。すぐさまルネに踏まれた。

街中、オレは写真を凝視しながら、何度もセインに電話を掛けた。休憩時間に入ったところで捕まえた。簡単に質問する。

・狂った秋山このみを見たのはいつか。

・今日カインは来ているか。

セインは不思議そうな口調で教えてくれた。カインについては昨日から休んでいるということだった。

写真を見たときから、ぞくぞくとした悪寒が離れない。

オレがはじめてドラッグプログラムの存在を知ったとき、セインは秋山このみの狂った姿を見たのだと言っていた。すなわち、あの凡庸な顔立ちのDRだ。

「ヴァン、とれた。うつすよ」

オレは胡座を組んで座り、ルネの出したスクリーンを見る。ポイントをずらした写真が何枚も表示されていた。

「ルネ、この中からこのDR見つけられるか？」

「ああ、秋山このみのアバターだよ」

ルネがさつとピンクの瞳を走らせて、一点を指差す。

「ここ」

壁に座り込んで、手を抑えていた。赤黒い血がわずかにのぞく。

オレはDRの手首をアップした。

「確かに解像度が低いな」

「うん」

それでも十分だった。オレはこのDRがつけているギアをよく知っている。tuz社のGH301、2087年に発売され、DRブームの火付け役となった廉価モデルで、セインとカインの愛用品だった。

「ずっと、とルネが日本茶を啜る。

「やっぱりほうじ茶は落ち着くね」などと幼女らしからぬことをつぶやく。ゴシツクロリータに畳だ。これほど奇抜な光景もなかった。「それで、ヴァンは、カインと秋山このみがアバターを入れ替えて遊ぶことがあったって言うんだよね」

「ああ。ほら、これが証拠だ」

スクリーンに写真を表示させた。

「うん」

ルネがスクリーンに目をやりながら、指を素早く動かした。

「納得。アバターってユニークだよ。UIDから元を作ってるから、偶然だと誰一人同じアバターには絶対ならないの。で、この二人、ぱっぱって解析したらまったく同じアバターって結果が出るよ。だから、アバター交換して使ってたっていうのは、数値的にも裏が取れたよ」

「それで」

「それで、カインもドラッグプログラムを使ってた可能性はあるんだよね。むしろ、秋山このみみたいな素人はカイン経由でドラッグプログラムを手に入れたって言われたほうがすっきりするかな」

「ああ」

「あるいは、カインと秋山このみが会っている時に入手したか。カインが教えてくれればいいけどねぇ」

のんびりとしたルネの口調に、オレは大分落ち着いてきた。

さすがに、オレが見た最後の一枚については、ルネに言うことができなかった。軽々しく暴露することではない。オレはため息をついた。

「カイン、死んでないといいね」

「そうだな」

セインには放課後カインの様子を見てきてもらうようにメールで頼んである。連絡のない時間が重かった。時計は18:00を指そうとしていた。冷たい汗が何度も背中を伝う。遮断しきれしていない実体の不快さに、オレは眉を顰めた。

「ヴァン、ヴァン〜！」

ドタドタと慌しい足音と共に扉が開いた。セインは久々の少年すがたで、ゼーはーゼーはーと息をする。

「無事だったか?!」

「死んじゃった?!」ルネ、不謹慎だ。

荒い呼吸を繰り返しながら、セインは激しく首を振った。どっちだ。

「た、た……」

セインと目があった。

「ただの風邪」

オレはどっと疲れを感じた。

2088年9月18日(土) その1

2088年9月18日(土)

「ただの風邪、なんてことないんだけどね」

三つ編みが揺れた。薄い眼鏡が月光を反射させてキラキラと光る。レンズの奥には、鋭利な目があった。

「カイン」

彼女は唇を釣り上げた。

「この姿でははじめまして、といったところかな」

深夜0時を回ったところだ。オレは東遊園地公園にいた。高層ビルはわずかに光を灯すのみだ。波の音がよく聞こえた。

「呼び出して悪かったね」

「いや」

カインこと甲斐綾乃はオレと対峙した。背は少年姿のオレより少し低いぐらいで、白のハイネックに紺のジーンズ、イメージどおりのシンプルな恰好をしている。

「先日、ヴァンと聖がここにいるのを見たときから、半ば予想はしていたんだ。聖が今日訪ねてきて、決心した」

この公園でセインと同じ制服姿を見た気がしたので思い出した。カインだったのか。

「調べてるんだらう。秋山このみとドラッグプログラムの関係を。それとも、私　　と言っべきかな」

クスクスとカインは笑った。

「聖、あの子のことだから、『先輩の仇が取りたい』などとバカなことを言っただけで巻き込まれたんだらう。大体の経緯は予想がつく。ヴァンは、どこまで知っている？」

「ほとんど何も知らない状態だよ」

「そうか」

カインはオレの前にスクリーンを出した。

「！」

映し出された写真には、秋山このみとカインとの関係がはっきりと示されていた。

「不思議だね。ヴァンには知ってもらいたい気もするんだ。私たちのこと」

街頭カメラから取られたのだろうその写真に、DR姿のカインと秋山このみがいた。カインの頭を両手で抑え、舌を絡ませている。カインの口から唾液が伝っていた。カインの顔は快樂というよりはむしろ苦痛で、歪んでいた。

まさに、ルネに伝えることができなかつた一枚だ。オレは眉を顰めた。

「このみがうれしそうに送ってきた。他にもあるよ。もっと激しいのも」

ほら、とカインの細い指が動く。

「いや、見せなくていい」

「照れなくてもいい。欲望に忠実に生きるのも、いいことだよ」
「間に合っている」

楽しそうに、カインが目を細めた。

「間に合っている……」「復唱するな！」

秋風が冷たかった。カインはベンチにゆっくりと腰かけた。「話は長くなる」オレも做う。

半月が甲斐綾乃の顔を照らし、半面影を作っていた。

「このみとの関係を一言で表すなら、元恋人同士ってところだ。ならされた、というべきかな」

オレの想像は半分当たり、半分外れだった。

「元？」

「そう、元」

カインは月よりも遠いどこかを見つめた。

「私とこのみは同じスポーツ関連の業界に君臨する人物の娘で、幼少のころからの知り合いだった。それこそ幼馴染みとも言える間柄だったよ、小学生までは。私がこのみの恋人にさせられたのは、中学一年生の時だった。圧力だ。当時このみの会社MIMEが特許を取っていたシステム、OART導入に私が引き合いに出された。父から直々に言われた。このみの言うことを何でもきけと」

カインは淡々と語る。OARTは有酸素運動の革新的な技術で、数年前に連日メディアを賑わせていた記憶がある。詳細は知らないだが、スポーツ業界にとって、大きな出来事だというのは理解できた。

「父は媚びろという意味でいったのだろうけれど、このみの要求は違ったよ。あの頃から、このみは私に執着していた。私は気づかなかったけれど。だんだんこのみの要求はエスカレートしていった。最初は休日につき合え。次にキスしろ。最終的にホテルだ」

カインの口元は微かに震えていた。

「このみは自分の立ち位置を理解していた。カイスーツが業界最手になれたのも、OARTが独占できたおかげだしね。そうして、私は恋人という名の奴隷に成り下がった。」

嗤う。

「私とこのみとの関係は、初めから歪んでいた。このみの執着が私を搦め捕って、ずっと身動きできないでいたんだ」

クスクスとカインの口から声が漏れた。

「彼女、非常に女々しかったんだ。文字通りね。レースが好きだし、かわいらしいぬいぐるみには目がなかった。好きな色はピンクで、小学生になってもリカちゃん人形が手放せないでいた。それこそ、少女マンガが愛読書でね。私もよくレースの服を着せられたよ。ゴテゴテの趣味が悪いひらひらしたやつだ」

オレは甲斐綾乃のロリータ衣装を想像しようとしたが、できなかった。彼女の強い眼が、少女らしさを打ち消していた。

「ヴァン」

カインがオレを見た。微笑んでいるのに、泣いているようにしか見えなかった。

「そんなこのみが麗人みたいな恰好をしていたのは何でだと思う？」

「……女の子らしいとおかまみたいに見えるから」

「それもある」

彼女は笑顔を深めた。

「正解は、他の女が私に注目しないように、だよ。私に誰も近づかないように、他の女の視線を自分に向けてるように仕向けた。友人になろうとした人は、全てこのみが奪い取った。滑稽だ。このみ以外は誰もそんな目で私を見ないのに。おかげで私は友人が一人もいなかった」

このみが睨みをきかせたせいでいじめもなかったけどね、とカインは付け加えた。

文字通り、カインは秋山このみに拘束されていた。聖ベルナデッタ学院はエスカレーター式で、人間関係もそのまま持ち上がる。もちろん、カインこと甲斐綾乃は友人がいないままだった。

転機が訪れたのは、2086年の夏、セインが転校してきてからだ。天然でにぶいセインは、カインと秋山このみの関係に気づかず、カインと友情を育みはじめる。

「当時の事情を少しだけ言うと、OARTに変わる技術、mono lithが生まれた。もうこっちの方が有名になっているからわかると思う。秋山このみのMIME社ではなくHelene社だ。カイスポーツもOARTから乗り換えることになって、私はこのみとの関係を解消した。タイミングが悪かった所為もあった。聖が私を奪ったと思い込んだこのみは、聖にまわりつくようになった」

それが秋山このみのみのデータにあった写真の山だ。

「堪らなかつたね。以前は私が一人でいれさえすれば、学校ではそつとしておいてくれたんだ。『あんまり関係が知られるのは恥ずかしい』って目薬で潤ませた目でお願ひしたことも関係あるのかもし

れないが。聖が来てから、いや、別れてからかな。休み時間も教室を訪れて、四六時中私を監視しはじめた。聖はバカだから、単純に『親切にしてくれた』とでも言ってたんだろう。あれは、聖の懐柔も兼ねてたから」

写真で関係も強要された。秋山このみの束縛に限界を感じていた時、DRを知った。廉価版ギアが発売され、大々的にDRのアイドル歌手鈴木エーナが売り出された頃だ。カインは秋山このみが機械音痴だということを知っていたから、手を出さないと見込んで、拡張現実へ逃げた」

ぼろり、とカインの目から雫がこぼれた。

「はじめてだった。あんなに楽しかったのは。甲斐綾乃ではない誰かになれた気がした。自由を感じた。ルネやヴァンにも会えた。下らない遊びが好きだった。ヴァン、あの時間だけが私の救いだったんだ」

カインはすつと涙を拭った。涙とともに、表情も消え去った。

彼女の口から流れ出たのは抑揚のない声で、オレは身体を震わせた。

「アレは偶然手に入れた。強烈な快感、悦感。はじめて使って、私はこれだと感じた。このみにギアを買わせたのも私だ。すぐさまこのみにアレを使わせた」

アレがドラッグプログラムを指していることはすぐにわかった。「単純に、私以外のものに依存してくれればいいと思ったんだ。そうして、私から離れていってくれたらいい。このみは予想通り溺れたよ。アレの数も限られていたから、私の使う分は減っていったけど、使えない辛さよりもこのみの粘着のほうに苦痛だったから耐えられた。それでも、半分成功で、半分失敗だったが」

結果的に、DRでも追いかけるようになった。

「まあ、アレを使いつづけると死ぬなんて思わなかったけどね。このみは、私が殺したようなものだよ」

清々したけどね。カインはすつと立ち上がった。
三つ編みが揺れる。

「私はこのみが使っようになっから使用してない。けど、アレは一回使ったらアウトだと思う。多分、使用頻度が高いほど…」

「カイン？」

「時間切れ。最近、何度も何度も来る……。急に」

彼女が振り返ったが、逆光で表情がわからなかった。

「ヴァン。今から言うことを覚えておいて」

少女は膝をつく。波の音が耳障りだった。

「新大久保」

手を己れの首に絡めた。

「私書箱」

「屈み込む」

「に、まる……、さん」

「カイン！」

オレはカインに駆け寄って、彼女に手を伸ばした。虚しく彼女の身体を突き抜ける。オレは唯の映像だった。彼女の指はしっかりと食い込んでいて、剥がれようとしてない。

「しっかりとしろ」

カインは地面に倒れこんだ。カシャンと軽い音がして、彼女の眼鏡が外れる。レンズにはひびが入っていた。カインの口は引きつったように釣り上がり、唾液が伝っていた。

「カイン」

意識がない。オレはギアに目を走らせた。夢中で操作する。電話の呼び出し音はたった3コールなのに、やけに長く聞こえた。カインの顔がだんだん青くなっっていくのがわかる。

『なんだ、ルネのお守りヴァン』

耳に入った声は爽やかだったが、オレは気にもとめなかった。

「サイバー課！ 神戸の東遊園地公園にすぐ来てくれ。実体を引き連れて！」

「はあ？」

「ドラッグプログラムの使用者が倒れている。自分で首を締め、動かなくなつた。頼む」

「すぐ行く！」

オレは通話を切つた。

ひびの入つたカインの眼鏡が、キラキラと月光を反射させていた。

2088年9月18日(土) その2

病院にはARバリアがはってあって、入ることができない。オレは病院の前をうろろると歩いた。大学病院で、十分に一台は救急車が入ってくる。夜だというのに賑やかだった。カインとサイバー課が病院に向かう姿を見届けて、オレはセインにボイスメールを送った。だが、セインから連絡がない。もう就寝しているのだろう。サイバー課は病院に入ったきりで、出てくる気配がなかった。オレは落ち着かなくて、歩く足が止まらなかつた。

すでに午前1時を過ぎていた。

サイバー課は5分も掛からずに駆けつけてきた。まだ二十代の男性で私服だった。怒り肩でガニ股が特徴だった。オレはそれが誰だかすぐに分かった。

オレは蔑つい顔を想像していたのだが、意外なことに彼は童顔で、それなりに端正だった。

「ハルヒコ」

ハルカことハルコヒはカインの横に屈み込んで呼吸を確認する。

彼女はぐたつとしていて、何の抵抗もしなかつた。

「大丈夫、息はしている」

ハルヒコはカインの指をゆっくりと外した。首筋に手のひらの跡がくつきりと浮かんでいる。彼女の呼吸は非常に浅くて、オレには死んでいるようにしかみえなかつた。

「救急車がすぐに来るはずだ。連絡ありがとう、ヴァン」

「ああ」

ハルヒコが立ち上がった。

「今更だけど俺は」

「ハルヒコだろ」

宮島晴彦、落ちこぼれの素人サイバー課警部補だ。なぜそれを、

とハルヒコは目を見開いたが、やっぱりバレバレだ。
「そのガ二股、直した方がいいぞ」そうしたらそれなりにモテそう
だ。

オレのため息まじりに吐いた言葉に重なって、救急車のサイレン
が聞こえてきた。

半月が西の空に浮かんでいる。高層ビルにその間を繋ぐ通路やモ
ノレールの線路が、空を狭めていた。ビルを繋ぐ線が点滅していて、
大きな遊園地のようにも思える。大学病院は郊外にあったので、神
戸の高層ビル群がよく見えた。一回帰ろうかと考えながらも、ギア
を捻られずにいた頃、やっとハルヒコが玄関に現れた。

「どうだった」

ハルヒコの目の下にひどいくまができていて、憔悴しているのが
わかった。タチバナの特訓が効いたのかもしれない。

「ああ、ヴァン。少し話するか」

大学病院から三分程度歩いたところにある、赤と黄色のMマーク
が特徴のファーストフードレストランに入った。深夜であるにも関
わらず、まばらに人がいる。ハルヒコはコーラとポテトを席料代わ
りに注文した。四人席に向かい合わせに座る。目の前に置かれたポ
テトの油っぱい匂いが、オレに空腹を教えた。

ハルヒコはポテトをごそつとつまみ、口の中に放る。おいしそう
に咀嚼する姿に、オレは悔しくなった。シャクシャクとした音、こ
このポテトは好物だ。ハルヒコはゆっくりと嚥下した。

そして、オレを見る。

「甲斐綾乃は意識不明で入院した。少なくとも重体ではないそうだ
が、ドラッグプログラムがどんな影響を与えているのか分からない
ので、当分の間は検査することになるだろう」

「ああ」

オレはほっと息をついた。まだカインは死んでいない。それが重
要なことだ。

「ヴァン、君がドラッグプログラムに関わっているのはよくわかった。秋山このみ、甲斐綾乃……。色々教えてくれないか」

ハルヒコが偉そうな口調なのは、こいつが警察官だからだ。オレは両手で頬杖をついた。

「なあ、ハルヒコ。その前に一つだけ確認したいことがあるんだが」「何だ」

オレはハルヒコを見返した。

「サイバー課は一体何の容疑で捜査しているんだ？ 現行法では、ドラッグプログラムに違法性はないはずだ」

これがわかるまでは、オレは口を割るつもりはなかった。カインとセインはオレにとって数すくないDRの友だ。

ハルヒコはため息をついた。日本人にしては茶色の髪を撫でつける。

「ああ。現状、使用者を逮捕することはできない。麻薬でもないし、ウイルスでもないからな」

「そうだろうな」

タチバナの予想したとおりだった。

「だが、ドラッグプログラムをばら撒いているやつらは、捕まえる」「どうやって」

「『業務上過失致死』」

殺人の意図なしに人が死亡した場合、監督不届きで裁くことができる罪状だった。一般的に、人身事故を起こした場合に、刑事上の罪で問われる。過去に毒物の混ざった牛乳を販売していた会社のトップが、この罪状で逮捕されたことを思い出した。

「人が死ぬプログラムを配布しているんだ。摘要は可能だ」

オレはポテトを見つめた。ボックスから溢れた小さいポテトが一本だけ焦げていた。

「ドラッグプログラムと死因が関連付けられるのか？」

業務上過失致死は因果関係を証明する必要があった。

「それを調査中だ。俺はドラッグプログラムの死亡者をずっと追っ

ていたんだ。他のチームもサイバー課の中でドラッグプログラムの大元を探しているが、現状、判明していない。生きている使用者すら見つかっていなかったんだ」

だから、甲斐綾乃は貴重な証言者になる。

「そうか」

サイバー課もほとんどドラッグプログラムの情報をつかんでいなかった。ドラッグプログラムの使用者が死亡することがある、というだけだ。

オレは甲斐綾乃と秋山このみの関係を暈して、大まかにこれまでの経緯を説明した。セインこと二宮聖の名前も出したのは、カインの言葉が気にかかっていたからだ。「アレは一回使ったらアウト」、そう言っていた。

ハルヒコはオレの言葉をレコーダに採った。

「つまり、その二宮聖という子も使ったことがあると」

「一回だけな。オレが知っているのはそこまでだ」

オレの持っている情報は出尽くした。サイバー課も手詰まりだ。後はカインの証言が頼りだった。

「ああ、そうだ。ハルヒコ。やけに駆けつけるの早かったよな」

何気なく口にした。サイバー課の本拠地がどこにあるのかは知らないが、東遊園地公園まで五分というのは早すぎる気がする。

「捜査でこっちに来ていたんだ。どうも、ドラッグプログラム関連の死亡者が西よりで」

「は？」

「あれ、言っただけだったか」

明らかに初耳だ。

「今まで使用者と思われる死体が14人いるんだが、現住所がほとんど京都、大阪、兵庫なんだ。それで、サイバー課で地域性があるのではないかという話になって、俺が実体で来ることにした」

DRは苦笑だしな、とはにかんだ顔で付け加える。

「なんだそれ」

「脳裏に警察の秘密資料が浮かぶ。オレが持っているのは何通だったか。」

「おい、ハルヒコ」

オレはハルヒコの童顔に向かってにつこりと笑った。

「一人前のDRにする代償、何だったか覚えてるか」

「あ」

ハルヒコの顔が引きつった。そのくせ、すぐさまレコーダのスイッチを切る周到さだ。

「確か、ドラッグプログラムの情報だよな」

オレはにたりと唇を釣り上げる。

「それは調書も含まれているんだが」

ハルヒコの目の前に手を差し出した。くいつと指を折り曲げる。

「出せ」

何だか自分が悪人になった気がしないでもないが、これは正当な取引だ。このことがバレたらハルヒコが懲戒処分になるとも、だ。ハルヒコはサイバー課の落ちこぼれになるよりも、キャリアをとったのだ。リスクが生じるのは当然だ。そう心の中でつぶやきながら、ハルヒコからせしめたデータをオレのサーバに格納した。

「暗号化しておけよ。パスワードもつけるよ。誰にも見せるなよ」
オレにだって良心はある。多分。

すっかり冷たくなつたポテトを、ハルヒコは一本ずついじけながら口に入れていた。オレは羨びた。ポテトは大嫌いだから、いい気味だと思う。

「で、出張はいいにしても、何で三宮なんだ？」

ハルヒコが顔を上げた。

「あの辺いいホテルが集まってるだろ。せつかく公費で泊まれるなら高いところがいいな、と……。憧れだったんだよな、神戸」

駄目だこいつ。いずれ不正かなにかで免職になるだろう。保証する。

空が明るんできていた。ハルヒコと別れ、オレは東遊園地公園に戻ってきていた。夜明け前だというのに、犬の散歩をしている人もいて、だんだん街が目覚めるのがわかる。小鳥の鳴き声が心地いい。「さて」

オレは伸びをした。

サイバー課の最新の情報はオレの手のひらの中にある。ルネにこそっと渡すか、永久に閉まっておくか。どちらにしても、これ以上ドラッグプログラムに関わろうという気にはなれなかった。

カインと秋山このみの関係についてはあえて省いて、セインに簡単な顛末を改めてメールで送った。

セインの頼みは、『秋山このみだけがドラッグプログラムを使用し死亡した』真相を知ることだった。カイン関係は、彼女が生きているから直接聞けばいい。サイバー課も訪ねてくるだろうから、セインの問題も彼らが引き取ってくれるだろう。

ひとまず、調査は終わったことになる。

全てが解決し、清々しいはずの朝だった。だが、オレには何か引っかかっている、どこことなく気持ち悪かった。何かを忘れているような気がして、それが何かを思い出せなかった。

突然、ぐうぐうと間抜けな音が響く。

「そういえば、お腹減ってたな……」

ハルヒコが食べていた熱々のポテトを思い浮かべた。やり残したと思っていたものは、これだ。

すっきりしたところで、オレは思案する。

寝る前のポテトはいかなものか。いや、今日までオレはよくがんばった。そのご褒美だ。よし。

「喰うぞ！」

オレの宣言は、高らかに朝の空へ響いた。

漂ってくる焼肉の香りに胸やけがした。さすがに寝る前にポテト
LLはないんじゃないか、と正常な脳で考える。調子にのって注文
したのがまずかった。いや、味はよかったが、LLサイズを甘くみ
たのがいけなかった。甘くはない、塩辛かったって、そういう問題
でもない。とにかく、量が多かった。

オレは重い胃を擦った。チカチカと光るネオンが目にも痛い。今日
は土曜日なだけあって、普段よりもDRが多い気がした。すっかり
マスコットになっているパンダもいる。

「遅いな……」

オレはギアを確認した。22:10。セインが遅れてくることは
珍しい。もしかしたらルネに拉致されたのかもしれない。伸びをし
て、ルネの隠れ家へ歩きだした。

起きたら、セインから鬼のようなメールが届いていた。内容は予
想がつくから見ていない。ボイスメールは聞くのに時間がかかるし、
寝起きで文字を見る元気もなかったから、シンプルに大久保で会お
うと約束を取り付けた。ハルヒコからは連絡なし、だ。セインが何
か知っているだろう。もう事情徴収も受けているかもしれない。

まあ、全部終わったしな。

埃のかぶった階段を一段一段下りる。気分を反映してか、オレの
足取りは軽かった。

「おい！ セイン、ルネ、いるか？」

勢いよく部屋へ突入する。あの黒さを滲ませた少女と、清楚な少
女がオレを出迎えた。

「え？」

わけではなく、扉の先は、何も無い空間が広がっていた。真っ白

だ。壁も、何も無い。床すら存在していなかった。透明なガラスの上を立っているようだ。トントンと足元を確かめると、確かに地面がある。だが、見えない。オレが慌てて振り向くと、入り口がすうつと消えていった。

「なんだ？」

明らかにおかしい。何も無い空間に、ポツンとオレだけがいた。

「ここはルネの部屋か？」

異常だ。出口すらなくなった。オレだけがこの白い空間に浮いている。

ギアを確認する。現在の座標は、0000・000000000000、
0000・000000000000……。

「NULL?!」

「そう、ようこそ仮想世界へ」

顔をあげた。目の前には、よく見知った少年が立っている。

「はじめまして」

そう、馴染みすぎている姿だった。

「no name」

眼の前に立つ少年は、今のオレと同じ姿形をしていた。寸分違わない。くすんだ茶色い髪、さして特徴もない凡庸な顔立ち。唯一の違いは、眼の前の少年はギアをしていなかったことだ。DRならば、現実につけているギアはアバターにも投影され、これだけは偽装ができない。オレの瞬時の思考を、少年の一言が吹き飛ばした。

「エマノンだよ」

ドクンと心臓が跳ねた。

「エマノン……」

まじまじと「オレ」を見る。

アバターはユニークだ。どんなに似た外見にしようとしても、必ず違いが出る。天文学的な数字でしか衝突が起こらないUIDをベースに作られているからだ。逆に、同じ姿ということは、アバターのデータを共有していることになる。

「君のドラッグプログラムが欲しいんだよ。持っているよね？」
つまり、その意味は。」

「ごまかしても無駄だよ、柳楽誠。25歳、無職。全部知っている」

強制的にギアのスイッチを切った。急激なパルスが脳内を駆けめぐる。戻ってきたオレの薄汚い部屋、オレの身体。ギアをとる。ズキズキと頭痛がし、吐き気がこみ上げてきた。ぎこちない動きで口元を抑え、トイレに駆け込む。便器に手を置き、吐いた。喉が灼けるように痛くなり、口からは黄色い液が流れ落ちた。苦しい。咳き込んだら、めまいがした。ぐったりと便器にもたれかかる。

自分の身体なのに、強烈な違和感があった。

当然だ。オレは自分の手を抑えた。ちゃんとした変換もなしに戻ると、急激な感覚の変化に脳がついていけない。旧型のギアは、反作用もひどかった。

ふらつく身体を支えながら、オレは立ち上がるうとした。ルーターを切らないと。サーバも、それから、初期化……。やるべきことは分かっていた。エマノンがオレのアバターで現れた意味も。

ハッキングされたのだ。エマノンに。

2088年9月19日(日) その1

訂正しよう。オレは決して無職ではない。

税金も年金もきっちり納めている。辛うじて生活できるぐらいには稼いでいる。たとえ通帳の預金残高が常に一桁と四桁の間をさまよっているとしても、だ。

オレはAR造型技師とか、AR構築師とかいったものを生業としている。非常にマイナーな職業なので決まった名称は定まっていない。単純に言ってしまうえばARを作る仕事だが、これがなかなか奥が深い。

現実中存在する物体は様々な情報を持っている。外観、食感、触感、音、匂い、重さ、大きさ……、これらすべての情報が物体にはつまっている。AR化とはこれらの情報をすべて電子化することだ。現実に存在するものならば、スキャンニングでARに転化できる。しかし、現実に存在しないものは、情報転化ができない。作るしかないのだ。そこで、オレの出番になるわけだ。

顧客の要望に合わせ、ないものを造る。例えば、触手を造るとしよう。触手で一番大切なのは触感で、固いのか、柔らかいのかだけではなく、細部のイボの出っ張り具合や引っかかり具合が重要となる。取り巻く粘液の年度、匂い、味もそれらしく加味しなければならぬ。オレが一番こだわったのは、粘液の分泌量で……って。

つまり、存在しないARを作成するのは、技量と根性が必要ってことだ。2080年後半になってすら未だにアニメやマンガで登場するような大規模な「仮想世界」がないのも、すべて現実に存在しないARを作成する労力の大きさにあつた。

そして、一つだけ白状するならば、マニアックすぎる「触手クラブ」、触手の部分はオレが造った。食うに困って渋々受けた仕事だ。決してオレが触手に絡まれる趣味はないことが、お分かりいただけただろうか。とりあえず、仕事の出来を言うならば、消したい過去

だ。何故か、あの仕事以来わけのわからない依頼が多くなったわけだが……。

最初は小遣い稼ぎにやっていたものが、気づいたら本業になっていた。昼夜逆転の生活が抜けきれず、立派なフリーランス。仕事には波があつて、今は抱えている仕事がない。一つもない。一ヶ月前からない。だが、決して無職でないことは強く主張しておく。

それにしてもエマノン、どうせハックするのなら、ちゃんとオレの収入まで見てほしかった……。いや、惨めになるから見られないほうがよかつたのか？

オレは自問しながらせつせと手を動かした。

現在、サーバの初期化を行っている。警察すら騙くらかしたエマノンのことだ。オレのサーバにも正体不明のルートキットを置いてある可能性があつた。ウイルススキャンぐらいでは出てこないだろう。これが一番手っ取り早いのだ。時間はかかるが。

「なあ、誠。あのマシンもやつちまうのか？」

隣で作業をしている青年が振り向いた。美丈夫すぎて眩しい。黒髪眼鏡の秀才そうな外観で、今みたいなラフな恰好よりもパリッとしたスーツのほうが似合いそうだ。

橘伸吾、タチバナ。

実体でもDRでも交流のある唯一の友人だ。

同じ黒髪黒目の日本人なのに、どうしてここまで違うのかと世の中に絶望したくなる容姿をしている。若干背がオレより高かつたとしても、わけの分らない敗北感は拭えない。

伸吾は友人だが、あまり実体で会いたくない人物でもあつた。特に外出した場合、引きこもりのダサなオレと伸吾の組み合わせはよっぽど奇異に見えるらしく、通行人にちらちらと観察される。非常

に居心地の悪い思いをするのだ。たとえ部屋の中であっても、ジクジクとオレのコンプレックスを刺激する素敵な存在である。

が、今日は別だ。サーバ二台の初期化及び環境のリストアは思っていたより大作業になったので、ちゃっかり呼び出して手伝わせていたりする。

「いや、あれはどこにも繋げてないからいいよ」

「そうか」

部屋の隅に置いてある20年ものマシンがブーンと音を立てていた。今の情報処理には耐えられない低スペック、ネットワークにも繋いでおらず、滅多に触れることもないため、本当に電力を消費するだけの存在だ。だけど、なぜかオレは捨てられないままだった。このファンの音が馴染んでしまっているのかもしれない。

「しかし、エマノンにハックされるとはな。冗談だよな」

「何度目だよこの会話」

オレはうんざりしながらも、スクリーンに向かって手を動かす。インストール前の設定が面倒くさい。

「それにさ、エマノンなら初期化しても無駄じゃね？ どうせまた入られるだろうし」

「うるさい」

やるのとやらないのでは、情動的にまったく違う。

「エマノンなら、案外ファームまで汚染されてるかもな」

ピタッとオレの動作が止まる。それを横目に、伸吾がケラケラと笑い出した。完全に状況を楽しんでいる。ひくつとオレの唇が引きつった。

ファームとは、サーバのハードとOSをつなぐコアな部分だ。BIOSといったほうがわかりやすいかもしれない。サーバの電源を入れたときに最初に動くプログラム。通常OSからアクセスされることはない。大丈夫だ、大丈夫……。

「やっぱ無駄すぎる。やめよーぜ」

「口より手を動かせよ」

オレは一旦スクリーンを消した。設定が終わり、インストールに入った。終わるのは大体30分後だ。それからが大変なんだが。

「で、伸吾はどこまでできたんだよ」

伸吾のスクリーンを覗いて、オレは思わず頭を殴った。

「いて」

「何見てんだよ」

伸吾がスクリーンをすり抜けて膝をつく。画面に表示されていたのは、生々しい秋山このみと甲斐綾乃のキスシーンだった。

「まさか、誠にこんな趣味があるとはね」

「ねーよ!」

頭をさすりながら立ち上がる姿も十分様になる。

「人のプライベート何探ってたよ!」

「普通やるだろ? エロ画像エロ動画エロゲーム。いくつ隠し持っているのか気になる」

「持っていないよ……」

頭を抱える。伸吾の頭の構造がさっぱり理解できない。ロリショタペド御用達のいかがわしい風俗店『アリスの国』を営んでいるのだ。ぶっ飛んでいるのは最初から分かっていたが。

「これはなーんだ?」

でかでかと表示された写真に、オレは吹き出した。秋山このみと甲斐綾乃のさらに濃厚なシーンがスクリーンに映し出されている。

「百合好きなら言ってくれたらよかったのに。紹介するよ、ソレ系の店」

「結構です」

深く深く深く、ため息をつく。

「この写真は、オレのDR仲間とドラッグプログラム被害者だよ」

「どついうことだ?」

「カインってやつと、カインに関係を強要していた少女だよ」

そういえば、まだ伸吾には話していなかったなと思ひ出す。簡単にことこの顛末を説明した。

「へえ。俺が眠っている間にそんなことが、ね」

半目でオレを見る伸吾。微妙に笑っているところに寒気を感じる。ひとまず作業を中断し、オレの狭くなるしい部屋に無理やり置かれたポロポロのソファに座っていた。伸吾の堂々とした寛ぎ方は、勝手知ったるなんとやら状態だ。

「ハルカの指導でくつたくたに疲れてダウンした俺へ全く連絡もなく、起きてみたらすべてが終わっていました。もちろん報告はなし。ふん」

「ははは……」

オレにはもう、苦笑いしかでない。

「でも解せないな。エマノンがなぜ誠のサーバに侵入したか」

「だよなあ。オレ秋山このみと甲斐綾乃の情報しか持ってないし」

「しか、持っていないんだ？」

ぱつと、オレの正面にスクリーンが映し出された。

「しか、ねえ」

オレは目を逸らした。完全に忘れていた。

目の前のスクリーンには、ハルヒコから頂戴した警察の機密資料が盛りだくさんに表示されている。

きつとエマノンも見ただろうな。セキュリティ事故だ。懲戒処分だ。ハルヒコ、すまん！

心の中でハルヒコに陳謝しつつ、微妙に伸吾から距離をとっている。なぜ美形の笑顔はこんなにも怖いのだろうか。

「で、これ、何？」

「ドラッグプログラムの被害者と思われる人たちの資料だよ。どうやら被害者は関西圏に多いそうだ。正直、もう手を引こうと思っていたから、ルネにでもあげるつもりだったんだけど」

「へえ」

ちらつと伸吾を盗み見ると、興味が機密資料に移ったようだった。実はそれもタチバナを引き合いにだして手にいれた情報なんだけど

な。

「すごいな。これ。良かったじゃないか、エマノンの目的が分かって」

「は？」

オレはよっぽど変な顔をしていたんだと思う。伸吾が整った眉をしかめ、眼鏡をぐいっと押した。

「この資料がほしかったんだろ、エマノンは」

「……」

反芻する。エマノンはものすごく見当外れのことを言っていた。

「確か……、『君のドラッグプログラムが欲しいんだよ』とか何とか」

「持っているのか」

「なわけない」

「だよな」

伸吾が黙り込んだので、オレはゆっくりとカフェオレをいただく。ブラックコーヒー派だが、カフェオレは別だ。牛乳：コーヒー＝2：1にして、生クリームを少しだけ滴らすのがコツだ。砂糖は多めに

「なあ」

伸吾はシリアスな顔をしている。

「なんだ？」

「どうしてエマノンは誠がドラッグプログラムを持っていると思っただんだ？ 昨日の今日ってタイミングで、だ」 深夜0時を越えているが、寝るまでが9月18日だ。オレは頷いた。

「そうすると、甲斐綾乃との邂逅で、誠が思っている以上のことがあったんじゃないか？」

脳裏にカインの姿を思い描く。強い意志を持った眼、揺れる三つ編み、時間切れだと言った小さな唇、華奢な肩、ゆっくりと倒れゆく姿。

オレははつと立ち上がった。カフェオレが零れて手にかかるが、気にしてはいられなかった。

「新大久保、私書箱、203、そう言っていた」
「それだ！」

お前マヌケすぎるよ、と伸吾に頭を叩かれた。痛い……。

「私書箱、なあ」

頭をさすりながら、オレは一人ごちた。

「郵便局はたしか10時からだったか」

時計は午前2時10分前を指していた。

「受け取りに何がいるんだっけ？」

オレはスクリーンに郵便局の地図を映し出し、経路を指で追っていた。大久保駅から徒歩5分といったところか。ふいに、奇妙に生ぬるい視線に気づいて、伸吾へ顔を向けた。

「何？」

伸吾は半眼でオレを見ていた。わずかに唇を歪めていて、明らかに嘲った顔だ。

「何だよ」

はあ、と盛大なため息。伸吾の一挙一動が大げさだと感じるのはオレだけだろうか。

「なあ、誠。お前それが郵便局の私書箱だと思っているのか？」

「それ以外ないだろ」

「……誠は変なところで世間知らずだよな」

「どこがだよ」

ロリシヨタペド専用の風俗店をやっている人間に世間を問われるとは。いや、あの変態な店こそが、裏の世間なのだろうか。はつきりと分かるほどに顔を顰めると、伸吾は困ったように笑った。

「あのお、誠、私書箱ってのは何だと思っ？」

「バカにしてるのか？」

「そう、箱だよ、箱」

「答えてねえよ」

「その箱の中にはプライバシー満載の手紙なんかが入っているわけだ。もちろん不特定多数の人間に勝手に見られるのはまずい。だから鍵がついているのだよ」

「それぐらい知ってるよ」

「では質問だ。その私書箱の鍵は、誰が持っている？」

伸吾は得意気に眼鏡を押し上げた。

「簡単なことだよ、ワトソン君。それは、郵便局の私書箱ではないというわけさ」

「……」

伸吾は優雅にコーヒーを飲んで一息ついた。オレも合わせてぬるくなったカフェオレを口に含む。たかが私書箱ながら、わけの分からない敗北感を感じる。私書箱どころか、家のポストすら不要だと思っている寂しいオレの実状を知っているわけでもあるまいに。

「なんてな」

にやり、と伸吾が唇を歪めた。

「は？」

伸吾がオレの目の前にスクリーンを出した。どこかの業者のサイトらしい。でかかかと「私書箱203」と書かれてある。

「俺もよく利用するんだよな。におさん。ほら、子供たちにプレゼント送る常連さんとかいるんだけどな」

「へえ」

「おかしみみたいな愛らしいのから、アレな道具まで色々あるし。俺は自宅に絶対送りつけてほしくないから、使ってるんだ」

「アレな道具って」

「いるか？」

「いらん！」

残念そうな顔はしないでほしい。オレは触手だけでお腹いっぱいなんだ。

オレはサイトにぎっと目を通した。具体的な写真はなく、ポップなメイド姿のイラストがある。「203ってなあに？」という文字に触れてみたら、くるくるとメイドが動き始めた。

「へえ、ギアを鍵にしているんだ？」

「おもしろいだろ」

私書箱203はDR間のやりとりに特化したサービスらしい。実体を知らなくても、相手のギアのシリアルさえ分かれば、手紙や荷物の送付が可能になる。ギアを持って受取は近所の203へ行き、手続きを踏めば良い。ギアのシリアルは、ギアごとにユニークな数字を振られているので、実質DRの身分証明書みたいなものだ。

「まあ、におさんは転送サービスも行ってくれるし、結構有名だよ」
DRの普及とともに急速に広まったサービスで、登場してここ1年ぐらいなのだそうだ。オレが知らなくても無理ない話、のはずだ……。

オレは軽く伸びをして、ソファから立ち上がった。

「24時間営業でも、この時間だと交通がないしな」

「朝までのんびりゲームするか」

「いや、サーバの作業に戻るぞ。戻ってください」

伸吾を促し、やっとのことでサーバの前まで移動させる。

「仕方ないな。ほら」

伸吾がでかかどかとサーバの操作ターミナルをスクリーンに映し出したところで、彼の手首がぴこぴこ光っていることに気づいた。

「なあ、それ光ってない？」

「え？」

シルバーのブレスレット型チューナーだ。

「悪い、電話だ」

「うん」

伸吾がチューナーに触れ、通話回線を開く。オレは伸吾が変わっ

てサーバのスクリーンに触れた。まったく何も終わっていない状態だ。軽いため息が出た。

「なんだって？ ああ。わかった。……。すぐにいく」

伸吾は声を抑えていたが、それでも漏れ聞こえてきた。短いやりとりだった。

「悪い、誠。店の方で急用だ。帰るよ」

秀麗な伸吾の顔が歪んでいて、焦りが浮かんでいた。いつも伸吾が飄々とした姿しか知らなかったで、オレは単純に驚いた。

「ああ。助かった。ありがとう」

実際は何も助かっていないのだが。

「どうなったか、連絡はちゃんと入れるよな」

伸吾が拳を差し出したので、オレも自分の拳を合わせた。

去り際に、伸吾がぼそつと耳打ちした。

「そうそう、におさんな、大久保のはすごいぞ」

「は？」

2088年9月19日(日) その2

「は？」

オレは今、大久保にいる。におさんこと私書箱203は意外にも駅に隣接していた。一步店内に踏み入れて、伸吾の言葉がやっと脳内に染み込んだ。大久保のはすごいぞ。

うん、すごい。

「はい、いらっしやい」

出迎えたのは、見事な巨乳だ。豊満で、服からはち切れんばかりの大きさだ。視線が胸に直撃だ。ギギギと無理矢理頭を押し上げて、やっと店員を見た。オレは顔に熱が集まるのを感じた。妖艶という言葉がピッタリの女性だった。にっこりと微笑んだ紅色の唇の側にほくろがある。ダークブラウンの豊かな髪が胸元でカールしていた。彼女は、サイトと同じメイドの恰好だった。

「あ、あの」

「どうなさいました？」

少し上目遣いでオレを覗き込む。

一気に熱が加速する。オレは慌てて視線を逸らせた。

「はじめてなんですけど」

「使い方は簡単ですよ。ギアをこちらのパネルにかざしてみてください。さいな。かばって隣の扉が開いて、お客様の用品がでてきます」

メイド、もとい店員が示した先に、ギア読み取り用のパネルがあった。私書箱はオレが想像していたような、郵便局にずらっと並べられている箱の山ではなく、50センチ四方の扉が一つ。品物をどこから選択して持ってくる仕組みらしい。

「ああ」

オレはシヨルダーバッグを漁った。健全な男子なんだ、うつむき加減に胸を盗み見るのは仕方がない。手探りでゴツイ馴染みの物体を掴み出す。世間様よりもかなりデカイものは、言わずもがなの才

レのギアだ。

「まあ」

彼女は口に手をあて、驚愕のポーズをとる。そして、すっと目が細くなった。

確かにオレのギアは旧型でボロボロだが、そこまで驚かれても困る。すぐにギアをパネルにかざし、仕舞おうとしたところで、彼女にギアを撫でられた。

「?!」

危うくギアを落としかけた。

「な、なんですか?」

「ずいぶん珍しいギアですね」

「ま、まあ」

顔が熱くなる。なんだこれは。フラグか、フラグなのか。だったらジーンズにパーカーなんてイケテナイ格好でなくて、伸吾にコーディーネーション頼むんだった。

店員の目がキラツと輝いた。

「まさか、これはツ。今は無きtodoro社製GR001B! 2075年1月販売、同年5月todoro社の買収により販売中止。世界で300台も売れなかったという伝説の!」

「え」

ギアオタクかよ。ギアを奪い取ろうとする手を必死にかわし、ギアをバッグへ入れた。バッグはオレの背へ避難だ。

「初めて実体見た。感激!」

右手を両手でぎゅうつと握られた。やわらかいというより、爪が食い込んで痛い。痛い……?」

「ななな生身!」

「ええ、実体ですよ。改めまして、店長の二才です」

「二才……、さん?」

彼女は満面の笑みを浮かべた。

「よろしくお願いいたしますね、『ルネのおもりヴァン』」

「……………」

「だって、このギアを現役で使ってるって、『ルネのおもりヴァン』しか思い当たりませんもん。化石級のギアですよ。そして生『ルネのおもりヴァン』！もちろん、これはルネちゃんにも内緒です。ヴァンの実体見たって言ったら、あの子嫉妬でうちのサーバ全部こわしてしまっわ」

「はあ……………」

脱力した。あんなに火照っていた顔も、今は平温に逆戻りだ。

「ルネの知り合いですか」

「彼女、お得意さんなので」

ああ、そうですか。大体二オさんがわかった。ルネの知り合いっただけで、濃い。どろどろのヘドロのような濃度だ。あまり深く関わらない方がいいと、本能がささやいた。

タイミングよく私書箱の扉が開く。

「お荷物ですよ」

箱の中には、どこにもありそうな白地の封筒が一つ。軽かった。なぞると、指先に僅かな凹凸があって硬かった。あて先にはバーコードがついている。おそらくこれがアバターの何らかの情報なんだろう。裏を見ると、筆記体で「Cain」だ。

オレは何か悪いものでも見つかってしまったかのように、そさくさとそれをバッグに入れる。

アバター情報で荷物が送れるのはいいな、と思う。ただ、送る相手がいないわけだが……………。

「ありがとうございます」

二オさんにはこやかに笑った。オレは手を上げて、入り口へ向かう。

「いえ〜。またご利用をお待ちしていますよ、『ルネのお守りヴァン』」

手を振る二オさんの動作に合わせて乳がぶるんと揺れた。

さて、オレの手のひらにあるのは、間違いなく面倒ごとだ。

新宿駅南口にある、人魚がロゴマークのコーヒーショップで、エスプレッソ、チョコチップをトッピングした抹茶フラペチーノを一口啜った。ほんのりとした抹茶とエスプレッソの苦さが交ぜになって、独特の風味がある。チョコチップの微かな触感がいい。普段は絶対に近寄らないこの店で、豪華にトッピングまで追加したのは、後でその料金をカツアゲ、もとい、払っていたかどうかという魂胆があつたからだ。

朝5時という時間だからか、店内は疎らだ。おしゃれなオークのテーブルには封筒の残骸がある。そして、右手にチップだ。

封筒を手にとった時点で、半ば中身は予想していた。数日前にセインに見せられたあの量産型チップと外観が同じものが1枚、ギアから中身にアクセスしてみれば、何かのバイナリが入っていた。

「何でオレに送るかな」

ドラッグプログラムだった。円満ハッピーエンドで終わったドラマなのに、泥沼のトンデモ展開第2シーズン開幕、そんな気分になる。

15分ばかり大久保から新宿まで歩きつつ、このチップの処分方法を考えていたが、結局サイバー課を呼び出した。ルネに渡すと喜びそうだが、今回はセインとカインの命がかかっている。さつさと解析してもらって、副作用をどうにかしてもらいたいという気持ちが強かった。

「そろそろかな」

抹茶フラペチーノ・トールは約半分消費、時間にして10分弱。

「いらっしやませ」

ドアが開かれるとともに、明るい女性の声が店内に響いた。

2088年9月19日(日) その3

入店したのは奇妙な二人組みだった。店内すべての視線が扉に集中する。店員すらマニュアルのスマイルを忘れ、呆然と見入っていた。

まず視線がいったのは、最初に入ってきた男だった。一言でいうと、ダサイ。ガリガリの身体にぶかぶかのTシャツを着ている。アニメ『ぶんすかぷりんせす』のやえちゃん(?)がプリントされたものだ。その下は着古したジーンズ。リュック、瓶底眼鏡、鉢巻、襟下まで無造作に伸びた髪。どこぞの古典漫画に描かれるオタクルックスそのままだった。

しかし、それだけならこれほどまでに注目されなかつただろう。正確に言えば、視線は男の隣に注がれていた。

彼女は、すっと細長い脚を差し出した。歩く姿はモデルのように優雅で、生きている芸術そのものだ。わずかに頬にかかった髪を流れる動作で振り払う。さらさらとした姬カットが彼女の頬を掠めた。美眉、長い睫、紅の唇は艶やかだった。ピンクのジャケットに白のワンピースが、彼女の艶やかな髪と白雪のような肌を映えさせていた。黒のブーツがよいアクセントになっている。オレはストローから抹茶フラペチーノを垂らしながら呆然としていた。

「あの、ARと普通のエスプレッソ一つずつ」

鈴のような声が店内に響いた。

「は、はいッ！」

我に返った店員は勢いよく返事し、エスプレッソ用のカップを震える手で用意した。

彼女は見事なアルカイツクスマイルを店員に向けた後、店内を見回した。オレもやっと正気になり、慌てて目を逸らす。今日はこんなことばかりだ。橘と違って女性に縁がないからな。手持ち無沙汰にストローを回した。

「あの」

オレの前に影ができる。顔を上げると、先ほどの美人が立っていた。

「え……？」

「ここ、よろしいですか？」

彼女は小首を傾げた。両手には湯気の立っているエスプレッソがある。店は空席がほとんどだった。オレは顔に熱が集まるのを感じながら、必死に頭を回した。

「ま、ま、ま」

吃るな、オレ。

「待ち合わせをしているので」

直視できなくて、思わず顔を逸らす。

彼女はくすつと笑った。その瞬間空気に花が咲いたような錯覚がする。

「初心なんですね。ヴァン、でよろしかったですか？」

「え、あ、はい」

彼女とオタクは、オレの向かいの赤いソファに座った。ハルヒコにはこの店の赤いソファに座っていると伝えていたから、おそらくこのものすごい美人とオタクがサイバー課の仲間なのだろう。今更ながら、彼女の細い手首に巻かれているギアから、彼女がDRなのだを知る。隣のオタクは実体だった。

「は、はじめまして」

どうしても俯いてしまうのは仕方がない。半分減った抹茶フラペチーノを見ることで、暴走している心臓を落ち着けようとする。

「ふふ、まだわからないんですか？」

「え？」

わかるもなにも。

「どちらさまでしたっけ」

オレはこんな極上の美人とお知り合いになったことがない。

「実体のヴァンはかわいらしいですね。私、ハルカですよ」

「は？」

思わず彼女を見た。ハルカ、ハルカ……。ハルカ「ハルヒコ。

「ハルヒコお？！」

指をさして叫んでしまった。衝撃のあまり、ソファからも立ち上がっている。ありえない。ありえないだろう。確かに、言われてみるとハルカと同じアバターだ。オレのコーデイネートした資格好だが、あのゴリラみたいな雰囲気をかもし出していた人物と中が同じだとは到底思えない。ハルヒコが入ったハルカと目の前の彼女を並べると、美女と野獣という言葉がそっくり当てはまるだろう。それぐらいに違う。詐欺だ。中の人は嘘をついているに違いない。

一瞬で駆け巡った思考に追い討ちをかけるように、指さした右手をオタクにぎゅっとつかまれた。

「ほかあ感動しました！ あのガサツな上司を1日でここまで仕上げることができなんて」

「え、あの」

瓶底眼鏡の奥から、キラキラしたものが見える。

「機械オンチで全然使えない無能上司だから、嫌がらせに変なアバター与えてみたんすが、まさかここまで扱うようになるなんて、正直ほかあ驚きました。鈴木エーナ以来の傑作ツス。聞けばヴァンさんのおかげっていうじゃないスか。マジ感動ツス」

オレはまじまじとハルカを見た。笑みを浮かべてエスプレッソを飲む。

「私、あの時はじめて地獄はこの世にもあるのだと思いましたわ」
「タチバナ、お前一体どうやってたら一日でこんなになるんだよ！」

「ははは」

熱は急降下、顔を引き攣らせながら、どすんとソファに座った。目の前の女優もかくやというほどの女性中身男性、何故かオレを尊敬の眼差しで見るとオタク。頭がうまく現実を受け入れてくれない。

「落ち着くために、ずずずと抹茶フラペチーノを啜った。オーケー。」

「改めて、ほかあサイバー課の本村弘美っス。よろしくス。『ルネのお守りヴァン』スよね」

「ああ」

「ここでも出た。『ルネのお守りヴァン』。脱力ついでに訊いておく。」

「その、有名なのか？ ルネは」

「知らないんスカ?!」

「極端に驚かれても困る。」

「有名な情報屋っスよ。知らないものはないってほど情報持ってるんすが、気まぐれな上に情報量が高くて有名ス。扱いづらいで、情報を買うのも一苦労なんスよ。だから、いつも一緒にいるヴァンさんは奇異と羨望の意味を込めて『ルネのお守り』って言われてるんス。まさかヴァンさんが知らないなんて思わなかった」

「情報屋だったのか。情報屋なんて漫画や映画の世界だけの話だと思っていた。どこかどす黒さを滲ませたあの幼女が情報屋、確かに言われるとしっくりくるが。」

「はあ」

「ため息一つついて、オレは改めて自己紹介をした。」

「ヴァンこと柳楽誠、よろしく」

「必然的に本村弘美にフォーカスするのは、隣のハルカが目には毒だからだ。ハルヒコとわかっていても一挙一動にどぎまぎする自分が憎い。」

「柳楽、誠!」

「なんなんだよ。」

「まさか柳楽誠さんスカ! あの『触手クラブ』の!」

「ぶはつとハルカがエスプレッソを拭いた。一瞬自が出たぞ。」

「本村弘美は額をトン、と叩いた。」

「ヴァンさんが柳楽誠さんだったんスカ。はあ。うれしいなあ。」

「ほかあ『密林少女』大好きなんスよ。あ、『密林少女』は押収したHDDにあったんスケどね。感動のあまりデータ買っちゃいました。」

あのビデオに出てくる触手、リアルすぎて。ぴたぴたと触手が少女の頬に当たるたび、少女が思いつきり顔を顰めるんスよね。粘液が臭そうで、いやいやって首を振るしぐさがたまらないっス。あれ絶対演技じゃないス。聞けば、『触手クラブ』で撮られたっていうじやないスか。ほかあもうすっかり触手に魅入られまして、サイバー課チラつかせながら何度もオーナーに問い詰めてやっと作成者教えてもらったんすよ。それくらい大ファンっス」

「……」

一気に巻くしたくられてよくわからなかったが、オレの作った触手でエロビデオ、だと？

「もちろん上司にも見せたんスよ。だけど、あの芸術がわからなかったのか、見事に吐いたっス。理解できないスなあ。あのいぼいぼがじわじわと少女に巻きつきながらも、肝心な部分はじらすのがなかなか赴きぶかくて」

「そろそろ、本題に入りませんか」

心なしか、ハルカの顔色が青かった。口元を両手で押さえている。何かを察したのか、本村弘美は顔を歪めた。

「DRになってまで吐かないでくださいよ」

「うっ」

ハルカが落ち着くのを待つて、オレは二人にチップを差し出した。ハルカはすつとチップへ手を差し出すが、すり抜ける。この辺はまだ実体の癖が抜けていないんだろな。代わりに本村弘美がチップを持って、まじまじと見た。

「ほう、もしかしてこれがドラッグプログラムっスか」

「ああ、多分な。中にはバイナリが入っていた」

「チップ自体は確かにドラッグプログラムで使われてるものと同じスね。どうやって手に入れたんスか」

テーブルの上の抹茶フラペチーノはすっかりなくなっていた。エスプレッソも空だ。オレは背中をソファに沈めて、ぼんやりとチッ

プを見た。

「甲斐綾乃、いるだろ」

「あの子」ハルカがつぶやいた。本村弘美も知っているのか、頷く。彼女、カインがオレ宛に送ってきた。倒れる直前に教えてくれた。どういう意図なのかまでは訊けなかったが……。自分でもヤバいと思っただらうな」

ハルカが顔を伏せた。長い睫が震える。

「甲斐綾乃は今も昏睡状態だ。病院側でも調査をしているが、原因は不明。ただ、血中のストレス成分の値が高いとは言っていました」
「そうか」

ガラス越しに朝日が差し込んできた。チップが金に反射する。

「サイバー課が抑えているドラッグプログラム使用者で生存しているのは、二宮聖、甲斐綾乃の二名のみ。うち、二宮聖は甲斐綾乃秋山このみ経由で入手との証言があるっス。となると、実際に鍵を握っているのは甲斐綾乃っスね」

「早く目覚めてくれるといいのですが」

「そうだな」

まあ、と本村弘美が口を開いた。

「こいつが手に入ったからには、ぼくが何とかするっスよ。バリバリ解析してヴァンさんの友人救うっス」

チップを握り締めた拳で胸を叩く。オレは深く頷いた。

そろそろお開きだ。軽く意思を確認して、オレは立ち上がった。

「ああ、そうだ」

ハルカと本村弘美を見る。

「そのドラッグプログラム、エマノンも狙ってるぞ。オレのサーバにハッキングしやがったからな」

ゲツと呻きを漏らした本村弘美と、眉を吊り上げたハルカ。

「だ、大丈夫ス。ぼくのセキュリティは万全スよ」

「頼んだ」

ひらひらと手を振って、オレは店を後にした。

そうして、オレは抹茶フラペチーノ、エスプレッソ、チョコチツ
プoppingの料金を回収し忘れたのである。

帰宅すると、午前7時を回っていた。普段はとっくに寝ている時間なのでかなり眠い。のろのろとカバンからギアを取り出して、まだオフラインなのに気づいた。一通りサーバの初期化・復旧は終わっているので、ネットにつないでみる。

「何だよ」

サーバには大量の伸吾からの着信が残っていた。

『メッセージ聞いたらすぐに店に来てくれ』

伸吾らしからぬ焦りを含んだ声に、オレは慌ててギアを腕に取り付ける。座標は『アリスの国』へ。カチ、とギアを捻った。

「やあ、やつと来てくれたね」

目を開けると、オレの声が聞こえた。ぽっかりとした空間に、オレだけが浮いている。座標はNULLを差していた。

「またお前かよ、エマノン」

眼前に、オレのアバターが現れた。やはり手首にギアはない。橘が言っていた通り、こいつにセキュリティは無意味だ。ギリツと奥歯を噛んだ。

「あの着信の山は偽装か？」

くすつとエマノンは笑った。普段のオレの姿の分、強烈は違和感が襲う。

「タチバナシンゴからの電話のことかな。それなら本物だよ」

「今すぐここから出せよ」

「やだよ」

「お前ッ」

掴み掛かるうとしたオレの腕をすり抜け、エマノンはオレの頭一個分上に立つ。

「意外に短気なんだね」

誰だつてこの状況なら怒るだろう。恐らく、だ。こいつはDRではない。昨日はオレのアバターに騙されたが、眼前のエマノンは単なるARだ。ギアがないのは隠しているからではないし、今現在そんな技術は存在しない。DRのように表情動作が巧みだが、そういう風に見せられないわけではなかったことに気づいた。こいつはどこか別の場所でニマニマと無様なオレを観察している。オレはエマノンに危害を加えることさえできないのだ。

「残念だが、ドラッグプログラムはサイバー課に渡した」

冷静になれ、と両手を握り締めながらエマノンを見上げた。あいつは目を細めて、愉快なものを見るかのように唇を吊り上げた。

「知ってるよ」

「じゃあ一体なんだよ。もうオレに用はないだろ」

「あるよ、これ」

エマノンが右手をオレに差し出した。握られた拳をゆっくりと開く。

「……、ドラッグプログラム」

右手の上に浮いたそれは、先ほどオレがサイバー課に渡したものだ。だった。

「今、本村弘美のギアから直接アクセスしているんだ。バカだよ、あんなセキュリティ何度でも突破できるのに」

クスクスと嗤う声が耳障りだった。エマノンを睨むが、何もできないオレを嘲笑うかのように、ますます唇を歪める。

「彼らに解析は無理だよ。これ、逆コンパイルしてみたけど、プログラムが入れ子状になっていて、表面をなぞっただけでは、何がなんなのかわからない仕組みになっているんだ。で、プログラムを実行すると、中のプログラムが壊れてしまうようになってる」

「お前にはできるのかよ、スクリプトキティ」

幼稚なハツカー。厭味を込めると、一瞬だけ眉を顰めた。

「心外だな、柳楽誠がそう思ってるなんて。まあ、いいけど。キティかどうかはこれから判断してもらおうから」

嫌な予感がして、一步、オレは後ずさった。

「これを解析するには実際にプログラムを走らせてみて、動きをトレースするしかないんだよ。だから、」

オマエデタメサセテモラウヨ。

逃げようとするが、手遅れだった。一瞬の出来事だ。チップが光が生まれ、オレに向かってきた。光はオレの胸を貫いた。

瞬間、強烈な快楽、扇情、アドレナリンが脳内に迸る。抗うことはできなかつた。「ははは」自然と笑い声が毀れた。懐かしい感じだ。閃光がいくつも走り、そのたびに何かから開放された気分になる。余計な自分がどんどん削ぎ落とされていくのがわかつた。今までの陰鬱なオレが生まれ変わったかのように、世界が煌いた。

ドラッグプログラムが何だよ、エマノンが何だよ。どうだっていいじゃないか。本当におもしろおかしい。楽しい、愉しい。グニヤリと目の前のオレが融けていった。ああ、こいつはエマノンだったか。どうでもいい。何もない空間というのがツボに入って、オレはくすくすと笑った。NULLだって？ 単純に作りこむのが面倒だっただけだろ、キデイ。結局、あいつは自分で試すのが怖くてオレにしかけたんだらう？ 強がりかよ。ああ、たのしい。しかし、何だってオレはあんなにがんばってたんだらうなあ？ しあわせなんてこんなに簡単に手に入るじゃないか。しあわせ？ しあわせだ。しあわせってなんだ。このじょうたいのことだ。おれはみたさされているのか？ みたさされている。どうしてだ？ せいんもかいんもたすけをもとめているのに？ あいつらがまきこんだんだ、かんけない。しんごがよんでいたのにいいのか？ あいつはひとりでどうにかするさ。いままでもそうだったしこれからもそうだった。なあ、ほうっておいてくれよ、おれはいまこんなにたのしいんだよ。おにいさんのことは？ おにいさんだって？

2088年9月19日(日) その5

目の前には、あれほど憧れていたギアがあつた。世界ではじめて発売された小型ギアだ。今までのヘルメット接続とは違い、手首に巻くタイプのものだった。重さも1キロ程度と軽量化されている。ブラックのメタリック加工が格好よくて、ARの世界が存外楽しくて、秘かに憧れていたものだった。それから、接続用のサーバも。ギアの情報を処理するには多少苦しいが、それでも当時としては十分モニターマシンだった。一般的な家庭用サーバとは違っていささか大きい。それが逆に気に入っていた。

オレは喜びと困惑を緋い交ぜにした表情で、見上げた。

「あげるよ」

兄は優しく微笑みながら、オレに言った。だけど、これには彼の夢が詰まっていたんじゃないのか？

「必要なくなつたんだ」

いいの？ 本当に？

恐る恐る伸ばした手に、ギアが馴染んだ。ずっしりとした重さは、これが現実なんだと教える。喜びが爆発した。差し出された憧れに、オレは兄がどんな心境かなんて考えようとしなかった。嬉々として、もらったばかりのギアをぎこちない手つきで腕に巻く。接続したわけでもないのに、どきどきと胸が高鳴った。

どう？

ギアをつけた左腕を兄へ掲げた。満面の笑みで、オレは兄を見た。

兄から「顔」が消え去っていた。だから、この時の兄の表情を知らない。

懐かしい夢を見た。オレはゆっくりと身体を起こした。ずるり、

とギアを外すと、手首に薄っすらとギアの跡が残っている。ズキズキと痛む頭をしばらく抑えて時間を確認した。17:32、10時間近く眠っていたわけだ。

のろのろとオレは一回り大きいサーバへ向かった。15年以上前は最新鋭の、今ではすっかり時代遅れの宝物だ。筐体を撫でる。僅かに熱を持っていた。ブーン、とファンの回る音が聞こえた。

オレが完全に活動を再開したのは、それから1時間以上経ったことだった。簡単にシャワーを浴びて、カップラーメンを啜った。眠っていた頭が覚醒していくにつれ、腹の熱が高くなる。ずしんとした錘を一つ一つためていくように、昨日の記憶が怒りに変わっていった。ギアを再びつけるころには、完全に頭にきていた。オレは喧嘩とは全くの無縁だが、今エマノンがここにいたら迷わず殴りかかるだろう。

エマノン、それ以上に自分だ。不甲斐ないの一言につきる。強烈な自己嫌悪、理性を剥ぎ取られた剥き出しのオレはおぞましく醜かった。

親指が折れるほどギュッと手を握りしめた。

結局、ドラッグプログラムと関わりを持ってしまった。一回でも使用すれば危険というカインの言がある。そして、おそらくエマノンはそれを知っていた。ドラッグプログラムを試すだけなら、オレ以外でもよかったはずだ。それなのに、オレを狙ってきたことは、なんらかの意図があるはずだ。少なくともあのチップをばら撒いているヤツを捕まえるまで、この騒動から抜け出すことはできないだろう。最低の気分だ。いいよ、最後まで関わってやるよ、エマノン。

「クソツタレ」ギアを捻った。

降り立った先は『アリスの国』の正面だ。エマノンの空間に飛ぶことはないだろうと思っていたが、いざここにこれてほっとした。

北海道では日が落ちるのが早いのか、すでに星が輝いていた。しかし、いつもの賑やかさはない。夜は輝いているはずの趣味の悪いイルミネーションは沈黙していた。

「タチバナ、遅くなった」

客はいないようだった。タチバナは受付に座って、いくつものスクリーンを睨んでいた。柔らかな表情が素敵なはずのアバターは、今日は荒々しい空気を醸しだしていた。

「ああ、遅すぎだ」

タチバナがオレを認めて、ため息をついた。

「何があった？」

「客にドラッグプログラムでラリったやつがいた。それで、リカちゃんも襲われた」

「嘘だろ」

タチバナが無言でスクリーンを寄越した。画面には店内の様子が映っている。受付の先にある待合室で、先生風の男が一人立っていた。少女が入ってきて、簡単に会釈した瞬間、急に男が動いた。ぬつと両手を差し出して、少女のうなじを押さえる。そのまま両手で首を絞めた。首がもがれるのではないかと思うほどに、男の指が細い首に食い込んでいた。音が出ない分、不気味な動画だ。30秒ほどで少女の姿が消え、男が暴れ始めた。

「向ここの部屋、見てみるよ」

散々だった。待合室はファンシーにおもちゃや人形が置かれていたが、見事に壊され、人形は四肢が散らばっている。床に、男の唾液と思われるものが付着していた。

「最悪だろ」

タチバナが顔を歪め、困ったように笑った。

「リカちゃんは？」

「実は無事だが、精神的にかなりキてる。DR化が怖いそうだ。」

それ以上に客が。もしかしたら辞めるかもな」

「そうか……」

オレもリカちゃんとは面識があった。某子供の人形を彷彿とさせるような、前髪ぱつっんの茶髪ロングで、目がくりっとして大きい小学5年生の設定なので、店でも年は高い方だった。明るくて、すっかりとしていた印象がある。実体は元男娼の37歳。

リカちゃんは間違いなくプロだった。DRはある程度五感を調整できる。こんな仕事をしていると、痛覚や触覚をほとんど感じないようにする者も少なくないが、逆にリカちゃんは感覚を増幅していると聞いたことがある。「自分も感じて、その分お返しをするの」って優しい目で言っていた。

だから、首を絞められたときの痛み、感触を必要以上に受けてしまっただろう。DR化は強制終了も可能だが、リカちゃんにはする時間さえ与えられなかった。

「誠、俺は正直怒っている。あのクソヤロウにも、ドラッグプログラムばら撒いたヤツもな」

「ああ」

「だから協力してくれよ」

協力もなにも、オレはとっくに渦中にいた。

大久保はクズみたいな街だ。至る所がヘドロのようにドロドロに
澱んでいる。少し街を歩くだけで、怪しげな外人が普通のサラリー
マンと話しているところが見られる。金と小袋の交換、一瞬の出来
事だ。隣を見れば、胸を大きく開いた服の外人女性が数人で集まっ
ている。スカートの丈も極端に短い。一人の中年男性が彼女立ちに
声をかける。一人の女性が腰に手を回され、夜の闇へと消え去った。
飛び交う理解不能な言語、雑言、悪徳を当たり前に繰り広げている
この街を、オレは気に入っていた。奇抜なDRが集まってくるので、
どこか遊園地みたいな雰囲気が好きだった。

だが、今はそれがひどく不快だ。ぞわりとした空気がオレの肌を
撫で付ける。足元を照らすネオンでさえ、薄汚い。イライラしながら
オレはゴミの散乱した道を歩いた。

「3日ぶりだね」

「ああ」

オレは息を整えて、ルネの部屋へ踏み入れた。今日のルネは珍し
く三つ編みで、良家のお嬢様のように清楚だ。部屋もアンティーク
調の家具で、絨毯は赤と金の見事な品物である。実体だったら絶対
に見ることができないだろう豪華なソファに、オレは遠慮なく背を
預けた。

「疲れてるね」

トテトテとした足音が聞こえて、頭にふわりとした感触があった。
ルネの小さな手がオレの頭を撫で付ける。オレは目を閉じて、ゆっ
くりと口を開いた。

「なあ、ドラッグプログラムの価値を教えてくださいませんか？」

ルネの手が止まった。

「それはどっちのルネに訊いてる？」

「情報屋」

頭からルネの手が離れた。オレの正面に立ち、ピンク色の瞳がまっすぐにオレを見つめた。どこかでこうなるのではないかと思っていた。情報屋、それを利用して後は行くところまで行くしかない。少なくとも、ルネとの関係が変わってしまったとしても、だ。

「ヴァンは……」

ルネの目が段々細くなり、そして。

「なんでそうなるんだよ」

ルネはいつも以上にオレに抱きついていて。幼女のどこにこんな力があるのかと不思議なくらいに怪力だ。

「ルネ、痛いから離れる」

「やだよ」。もう、ヴァン律儀すぎるよ。素直に友人だろ、教えるみたいなおれ様態度で利用しちゃえばいいのに、わざわざルネのお客様になるうだなんて、100ペタ年早いよ」

ぐりぐりとルネの頭をオレの胸に押し付けて、なんだかこそばゆい。

「わー、照れてるし。かわいいねえ。大体さ、今一番ドラッグプログラムに関わってるのはヴァンだし、ルネはそれを利用している立場なんだよ。警察の内部資料なんかもちやつかりいたらいちゃったりしてるのに、ルネはそれくらいの情報出し惜しみしないよ」

いつも通りのルネだ。

「それに、ルネはちゃんとヴァンの友達だよ」

訂正、少しだけかわいい。

耳まで真っ赤になったルネの頭を、オレはぽんと叩いた。

「あー……、友達として教えてください」

顔をあげたルネに、満面の笑みが浮かんでいた。

「それで、どうしてヴァンはそんな情報が知りたいの？」

落ち着いたところで、のんびりとルネが訊く。オレは相変わらず

のソファだが、ルネが抱っこをせがんだので、彼女はオレの膝の上だ。この幼女は本当にスキンシップが激しい。

「ああ、ルネとサイバー課はともかく、エマノンまでドラッグプログラムを狙ってるって相当だろ。一応世間での価値ってのを知っておこうと思ってるな。なんたってオレのところまでハックするぐらいだからな」

ルネに微笑みかけた顔の筋肉が固まった。

「へええ」

普段よりも一オクターブ低い声が、響いた。

「ルネ、初耳だな、それ。エマノン、ルネのヴァンに手出したのか。ヴァンもおとなしく手出されちゃったのか。ちよつとダサくて間抜けだけど、聞き捨てならないなあ」

「あの……」

どす黒いオーラを身にまとい、ルネは極上の微笑みでオレに言った。

「詳しく教えてもらえないかな」

洗いざらいにこれまでの経緯を吐かされた。カインの邂逅やら、エマノンハッキング事件やら、サイバー課に抹茶フラペチーノの代金を回収し忘れたことまで、だ。この2日間はなかなかヘビイだったと改めて実感する。話した内容にプラスして、ハルカ改造物語とアリスの国リカちゃん事件まであったのだ。そんな疲労たつぷりのオレに、ルネは幼女には似合わない真剣な表情で、ボソツとつぶやいた。ヴァンはやっぱり間抜けだな、と。

「まあ、エマノンがヴァンに手出したのもわかるんだけどね。だって、あいつ、ルネを警戒してるんだもん。ルネに手出さずに情報欲しいっていったら、やっぱりまずヴァンを狙うよね」

仕方ない子を見るように、ルネは首を振った。

「やっぱりお前の所為かよ」

オレは昨日までルネが情報屋だってことすら知らなかったんだ。ガードのしようがないだろ。リカちゃん事件の後、タチバナに話し

たら盛大に憐れみの顔で同情されたのにもムカついたが、これはこれである。

「ルネもさすがにヴァンに手出されちゃ、黙ってないけどね。お仕置きしなきゃ」

小さな手がポキポキと鳴った。恐ろしい……。

「でも、ヴァン完全に巻き込まれちゃったね。もうどっぷり浸かっちゃいなよ、こっちの世界に」

なんて、ルネの背後に闇の世界が広がっているんだが。

「遠慮蒙る」

「じゃあ、本題に入ろうか」

ルネの手のひらに浮かんだのは、例のチップのARだ。

「ドラッグプログラム。これが市場でどんな価値かっつのは容易に想像がつくよね」

オレは頷いた。麻薬にとって代わるものだ。製造はプログラムのコピーという驚くほど簡単なもので、麻薬と同様、いや、それ以上の快楽を得られる。さらに付け加えるならば、少なくとも使用するのは違法ではないということだ。これ一つで世界の麻薬取引の常識を変えてしまう、まさに爆弾だ。

「でもそれだけじゃない。ヴァンはそれが知りたいんだよね。これがどういうものか」

チップはルネの手のひらの上でゆっくりと回転している。

「ヴァン、想像してみて」

実体だった時はどうい刺激を受け取っているか。

ルネは己れの目を指さした。

「視覚」

耳。

「聴覚」

鼻。

「嗅覚」

口。

「味覚」

そして、そつとオレの頬に触れた。

「触覚」

実体の刺激は全てこの五感によるものだ。DRもそれは変わらない。
い。

「ヴァン、快樂なんて刺激はこの世には存在しないんだよ。快樂物質は五感の刺激を通して生成されるんだ」

ランナーズ・ハイみたいなの。

「麻薬は、その快樂物質に似たものだったり、快樂物質が消滅しないように長続きさせるためのものだよ。だけど、それはこの世界ではできない。この世界は直接実体に作用しないようになってる」

あくまでも、ARは架空の世界だった。たとえば、風邪薬をAR化してDRになってから風邪薬を飲んだとしても、風邪は治ることはない。ただ苦味が口内に広がるだけだ。麻薬も同じことで、AR化した白い粉から快樂を得ることはない。さすがにどんな味がするのかは知らないが。

ルネの言わんとすることが、オレにも十分理解できた。

「つまり、五感以外の情報をDRでは受け取ることができない」

こくん、とルネは頷いた。

「ルネは以前説明したね。ギアは実体とDRの変換器だって。刺激をパルスに変えて脳に送るんだって。だけどね、快樂なんて刺激は存在しないから変換できない。ギアが直接脳で快樂物質を発生させるなんてこと、できないんだよ」

そう、ドラッグプログラムは「不可能な技術」なのだ。

2088年9月20日(月) その2

ドラッグプログラムを体験してまず分かったのは、これが興奮系のものだということだった。

麻薬には大きく分けて二種類ある。興奮剤と沈静剤だ。

コカインは前者で、服用すると精神が高揚し、自分がスーパーマンになったかのように、何事もへっちゃらになる。少しの刺激で頭の中がスパークするようなハッピーさだ。大久保に出回っている覚醒剤もこちらに分類される。

一方、後者の代表はヘロインだ。ヘロインをキメると、穏やかな気分になれる。全てがどうでもよくなって、世の中が全てハッピーに見えてくる。アヘン戦争時代の、チャイナ服を着た女性が木のベツドに横たわって、長いパイプを気怠く吸っている姿を想像してほしい。アヘンはヘロインの元で(さらに言えばアヘンは芥子から精製される)、まさにそれが穏やかハッピーだ。

実際にオレは麻薬をやったことがないが、聞くかぎりそんな違いがあるらしい。あの時、恐ろしいほどにハイテンションだった。この世界の王様にでもなったような、気分の高揚だ。

「それが巷で流行ってる暴力事件と関係あるかわからないけどな」
そう、オレは締めくくった。

ルネは腕を組んで、部屋をぐるぐる歩く。動きに合わせて三つ編みがテンポよく揺れている。オレはそれを、相変わらずソファの上から目で追っかける。ルネは飄々としている印象しかなかったから、これほどまでに真剣なルネは珍しかった。部屋の中を歩くのは、考え事をしている時の癖なのかもしれない。

「カインが言ったんだよね。一回でも使ったら駄目だって」

「ああ」

「ヴァンの話を聞いてると、ドラッグプログラムはよほどの『純正』だよ。新宿や大久保で流れてるドラッグは、ほんの少し気分が良く

なったり、疲れをかんじなくなったりする程度のものなんだ。けど、ヴァンの意識が飛ぶぐらいの快樂なんて、かなり強いものだよ。ルネの予想からすると、カインの発作は」

「フラッシュバック」オレは言った。

麻薬依存者は、麻薬を摂取していない状態でも、急にトリップしたり、幻覚を見たりする症状に襲われることがある。それをフラッシュバックと呼んだ。

「うん。突然人が狂ったように暴れたり、トリップしたり。フラッシュバックだと考えればしっくりくるよ」

ただね、とルネは続けた。

「ドラッグプログラムで取沙汰されているのは、暴力性なんだよね。ルネたちが見たあのトリップパーも、めちゃくちゃ凶暴だった。確かにフラッシュバックって、キモチイイだけじゃなくて、怖い幻覚を見ることもあって、恐怖を追い払おうと暴れることもある。だけど、ルネの調べたところ、決まって出てくるのは暴力事件なんだよ」

ルネが足を止めて、手をさっとふった。部屋中にスクリーンが数多く浮かび上がる。どれも、暴力を振るう場面だった。中には自傷もある。

「カインの例からすると、現実世界でもフラッシュバックは起きる。でも、DRの場合は暴力性を伴う」

「ああ」

オレは剥き出しになった感情を思い出した。

「そういえば、トリップ中に感じたのは怒りだった。オレは単純にエマノンにムカついていただけだと思っただけが」

「……」

「何か、ギアと関係があるのかな……。さすがに時間がかかりそうだね」

お手上げ状態とでもいうようにルネは首を振った。瞬間にスクリーンが消えて、今日の豪華な部屋に戻った。

「まあ、いいや。ルネにはセイン、カイン、なんとヴァンまでドラ

ツグプログラム使用者仲間がいるからね。」

「なんだよ、その薬中ご一行みたいないない方」

「DRでフラッシュバックがきたら、ルネがギアのシグナルまでしつかりトレースできるし、安心だね」

「不安しか残らない」

急に機嫌のよくなったルネに抱きつかれ、さらにはモルモット扱いされ、オレの身体はますますソファに沈んだ。

ああ、そういえば。

「今日来た目的はもう一つあったんだ」

「何？」

トランプタワーで遊びはじめたルネをぼんやりと眺めていたら、不意にアリスの国を思い出した。

「ドラッグプログラムをどうやって入手するのか、一つだけわかったよ」

ルネがぱっと起き上がった。五段まで積み重なったトランプタワーがペシヤリとつぶれた。

「教えて！」

彼女は気にならないようだった。タタタと駆け寄ってオレに抱きつく。オレは苦笑して、あらかじめ用意しておいたデータをルネに渡した。

「これ……」

「ドラッグプログラムの使用者から直接訊いたらしい。オレも人づてにだけどな」

リカちゃん事件の加害者、阿部一郎、22歳。慎吾は、オレが行った時にはもうやるだけのことはやっていた。元々アリスの国では実体の顧客情報を抑えている。その上で、実体を脅しあげたらしい。大方、ブラックリストに登録するとか言ったのだろう。

ブラックリストは組織や個人が持っているデータベースで、そこ

に登録するとブラックリスト所有者から登録された人間は認識されなくなり、逆に登録された側もブラックリスト所有者が見えなくなる。現実世界を投影しているARでも、やはり殺人が起こったりするのだが、法的に裁けるわけではない。オレたちはそうやって「嫌な奴」を自分の世界から消していくのだ。慎吾の言うブラックリストはいわゆる業界のもので、それに登録されたら一切風俗店に行けなくなる。

ルネに手渡したのは、阿部一郎の尋問内容だ。かなり詳細に記述されているもので、阿部一郎の必死さが窺われる。ちなみに、タチバナはにこやかな顔で「それでも登録したけどな」と宣っていた。

「奈良県」

「ああ」

ドラッグプログラムを入手したのはつい最近、9月15日だ。私書箱203にドラッグプログラムのチップが50個、1ケース分送られてきたらしい。すでにドラッグプログラムの噂を知っていたから試してみた、というのが口述の内容だ。

「私書箱、203……?」

ルネがはつとしたように顔をあげた。瞬間にスクリーンが5つ、恐ろしい早さで指を操る。いつもにも増して何をしているのかさっぱりな状態で、オレはいつものごとく呆然と眺めた。

「こいつも、こいつも……、全部同じプロバイダだ」

「それが?」

「さらに、IPアドレスが」

「?」

ルネが腕を下ろして、ぎゅっと小さい手を握った。

「ヴァン、私書箱203が悪用されてる!」

2088年9月20日(月) その3

IPアドレスは16バイトで表されるインターネットの接続先だ。よく例えとして「ネット上の住所」と言われるが、実は少し違う。

IPアドレスは一般的にプロバイダに接続要求を出し、その時にIPアドレスが個別に割り振られる。いわゆる

DHCP(Dynamic Host Configuration Protocol)という古典的な手法が、現在でもずっと使われている状態だ。IPアドレスはプロバイダへ接続(正確にはIPアドレス取得)要求を出す度に変わる。つまり、IPアドレスとは使い捨ての連絡先みたいなものだ。もちろんIPアドレスを固定にすることも可能だが、一般ユーザはそんなことはしない。オレたちは意識しないままに連絡先を貰っては捨てる。

「IPアドレスさえ分かれば、ギアのシリアルナンバーを取得することは十分可能だよ」

結局はギアもインターネットに接続する必要がある。インターネットという媒体を通してARの世界やDRは繋がっている。

「でも、におさんって、相手がどこに住んでいるかとか知ってないとダメだろ?」

ルネが首を振った。

「ヴァンはあまり使ったことがないのかな。におさんは配送先の指定がない場合は、ギアのシリアルナンバーから接続しているIPアドレスを取得するんだよ。そこで、接続先のアクセスポイントが一番近いお店へ運ぶの」

もっともプロキシ使ったら荷物なんか届かないけどね。ルネが吐き捨てるようにつぶやいた。

たまたまカインが大久保のにおさんを指定したから、ドラッグプログラムはその店にあったが、もしなかった場合は他の店に行っていた可能性が高い。

私書箱203システムはIPアドレスとギアのシリアルナンバーだけで個人を識別しているというわけか。

「一つのIPアドレスの、その時の使用者にドラッグプログラムを送っていた？」

「うん。少なくともこのデータから導き出される答えはそうだよ」

「スパムみたいなの？」

ルネは小さく首を振った。三つ編みも揺れる。

「少し、違うね。スパムは不特定多数の人にメールを送りつけるけど、基本的にメールは無料だよ。大量にメールを送りつけて誰か釣れたらいいや、的なものだよ。におさんは有料サービスだし、チップにもお金がかかる。それに、IPアドレスを狙い撃ちになんかしない。」

熟考するように小さな手を顎に当て、ルネはスクリーンを見た。

「ねえ、ヴァン。もし仮に一ヶ月間今日までチップ50枚を30名に配ったとして、掛かる金額は大卒初任給の一ヶ月分くらいになる。それにさ、このドラッグプログラムは金をいくら払ってもいいって人がたくさんいるはずだよ。それをわざわざお金を出して配るってそれを特定のIPアドレスに」

ドラッグプログラムを不特定多数に送りつけたわけではないはず、そう小さな唇が紡いだ。

「正直、結論を出すのはまだ早いと思う。だけど、あのIPアドレスの使用者の誰かにドラッグプログラムを送りつけたかかって考えるのが自然なんだ」

そのために私書箱203は利用された。

「ああ」

「それも、まだ送りがかった相手に届いていない可能性も高い」

リカちゃん事件の加害者、阿部一郎がドラッグプログラムを手にしたのは9月15日だった。少なくともその日までに相手の目的は達せられていない。

一番最初にタチバナと作成したメモを思い出した。頭の中で内容

が埋まっっていく。リカちゃん事件まで、オレはドラッグプログラムが売られている物とばかり思っていたが、そうではなかった。

「におさんが使われたのはルネとしても嫌な気がする。だけど、やっと手がかりが掴めたね」

振り返った少女の顔に、やっと小悪魔のような表情が戻った。

「あとはルネの仕事。裏をとって確認するよ」

「了解」

お開きだった。ルネの頭を一撫ですると、擦ったそうにピンク色の目を細める。オレも満足してギアを捻った。

仕事の依頼が来ていた。午前2時、オレは盛大に顔を顰めてスクリーンに向き合っている。今すぐメールの存在を削除したい気分が駆られるが貯金残高が脳裏を掠めて思いとどまる。狙ったとしか考えられないこのタイミングにオレは唸るしかなかった。

触手クラブ・アマゾン支店、なるものを作るらしい。

すでに場所の手配済みで、要となる触手が大量に必要なそうだ。

現在新宿にある触手クラブとは違い、アマゾンの植物をモチーフとした触手だとなかんとか。

それから、蟲。

メールを読み進めるに従って、眉間の皺がどんどん深くなる。

蟲、虫ではない、蟲だ。メールにそう書かれてある。蟲ってなんだよ、どんなプレイだよ。こちらと年齢イコール彼女なしの人間だぞ。どんどん変な知識だけが植え付けられていくようではげんなりする。

さすがに何度か取引をしている間柄なだけあって、社長は丁寧にイメーシ図までつけてくれていたマングローブの根や、樹に絡まっている鳶が少女を襲うシーンに思わず目を背ける。

「オレの周りって何でこんなんばっかだよ」

慎吾しかり、社長しかり、ニューフェイス・サイバー課本村弘美、

お前もだ。

「そういえば作った触手でエロビデオ撮ったんだよな。『密林少女』
、だったっけか。」

「あー……」

ガリガリと頭を掻く。生憎と断るといふ選択肢はないんだよな。

メールに提示された金額は貴重なオレの軍資金だ。前金だけで3ヶ月は生きていけるだろう。しゅしゅと、承諾と打ち合わせのお伺いメールを相手に投げた。

「そういえば」

他にメールは着ていなかった。エマノンがハッキングした9月18日のメールだけは一切削除されていて見る事ができない。だが、あれほど大量にメールを送りつけてきたセインから、この2日間何も音沙汰がなかった。やっと、カインが倒れた後一切連絡がとれないことに気づく。

「お嬢様だから絞られでもしたか」

それにしても、この沈黙は不気味だった。あれほどカインのことを知りたがっていたというのに……。

胸に不安を抱きながら、ルネの部屋で会えないかというメールをセインに出した。

2088年9月22日(水) その1

はじめて触れたARはプラスチックのように硬かった。見た目は完全にりんごなのに、りんごの瑞々しさや弾力、香りがまったく感じられない。精巧に作られたディスプレイ用の置物のようだ。

「お兄ちゃん、これ、りんご?」

ARスキャンで作成されたりんごを、兄の映るスクリーンへ向ける。

「誠、それはまだ情報が追加されていないんだよ。ほら、こうしてみるとどうだ?」

手にあるりんごの偽物が、今まさにりんごへと変わった。

「りんごになった!」

「そのARに情報を加えたんだよ。まだスキャンじゃその辺は対応していないからね、自分で情報を作って加えてあげないといけないんだ」

苦笑しながら兄が言った。まだDRはそんなに普及していない。

ギアは高額で、それもヘルメット型が大半だ。新宿へ言っても見かけるが見かけないかというレアさだ。だから、技術も進化していない。

「誠が大きくなる頃には一般的になってるといいけどね」

オレは兄の言葉をあまり理解していなかった。ただただ手の中のARに魅せられている。

「もしかしてこれって食べれる?」

「多分味はしないよ」

即答されて凹むオレ。街には色々なARが溢れていたが、ほとんどが見た目だけのものだった。硬い花びらをつまみながら、なんとなく訊いてみる。

「ねえ、ARつてさ、オレにも作れるかな」

「簡単だよ。誠、一緒に何か作ろうか」

「うん。もしかしてさ、現実にはないものでもいい？ 例えば、あの空飛ぶスケボーとか、つちのことか！」

目を輝かせるオレに、兄まで笑みが零れる。

『できるよ。最初にスケボーからやるか』

本当に作れるのか。古典映画で大好きだった空飛ぶスケボーが。

未来に飛ばされた主人公がスケボーに乗って逃げるシーンが思い浮かぶ。最高に格好いい。

「ARってすごい！」

「すごい……」

あの頃とはまったく同じ台詞を、真逆の気持ちでつぶやく。

机の上で悍ましく蟲が這いずり回っていた。蜘蛛、ゴキブリ、ムカデ、小さい玉虫等が蠢いている。ガサガサという音までリアルでまさに気色が悪い。

「うん、柳楽君、いい感じね。動画まで送っておいてよかったわ。アルゴリズムがすばらしいわね」

「はあ」

正午ぴつたり、オレは触手クラブに来ていた。今日は仕事なのでいつもの少年ではなく青年のAvatarを使っている。オンとオフの切り替えのようなものだ。顧客要望を聞いてイメージを合わせるための打ち合わせだ。事前にサンプルもいくつか作成して意見をきく。目の前の七緒さんはこの触手クラブのオーナー兼社長だった。眼鏡にきつちり髪を纏めていてスーツ、まさにキャリアウーマンというに相応しい姿だが、如何せん、シチュエーションが残念でならない。周りには触手、目の前には蟲、それをうつとりと頬を染めて眺めている。

「この蟲たちの動きを、DRの穴があれば何度も出入りさせる感じに持ってくれば完璧ね。その辺の動きを修正してほしいわ。もちろんたまに皮膚を噛んだりとか、そういうものも組み込んでね」

「はあ」

「触手の方は、そうね。もうちょっと堅めで擦りすぎると皮膚が傷つくくらいざらついた感がほしいわね。こっちの方は……」

「はあ」

ため息なのか相槌なのか自分でももう分からない。

「あとね、最後にもう一つ！ ラフレシアみたいなえぐいお花のベツドがほしいのよ。ほら、今まで触手クラブって両手両足縛られて宙に浮かされてるのがメインでしょ。そうじゃなくて、花の中に押さえつけられて花卉で擦られるって素敵じゃない？ それも悪臭がするのにな、そんな中で快樂の渦に飲み込まれる。うん、いい！」

「はあ」

オレの思考回路は迷路になってしまったようだ。まったく話についていけない。七緒さんはほとんど一人でフィーバーしていく。頼も赤くて何故か息も荒い。いつものことだ。会話は録音してあるのだから、後で何度も聞けばいい話なのだが、オレとしてはもうお腹いっぱい状態で勘弁してほしいのである。

「じゃあ、私からはそれぐらい。相変わらずの腕で安心しているわ」

「ドウモアリガトウゴザイマス」

全くもって褒められた気がしない。オレの無自覚な変態度がレベルアップしたってことなのか。七緒さんは一通り満足してくれたよ。うなので、気色悪いものはさっさと消すと、彼女は若干悲しそうに顔を歪めた。

「また一週間後ぐらいに持ってきますよ。その時詳細な部分を修正しましょう」

早くこの場を去りたくてオレは立ち上がった。

「ええ、また一週間後ね」

空飛ぶスケボーの感動も触手クラブで地に墮ちる。七緒さんは嫌いではないが、永久にこの手の仕事はやりたくない。

この2日間、セインからも慎吾からも特に連絡はなかった。さっさと終わらせたい仕事だけあって、オレもひたすらARを作成し

ていた。その集大成が本日七緒さんに披露したあれだ。作っている最中も何度も目を逸らしたし、気力も削がれたが今日の比ではなかった。ゲッソリと気力を吸い取られたような気分だが、まったくルネと会えていない状態なのでそろそろ顔を出しておくか、と少年姿で大久保に降り立った。情報もそれなりに集まっている頃だろう。

空は薄闇なのに、大久保は相変わらず賑わしかった。駅の一角にいつもにはない人ばかりができています。

「なんだ？」

外野は歓声だ。DRだけでなく実体も群れている。男性と、やけに子連れも多いぞ。オレは巧妙に避けながら中を窺った。

「げ」

ハルカだ。楚々とした様子で憂いた息をつけば、群集が唸った。

それだけではなく、ハルカの隣にはまた一段と目立つアバターがいた。『ぷんすかプリンセス』の主人公やえちゃんの敵役で人気の高いヤヒロだ。服装はヤヒロの着ている黒色マントに悪徳スーツ。それだけならまだコスプレだけです。しかし、このヤヒロのアバター、アニメ顔を見事に再現している。アバター作成は難易度が高いも関わらず、ここまでそっくりとなると、作った人は相当な技術の持ち主だろう。UIDの偏差をあそこまで消してしまえるとは。賞賛の後、なんとなく回れ右のオレ。

「あ、ヴァンさん」

周囲の視線が一気にオレへ突き刺した。ギギギとオレは振り返って顔を引き攣らせる。ハルカが愛らしく走り寄って、そつとオレの右手を両手で握った。態とらしく視線は斜め下で、目を潤ませて。

空気が痛い。どう考えたって、ここで手を振り払えるわけないだろう。おいタチバナ、演技の指導にも程度があるってのを知った方がいい。だから、オレは次の台詞にも頷くしかなかった。

「ヴァンさん。お願いです。ルネさんに会わせていただけませんか？」

2088年9月22日(水) その2

しかし、突然サイバー課を引き連れてルネの部屋に行くのは抵抗がある。元々ドラッグプログラムに関わる前までは、ルネとは外で合流するのが普通だった。オレはしおらしく涙を拭くハル力を前に諦観の念を込めて言った。

「それじゃ、公園で待つか」

「それには及ばないよ」

ふわりと幼女の天使が舞い降りた。

「ルネ」

空間から現れた彼女は、とん、と赤い靴を地面についた。髪がゆつくりと垂れる。今日は胸の下から大きく膨らんだ白いワンピースを着ていて、胸元の赤いリボンが良いアクセントになっている。ルネは周囲を見渡して、やおら首を傾けた。

「ヴァン。それにサイバー課、ここは目立つから移動しようか」

確かにオレたちは一種の見せ物と化している。外面だけは清楚で可憐な美少女ハルカ、かたやアニメ顔のヤヒロ、それにふわふわ幼女のルネだ。オレだけ平凡で場違いだが、ばつちりとこの濃い三人に囲まれている所為で他人のふりはできない。

すぐに座標が送られてくる。お馴染みとなったルネの部屋だった。今日はどこかの基地のイメージなのか、今となっては見るのも珍しい大きなディスプレイが部屋一面に張られている。ボタンがいっぱいにならんだ大きなパネルがこれ見よがしに設置されていて、古典に出てくるSci-Fiのようだ。

「それで」

部屋の主はオレの膝に座って足をぶらぶらさせている。いつものことなので為すがままとなっていたが、ハル力は『ペド!』と顔を引き攣らせている。いや、中身はオッサンだからな、ハルカ。

「要件は何かな、サイバー課三島晴彦、本村弘美」

ヤヒロはアニメのきりつとしたイメージをどことやら、へらりとした表情で頭を掻いた。

「いやあ、さすが情報屋ルネっスね。今日のために作ったアバター、普段とは違うギア、回線を使ってるのに一発っスか。まあ、あの上司は一発かもしれないませんが、ぼかあ正体不明の悪役ヤヒロって自信があつたんすよ」

ルネが半眼でにやりと笑った。

「本村弘美が毎週かかさず『ぶんすかプリンセス』を三回見て、さらに先週やえちゃんの半裸抱き枕をネットで予約したのくらい知ってるよ。そういえば独自のクローラーで『ぶんすかプリンセス』の18禁を毎日探してるよね。サイバー課でどっぷり『ぶんすかプリンセス』に嵌ってるのは本村弘美だけだもん。分かるよ」

「ははは。ルネさん何かおすすめのサイト教えてくださいよ。ぼかあやえちゃんが触手に捕まってあそこをぐじゃぐ……ッてえ」

苦笑いするヤヒロの尻にハルカの蹴りがヒットした。

「自重してください、この変態」全くだ。

ハルカはそのままルネとオレの前に立つ。

「改めてルネさんの情報調査に参加という形をとれないでしょうか。実は先日手に入れた唯一のドラッグプログラムは不甲斐ない部下の所為でエマノンに奪われました。恥ずかしながら万全を尽くしてもサイバー課ではエマノンの攻撃を防ぐことはできません。こちらの情報は全てエマノンには筒抜けになっていて、つまりはネットへ流れ放題となっています」

屈辱を抑え込むかのようにハルカは唇を噛んだ。インターネット犯罪を取り締まるべき組織がハッカー一人に屈している、その現実を晴彦は受け入れた。

「それに、私たちがルネさんに協力するとなれば、ヴァンさんを通さなくてもスムーズな情報交換が可能です。メリットは大きいのではないかと」

これまでのヘタレっぷりからは想像できないほど、ハルカは屹然

とした様子で告げた。真つ直ぐとルネに対峙するその姿は然りながら戦乙女のようにだった。おいタチバナ、これも演技指導効果かよ。「なるほどね」

ルネはびよこんとオレの膝から降り立った。両手を腰にあて、見定めるようにハルカを見回す。

「話はわかったよ。でもどうして今のタイミングなのかな？」

ハルカはオレがああ恥ずかしい二つ名「ルネのお守り」であることを知っていたが、直接協力を仰いだことがなかった。それが今、こうして協力を仰いでいる。その意味はつまり……。

「まあ、いいや」

開きかけたハルカの口をルネが片手を挙げて制す。

「ルネが欲しいのはドラッグプログラムのソースコード、あるいはその仕組みに関する情報だよ。それを邪魔しないなら今回は協力してあげる」

「ヴァンさんにはもうお話してありますが、私たちの目的はドラッグプログラムの流出防止です。そのためにばら撒いている人間をとっ捕まえるつもりです。ルネさんの目的がドラッグプログラムの配布にないとするならば、私たちはドラッグプログラムの入手・解析を妨害するつもりもありません」

「合法つスしね」

ルネは小さな手をハルカへ差し出した。

「取引成立だね。今回はヴァン経由でサイバー課には色々お世話になっっているし、特別」

ハルカはルネの手をしっかりと握った。

「まず、ルネの状況を言うね。サイバー課がどこまで把握しているのかは知らないけど、ドラッグプログラム配布方法の一部に私書箱203が使用されていた。それも、特定のIPアドレス使用者に対して、ね」

「一部？」

ルネは頷いた。腕を振ってオレたちの前にスクリーンを出す。私書箱203やドラッグプログラム死亡者の情報が一面に表示されている。

「その後、あらためてカインのIPアドレスを調べたら、まったく別のプロバイダを使用したの。つまり、ルネが把握できている範囲で、カインだけにはおさん以外でドラッグプログラムを手に入れた可能性が高いってことだよ」

「そうか」

「このIPアドレス自体は12年前からプロバイダ、ウエストジャパネットが買い取って使ってる。それまでは個人所有で使ってたみたい」

でもそこから先は手詰まりなんだ、ルネが唇を尖らせた。

「早めに見積もって2088年6月からのログを採取して解析しているんだけど、どれも利用者は一般の域を越えない。このIPアドレス使用者全てに送られているわけでもなくて、完全にランダムで送付者を決めているみたいなんだ。これまでのデータから共通性は見出せないの」

2日前から大した進展はなし、か。

「で、ハルカとヤヒロは何を掴んだんだ？」

何かわかったからこそ、こうしてルネを訪ねた。ハルカとヤヒロは目配せをした。

「ギアを身につけたまま死亡するって初めてのケースを見つけたんすよ」

「どういうこと？」

ドラッグプログラムによる死の特徴として、大抵発見された死骸はギアを身につけている。DR化したまま死亡したのだとオレは想像していた。

しかし、今更調べなくとも、ドラッグプログラムによる死亡が初めて検出されたのは2088年9月2日だった。それは以前ルネと一緒に見た警察の内部資料からも明らかだ。ルネも小首を傾げて八

ルカとヤヒロを見る。

ヤヒロはオレとルネの前にスクリーンを出した。

「実は改めて調査して分かったことなんすけど、ギアをつけたまま
- - D Rで死亡したのは2008年以前に一件だけあったんすよ。

これがその時の調書と死亡検案書っす。当時は単純に心臓発作として片付けられたみたいで、詳しい検死はされてないっすね。もちろんこれがドラッグプログラムと関係あるのかないのかすら、わからないっすけど」

ピンク色の瞳にスクリーンが点滅する。

「2077年？」十一年前……。

「そうです。今となってはそんな昔のことを調べるのは難しい、だからこそルネさん、情報屋の力が必要です」

十一年前といえば、やっと一般向けの小型ギアが販売されはじめた頃だ。まだヘルメット型のギアをつけたD Rが圧倒的に多かった時代だった。スクリーンの調書にも、ヘルメット型のギアを被った遺体が映っている。顔の代わりにすっぽりと黒光りするヘルメットが頭部にあり、うつ伏せの状態で床に寝っ転がっている身体。スーッだったが、スラックスから排泄物が流れ出ていた。

「死亡推定日2077年2月28日、同年3月2日発見。奈良国際大学准教授、山本一樹。享年37歳」

「当時の記録では、山本一樹はD Rとギアの研究をしていました。奈良国際大学理数科物理心理学山本研究室は当時tuz社の顧問にもなっています。いわゆるスポンサーですね。tuz社は有名なギアのメーカーです。単なる偶然なのかもしれませんが、ルネさんの意見が伺いたいです」

「山本一樹、まさか」

驚愕の表情を浮かべながらルネはスクリーンを引き寄せて、素早くスクロールした。同じく左手は別の端末を呼び出して片手でタイプする。

「京都大学卒業後MITに入学、2070年9月に博士号取得後、

奈良国際大学の准教授に就任。研究のテーマはARの感覚共有化について。『サイエンス』2071年5月号に論文が掲載されている。ルネが知らないはずがない、DR第一人者の一人だよ」
ぼかんと口を開けたハルカをルネは見上げた。

呆然としているオレたちに向かって、ルネが講釈を始めた。

ARとは違い、DRはここ20年程度の歴史しかもたない。DRという概念が提唱されたのは2068年だった。発表したMITのプロジエクトメンバにも山本一樹は所属していた。ARが視覚の拡張というならば、他の四感についても拡張を行う、それがDRだ。2068年に発表されたギアはヘルメットすら技術維新だと思えるほどのもので、一番最初のギアは全身スーツ、さりながらアイアンメイデンのような装置だった。

DRは発表後有名大学にて研究が進められるようになる。MITを筆頭にNASA、スタンフォード、オックスフォード、メルボルン、パリ、京都大学、筑波大学、そして奈良国際大学。

「この辺の経緯はインターネットの広がりと似ているね」

DR技術、ギアの発達とともに研究機関は増え、社会に浸透してきた。

「山本一樹は」

ルネは目を細めた。

「彼は当時こそ注目を浴びたけど、日本に帰国してからは輝かしい実績はあまりないよ。『サイエンス』の論文も院生時代のものを手直しただけみたいだし。だからそれ以降はあまり業界にも出てこなかったみたい。彼の受け持っていた院生が自殺した時、少しだけ話題に上がったけどそれきりだった。ルネはてっきりまだ生きてて干されただけだと思ってたけど」

「山本一樹がドラッグプログラムの作成者ってことっすか？ DRの研究者なんてバリッバリのストライクじゃないスか！」

「ん、どうだろうね。だってこんなに昔に死んじゃってるしさ」

とぼけた声を出しながらも、小さな手は素早く動いていた。目紛らしく変わるスクリーンに、オレたちは立ち尽くしている。

「山本一樹の関係者の可能性が高いかな、て」
シヨートでもしてしまっただかのように、ぴたっとルネの手が止まった。

「ルネ？」

スクリーンを覗き込んでみるが、何がなんだかわからない。ハルカとヤヒロも同じようで、顔を見合わせた。だけど、ルネの震える声でオレたちも同じように動きを止めた。

「あのIPアドレスの12年前以前の保持者と、山本一樹の自殺した院生、同じだ」

ルネの小さな唇が言葉を紡いだ。

「タララリヨウ」

2088年9月22日(水) その3

タタラリヨウ ー多々良涼、2075年3月死亡、享年24歳。

当然ながら一介の院生、それも死亡して十年以上経つ人間の情報はそんなに残ってなかった。判るのはお役所や学校に登録された情報だけだ。街に設置された監視カメラの映像も保管期限は長くはない、アクセス解析、各種ログもさすがに10年間も保管したりはしない。現状、10年以上前に死亡した一般人の情報など、ネットから得られるのは皆無と言ってもよかった。それでも、とルネは高速で指を動かすが、芳しい結果が得られないのか表情は固い。自殺する人間には死ぬ前に自分の痕跡を消してしまう人がいるが、多々良涼もその種のようにだった。事故死や衝動的な自殺した人の場合、大概ブログやらSNSやら、メールアドレスやらが放置されたまま残っている。50年前が最終更新日の故人WEBサイトや30年前のブログが未だに存在するのもそれだ。咄嗟にはわからなくとも、根気よく探せばSNSのアカウントなり、ブログなりが出てきそうなものだが、とうとうルネは敗北宣言を出した。

「これ以上、何も出てこない」

呆然とオレたちはスクリーンを眺めた。ヴーンと唸る機械音がリアルだ。

何かの証明写真のようだった。全面に映し出された凡庸な青年の顔を見つめてハルカが唸る。

写真の隣には簡単なプロフィールがついている。履歴書のような素っ気ない来歴だ。

生年月日、出身の小学校、中学、高校、そして大学ー。子供のころに父親を亡くしてからはずっと片親だったようだ。高校までは八王子に住んでおり、奈良国際大学へ進学後奈良へ親子共々引越している。大学生の時に母親が病死、文字通り天涯孤独の身の上となった。

「十一年前、か。思ったより根は深いかも」

「山本一樹だけでなく多々良涼についても洗う必要がありますね」
こくり、と少女は頷いた。が、すぐさま首を振る。

「だけど、それはルネの仕事じゃない」

ピンク色の瞳はまっすぐサイバー課に向いた。

「多分、山本一樹のゼミ生、多々良涼の大学時代の同級生一覧ならすぐに出せるよ。でも、さすがに多々良涼の人間関係や自殺した理由まではアクセスできない。ルネは飽くまでもネットの海から拾うだけだから」

悔しそうに少女は顔を歪める。

ヤヒ口顔の本村弘美が胸を叩いた。

「オーキードーキーっスよ。上司が聞き込みをするっス。うちの上司は鈍くさいから、それぐらいが適任スしね」

ハルカは渋々承諾する。

「私は今関西にいるので、関係者リストをいただければ早速今日から聞き込みに行きます。本村はサボらず私のサポートで来ること」
ぐぬぬぬぬ、と本村弘美が唸る。

「じゃあ、ルネはにおさん関係を追っかける。ヴァンは……、ヴァンは……？」

「……」

「……」

「……」

戦力外通知を受け取ってしまった。

「って感じだな」

苦味漬したようなオレの言葉に、タチバナはにやけた笑みで答えた。

「なるほどね。当たってる。あ、そこにフィギュア置いてくれよ。たえちゃんとノノちゃんのランドセル姿」

言われたとおりに『アリスの国』の子供たちを模したフィギュアのARを置いていく。たえちゃんは小学校1年生なので黄色い帽子もかぶせた。くまのぬいぐるみを両手に抱いて、健気なイメージで微笑ましい登校をモチーフにフィギュアを配置する。タチバナは角度を変えて念入りに配置を確認した。イケメンが女の子のスカートを真剣に覗き込む姿はなんともシユールだ。

「おい、なんで紐パンだよ。ここは白でくまさんのアップリケだろうが」

「たえちゃんはおどけない顔をした淫乱っ子だろ。この前来たときは『ヴァンさ〜ん、やっぱり服を脱いだらせくしくな下着なのって素敵ですよ。ぺたんな胸なのに、こ、こんなって感じが』とか言ってたぞ」

「はあ？ たえちゃんは来客回数によってキャラを変えていくんだよ。1回目は何も知らない純粋な女の子、2回目は大人の男が怖い臆病な女の子、3回目は怖いけどちょっとだけ触れてほしいってか〜んじで。ここのフィギュアはまだ汚れを知らない処女たちなんだよ。ヴァン、まだまだ俺の店を理解していないな」

理解したくもない。

やっぱり一回は遊んどけよ、というタチバナの言葉を無視して、黙々とARを作っては設置していく。

明日から『アリスの国』は営業を再開する。さすがにいつまでも休んでいるわけにもいかないってこともあり、更にはどうせだから改装しようというタチバナの思いつきもあってオレは呼び出された。毎日触手と蟲に対峙しているよりは、はるかに健全だと思う、うん。一通り改装が終わって、タチバナは満足そうに頷いた。並べた人形を見て、その中にリカちゃんがないことに一抹の寂しさを覚える。

リカちゃんは、結局辞めるそうだ。やっぱりあの事件以来怖くて

DRになることすらできない。そのかわり、ここで稼いだ資金で新宿二丁目に店を出すのだという。オレは決して遊びにいく予定はないが、前向きなりカちゃん（37歳・）の話に安堵していた。

一息ついたところで、最初の話題に戻る。オレも大きなキリンのソファに腰掛け、思考を切り替える。目の前にスクリーンを出して流れる情報を眺めた。

「つまり、10年以上前に自殺した院生宛にドラッグプログラムを送っていた可能性があるってことか」

俺の専門外だな、と タチバナはつぶやいた。多少は裏につながりがあるけれど、大学関係となると門外漢だ。

「そうなるな」

オレも無力だが。

「おい、落ち込むなよ、誠。元々お前ルネの連絡係だろう。俺たちに来ることをやればいいんだよ」

乱暴にタチバナがオレの髪をかき混ぜた。実体よりも柔らかい髪質だから、すぐにくしゃくしゃになる。

「本名呼ぶんじゃないよ。うるせーよ。サイバー課けしかけてくせに、何言ってるんだよ」

「やっぱわかったか？」

わかるだろ。ルネとサイバー課は別々で同じ事件を追っている。

その仲介を果たしているのはオレだったが、それは慎吾しか知らない。サイバー課に持ちかけたのは当然こいつということになる。何故今頃になってとの疑問も浮かぶが、それはリカちゃん事件でこいつが本気になったからだ。

確かにオレを介してルネとやりとりをするのは煩わしいし、情報伝達が二度手間だ。慎吾なりにお土産があれば、ルネと交渉することができると考えたのだろう。そして見事に契機を作った。

「だけど、よく最初にDRで死んだ奴なんて発想が出てきたな」

「ああ」

あれなあ、とタチバナはタレ目をさらに下げて、舌舐めずりをし

た。

「前例ないかなって調べてもらったら偶然出てきたんだ。やっぱり興味あるだろ、DRで腹上死」

「ふッ……」

吹き出した。

夕チバナ、お前本当に残念なイケメンだよ。

2088年9月23日(木) その1

不機嫌さを全面に押し出して、オレは低く唸る。

「で、お前は晴彦のお手伝いじゃなかったのか？」

本村弘美がへらつと笑った。服装はお馴染みの化石級オタルツクだ。瓶底眼鏡は完全に目を覆い隠していて、得体の知れない存在感を醸し出す。

午前10時、珍しく健全な時間に外出しているオレだ。もちろん実体で。

「そうす。これから任務開始っす」

別に敬礼しなくともいい。とにかく、だ。

「オレを大久保に呼び出す理由がわからないんだが……」

昼夜逆転がデフォルトなので、普段はすっかりお休み時間なわけである。眠い眼を擦って恨めしい気持ちを含めて本村弘美を睨んだ。

「まあまあ、どうせヴァンさんは暇なんすから、いいじゃないスカ」
「……」

昨日はタチバナの改装に付き合ったり、触手のAR作成に忙しかつたんだよ、とはいわない。大体本村弘美の反応が想像できるからだ。今すぐにも触手を見せるとか、新作！とか、喚く姿が思い浮かぶ。

オレは緩やかに首を振ってため息をついた。

「で、どこにいくんだよ」

大久保駅前のターミナル、本村弘美はすぐさま隣を指差した。

「モチにおさんっす！」

本村弘美の鼻息は荒かった。

私書箱203ことにおさん大久保駅前店、一歩足を踏み入れてやっぱり飛び込んできたのは豊富な胸だった。

「いつらっしやいっ」

オレたちの姿を認めて笑顔を零す二才さんがいた。口元のほくろが相変わらず妖艶だ。

「二才さん、おヒサつす」

「ヒロミちゃんにヴァンちゃん、こんにちわ」

オレは曖昧に頷いた。二才さんが舐めるようにオレの全身を見回す。そつと本村弘美に身体を隠した。

「今日はギアを持ってきてない」

存外に冷やかしと宣言したわけだ。二才さんは見る見るうちに悲しそうな表情に変わる。

「今日はぼくの付き添いつスよ。でもヴァンさんにギアを持ってくるようにいったらよかったスね。申し訳ないつス」

「ううん、いいの」

本当によかった。理由もなくあんなでかいギアを持ち運びたくはない。それに二才さんの目つきが獲物を狙う猛禽類のように鋭くなるし。身体を動かすたびに胸がゆっさゆっさと揺れるが、騙されるわけにはいかない。

「で、ヒロミちゃん、荷物取り出す？」

「いや、今日は仕事で来たんス」

ぼろぼろのジーンズから、本村弘美は手帳を取り出した。そして、ドラマでしか見たことない警察手帳ご開帳だ。黒皮にきんぴかの桜マークは何年たっても変わらない過去の遺物だ。面倒くさそうな本村弘美の動作に、警察の威厳は何も感じられなかった。

「ああ、ルネちゃんがいつてた」

じゃあちよつと奥に行きましようか、と二才さんはオレたちを促した。

私書箱203がドラッグプログラムの運搬に利用されていることをルネから聞いたらしい。誰がいつ荷物を預けたか、クレジット情報等は個人情報扱いとなるため、どうアプローチするか考えあぐねていたそうだ。最悪裏で取引というところにサイバー課が飛び込んできた。個人情報開示請求があれば警察にデータを提供できる。

ルネはそれを本村弘美にお願いしたのだろう。

シンプルな白のテーブルに二オさんはコーヒーを三つ置いた。向かい合わせに座るが、大きい胸をテーブルの上に乗せる。

「は〜。胸が大きいと肩凝るんですよ」

心底癒され中という雰囲気だ。オレには何もコメントできない。

「じゃあ二オさん、これは警察からの正式な要請ス」

「うん、一通り履歴を纏めてるから送りますよ」

8月からの、『特定のIPアドレス』を指定した取引情報だ。二オさんはスクリーンを出して本村弘美に渡した。

「やっぱり関西から送信スね」

「送り元はバラバラだけど、ルネちゃんなら関連性もわかるんじゃないかな。大阪、奈良、京都。年齢は十代後半から二十代前半、性別は男性の方が多いかな」

「なるほど」

コーヒーを一口飲んだ。豆から引いたのが、香りがいい。酸味とコクが調和して、非常においしかった。

「例のIPアドレス指定の郵便物は、9月18日からストップしてるんですよ。一週間に30通、多い時だと100は超えていたのに」

「何かあったんスかね」

私書箱203が関わっていると判明したのは9月20日だ。それも、オレとルネの中だけの話で、ドラッグプログラムを送っているやつらが知るよしもない。

「さあな」

だが、ドラッグプログラムの送信元がわかるのもすぐだろう。手がかりは大分出揃ってきた。におさんのデータ、山本一樹、そして「多々良涼がやっぱキーっスかね」

コーヒーを飲み干した。ぽつんと漏らした本村弘美に苦笑して、席を立とうとしたところで手首を捕まれた。

「二オさん？」

真つ赤なマニキュアを塗った爪がわずかに食い込む。何故オレをつかむのか。視線を投げると、そこにはどこか呆然と、けどほんの暗い表情の二才さんがいた。

「今なんて？」

「多々良涼。どうしたんスか？」

二才さんはまるで滑稽なものを見たかのように唇を不自然に歪めた。

彼女はどこか遠くを見ていた。軽快で妖艶な雰囲気は消え去って、漂っているのは倦怠感と、微かな寂寥感だ。オレたちは改めて二才さんに向き合った。

「多々良涼、知ってるよ」

口をついたのはそんな言葉だった。紅い唇が動く。

ルネが作成した多々良涼関係者一覧には二才さんの名前はなかった。あらましを語って、不思議そうに首を傾げるオレたちに二才さんは微笑んだ。

「といつてもわたしは直接関わったことはないし、ルネちゃんのリストから漏れているのも分かる。わたしは多々良涼ー多々良先輩が死亡した時は大学4年生で、さらには学部が違っていたわけだし」
二才さん、本名、柳九は中国人留学生で、当時医学部神経科に属していた。こう見えてもちゃんと医師免許は持つてるんだ、そう二才さんは誇らしげに言った。

「わたしが多々良先輩を知っていたのは、出資してたからだよ」
「出資？」

顔を見合わせたオレたちに、二才さんはスクリーンを示した。そこには「todororo Inc.」の文字列。

「todororo社って、ヴァンさんが持つてるギアの製造元スか？」
「そう。世界初の小型ギアGR1B、todororo社の唯一の製品」

ニオさんがスクリーンを操作すると、オレが使っている同型のギアが表示された。英語サイトだが、オークションサイトのような感じだ。どれも驚くような値段がついている。

「あまり知られていないけど、todoro社は奈良国際大学の学生が立ち上げたベンチャー企業なの。CEO以外は公開されていないけど、多々良先輩もその従業員でもあった。わたしの先輩がtodoro社のCEOで、趣旨に賛同したから起業時に出資したの。その時に簡単な紹介を受けたし、ギアを発売した時に開いた関係者のみのパーティーにも出てたから知ってる」

まさか、そう声なく本村弘美がつぶやく。ニオさんは困ったような顔をした。

「ヒロミちゃんが想像しているのとは多分違うよ。todoro社は2075年、tuz社に買収されて、その歴史に幕を閉じた。多々良先輩が自殺したのも同じ年だけど、順番が違う」

多々良涼が死亡し、その数ヶ月後買収された。

「まあ、todoro社のおかげで莫大な資金が出来ちゃって、それを元手に私書箱203を作ってみたけど、実はそのアイデアもtodoro社のものだったりするんだよね」

tuz社は小型ギア部分だけ買い取って、あとは捨てちゃったから。あははは、とニオさんは笑うけど、その声も乾いていた。

「ニオさんは、どうして多々良涼が自殺したか知ってるのか？」
頷いた。

「多々良先輩が自殺したのは、修士論文が拒否されたから」

ニオさんは冷めきったコーヒーを一気に飲んだ。口紅が少し掠れた。コーヒーカップの縁を拭いてオレたちに向き直る。

「山本一樹は読みもしなかった。当然、承認されないし、卒業できない。後々分かったことだけれど、山本一樹と多々良先輩は驚くほど仲が悪かったみたい。todoro社が出来てから悪くなったのか」

「ルネさんが言っていました、山本一樹ってtuz社がスポンサー

だったんスよね。もしかして、山本一樹が嫉妬して多々良涼を蹴落としたってことスか？」

tuz社は当時ヘルメット型のギアで最大手だった。二オさんを見るが、返ってきたのは否定だ。

「多々良先輩が自殺して、やっぱり大学でも少し問題になったの。査問会が作られて不正があったかどうか、山本一樹の私怨かどうかももちろん調査された。結果は白。何でだと思っ？」

多々良涼の書いた修士論文が、『ありえない理論』だったからだよ。

2088年9月23日(木) その2

私書箱203を出て大きく伸びをした。見事な秋空だ。鱗雲がビルの合間に棚引いている。なんとも神妙な気分だった。それは本村弘美も同じようで、呆つと遠くを見つめる。

「ぼかぁ一旦署に戻ってからルネさんのところ向かうス」

「ああ」

時間を確認すれば、まだ10時48分だ。わずか数十分間の出来事なのに、すでに何時間も経ってしまった気がする。それほどに濃密だった。

オレと本村弘美は外国語の飛び交う人ごみを抜け、モノレールの改札に入る。途端に騒がしいDRはいなくなり、実体だけが存在を許される。それを奇妙と思う程度には、オレは拡張現実の人間だった。軽く挨拶を交わして、オレは本村弘美に背を向けた。あいつは桜田門、オレは自宅行きだ。

軽快な音楽が鳴り響き、モノレールが走り込む。可動柵が開いて乗客がぞろぞろ降りてきた。スーツ姿ばかりで、あらためて今日が平日だったことを思い出す。20代のビジネスマンとすれ違いざま車両に乗った。

昔は電車事故が多かったのだそうだ。電車で投身自殺、線路での衝突事故、それで発生する電車の遅延。そんなものが日常だと、ビジネスマンはさぞかし苦労したことだろう。モノレールが主流になって、それらはほとんどなくなった。ホームには柵が義務付けられ、地面に接する線路は姿を消した。高層ビルの合間を縫って走る光景はとても綺麗だと思う。ビルのガラスに反射する白いモノレールの姿や、見下ろした街の光景はオレのお気に入りだった。

壁に凭れかけ、口の中で転がす。『不可能な技術』、『ありえない理論』。

ぼんやりと流れゆく風景を眺めながら、二才さんの語ったことを

反芻した。

もちろんわたしは納得しなかった、そう彼女は続けた。

「だって、読みもしない論文を否定なんてありえない。だから、わたしは多々良先輩の書いた論文を読みたかった。でも……、時すでに遅しってやつかしら。多々良先輩は論文を処分してしまっていた。山本一樹の手元からも論文を削除したらしく、どこにも残っていない。遺されたのは論文のタイトルだけ」

『偽装現実の精神作用について』

シンプルかつ明解なタイトル、そのくせ掴み所がない。

ピンポンパン、と音がして扉が開く。気がつけばもう荻窪だった。オレはジーンズのポケットに両手を突っ込んで駅を降りた。

眠りは限りなく浅い。夢は見なかった。妙に頭が冴えていた。オレは起き上がって首を振った。西日に目を細めて今が夕方なのだと悟る。

一昔前のサーバがモーター音をかき鳴らしていた。じつとりと肌も汗ばんでいて、暑い。どうやら無意識にタイマーをかけていたらしく、エアコンが切れていた。摂氏29.8度、そろそろ10月だというのに、まだ夏は立ち去ってくれない。

簡単にシャワーを浴びてメールをチェックした。相変わらずセインからもカインからも連絡がない。

「一体何やってるんだろうな」

いい加減心配にもなってくるが、オレには動きようがない。

触手と向き合うか、ルネに会いに行くか、思案をするが結論がで

ない。とりあえずDRになるか、とギアを捻ったのが駄目だったのか。

「こんばんわ、柳楽誠」

馴染みすぎた声にぞわりとする。

「お前！」エマノン。

NULL空間だった。オレの真正面には生き写しの少年が立っている。

「3日ぶりだね。その後の調子はどうだい？」

無言で拳を握り締めた。そのまま勢いよく殴りかかるが、ひらりとかわされる。

「熱くなるなよ、ヴァン。お前だってそれが無駄な行為だってわかっているんだらう？」

そうだった。こいつはDRじゃない。オレのアバターを象ったARで、中身は別のところにいる。落ち着け、と深呼吸をした。

「それで、何の用だよ」

オレと同じ面の皮がにやにやした表情を造る。自分ながらに気持ち悪い。

「いや、そういえば感想聞いてなかったなと思って。ドラッグプログラム、キモチヨカッタ？」

犬歯で噛んだ。口に鉄の味が広がるのがリアルだ。

「ああ、ヨかったよ。お前が試せばよかったのにな」

そうすればお前が知りたかったこともわかったんじゃないのか？睨みつけてもまったく気にしていないようで、エマノンはオレの

顔を覗き込む。

「何を感じた？」

「どうしてそんな質問をするんだ。トレースしてオレに流れ込むシグナルを読んだんだろ。もうオレはお役目御免なんじゃないのか」

快楽、それに憤怒。ドラッグプログラムで剥き出しにされた怒りが全身に蘇ってくる。

「それがさ。ああ。当事者だしヴァンにも教えてあげるよ。あのプ

로그램、人が認知出来ない程度の五感情報を送っていた。それが快樂の正体かと思つてき、試してみたんだよ。色々な人に同じシグナルを流し込んでみたし、自分自身でもやってみた」

どうなつたと思う？

「知るかよ」

「何も起こらなかつた。なぐんにも。ヴァンのように飛ぶような快樂なんてなかつた。元々が感じられない程度の情報だったから、視覚も、聴覚も、嗅覚も、味覚も、触覚も、何も変わらなかつた。五感以上の付加情報を送っているのかと疑つてみたけど、それもない。なんだろうね」

「知るかよ」

「そつけないなあ」

それこそ、知るかよ。

エマノンはいくると身体を翻し、一歩二歩三歩と歩いた。

「この情報、ルネも知ってるよ」

「何？」

「ルネもドラッグプログラムがどんなものなのか把握しているってこと。ヴァン、ルネをあんまり信用しないほうがいいんじゃないのか」

「余計なお世話だろ」

ルネは情報屋だ。ドラッグプログラムの情報はオレやサイバー課以外にも伝手があるのは当然だ。オレの様子にエマノンは鼻を鳴らした。

「まあ、いいよ。色々情報も手に入ったしね。山本一樹に多々良涼か。大分核心に近づいてきたんじゃないのか。山本一樹が結局多々良涼の理論を使ってドラッグプログラムを作った？ 多々良涼は自殺ではなくて実は生きている？ おもしろい想像ができるね。どこぞの三文小説みたいだよ」

何故このタイミングでドラッグプログラムをバラ撒いたのか。何故『特定のIPアドレス』に送りつけているのか。

「まだ全部解ったわけじゃない」

「それでもすげえ」

エマノンはまだオレに向き直った。顔には笑みを張り付けて、良い悪だくみでも思いついたかのように目を輝かせる。

「いいこと教えてあげるよ。ヴァン、明日新宿に行ってみなよ。きつとおもしろいものが見られるよ」

おもしろいもの、それが不吉な表現にしか思えないのは何故だろうか。

悶々と過ごすうちに、気づいたら早くも金曜日の21時だ。結局出かける気にはならずせせと仕事をした。お陰様で依頼のあったアノ物はほぼ完成だ。

エマノンの薄気味悪い笑顔が思い浮かぶ。行かないつもりだったし、それが正解だと冷静な頭が告げる。だが、何があるのか気にもなっていた。いざ金曜日になってみると、そわそわしてろくに寝れやしない。そわそわと動く蟲を消して、時計に視線を投げた。

「行くか……」

手首に古びたギアを取り付けて、ゆっくりと撫でた。座標は新宿西口で、捻る。脳内を駆け巡るパルスの後に現れるのは人ごみだ。今日は金曜日だから、特別会社勤めの者が目についた。すでに出来上がった酔っ払いが何人も駅へと消えてゆく。

周りを見て首を傾げた。

「何だ？」

実体のオレよりも少し小さい両手をポケットにつっこんでぶらぶらと歩きながら、疑問はどんどん積み重なっていった。

普段よりもDRが圧倒的に多い。大久保は一種DRの聖地になっていて、色々なDRが集まる。一方の一駅離れた新宿は、どちらかというとと実体に人気だ。大久保と比べるとDRの数も減って、さらにはパンダやペンギンといった特殊な形状をしたDRもいなくなる。それがどうだ。今の新宿は混沌としていた。実体の酔っ払い、客引きのホストやホステス、うさぎの着ぐるみのDR、そして明らかにトन्दるDRのジャンキー。

雑居なビルを前に一際輝く「歌舞伎町」の門、オレはそれを視界に入れて足を止めた。悲鳴が聞こえる。それも何人もだ。男の裏返

ったものであったり、女の金切り声であったり。ぞくり、と嫌な予感がした。地を蹴って歌舞伎町へと駆け込んだ。強烈なデジャヴ、目に飛び込んできたのは暴れ狂うDRの軍勢だった。

「どういうことだよ」

ドラッグプログラムの乱用者がこぞって狂乱している。雄叫び、悲鳴、逃げ惑うDRを追うジャンキー。気にしていないのはチユーナーをつけていない実体だけだ。

涎を垂らし、焦点のあつていなかった目が、立ち尽くしたオレを向いた。ぐるん、と大男の目玉が回る。

「おまえ……」

男はオレの腕を見ていた。

「おまえ、おまえ」

近寄る男に後ずさった。

「見つけた！ おまえ！ おまえがああああああああああああ」

筋肉剥き出しの大男がオレの前に躍り出た。陰がオレの顔におりる。グググググと口から異音を出していた。涎が地面にばたばたと落ちる。だが、一心に凝視しているのはオレのギアだ。

「おまえが、た、たた、たたりよう、か！」

「たたりよう！」

「たたりようがいた！」

「見つけた！」「たたりようを見つけた！」「たたりようだ！」

「いた！」「こいつが！」

暴れていたDRは一斉にオレを認める。

「一体、何なんだよ……」

とん、と背が壁に当たった。

迫りくる手を間一髪で躲した。すぐさま背を向けて走り出す。

後ろを向いて血の気が引いた。DRの狂った集団がオレを追いかける。「たたりよう」「たたりようが」「つかまえる」「あそこにいる！」

段々と母数が増える。目の前にも、DRがオレを待ち受けるよう

に構える。

「ふざけんな」

男の股を潜って背中を思いつき蹴った。奴がDRの集団に倒れ込んだのは嬉しい誤算だ。でもな、オレは非戦闘員なんだよ。引きこもりなんだよ、足が痛えよ。悪態を付ながらまた足を動かす。運動不足がダイレクトに効いたようで、すでに息が苦しい。

「何で夜中に鬼ごっこなんてしなきゃいけないんだよ」

クソ、クソツ。汚い言葉ばかりが口に出る。クソ。

走りながらスクリーンを出した。簡単にニュースを流していると、驚くものが飛び込んでくる。

FW：多々良涼を見つけたらドラッグプログラムをアゲルヨ

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

多々良涼を見つける。

多々良涼は新宿にいる。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

夕チバナからの受信したばかりのメールだ。同時に爽やかな、だが若干焦りを含んだ声が流れる。これもヴォイスメールだった。

『誠、ドラッグプログラム利用者に一斉に送られてきたらしい。リカちゃんを傷つけたクソ野郎、阿部一郎が念のためにと連絡してきた。もしかしたらお前も狙われるかもしれないから、気をつけるよ』
遅い。

メールには、例の集合写真をくり抜いたものが添付されていた。多々良涼の拡大写真だ。手首にはオレと同じギア、GROOBが着けられている。

「これか」

あいつらはこのギアを追っかけてきているのか。

多々良涼のギアはGR001Bだった。とは言っても、彼はtoro社に勤めていたし、そのギアを所有していたとしても何ら不思議がない。

オレは舌打ちしなくなった。このギアは特徴的だから、いい目印になるのだろう。頭のぶっ飛んだ野郎たちに、オレが多々良涼でないと言得するのも難しそうだ。

エマノン、あいつはおそらくこのメールが今日流れることを知っていた。その上でオレをここに嫉けたのだ。解っていたのに、ままと乗せられてしまった。オレは下唇を噛む。今はあいつに憤っている時じゃない。自分の不甲斐なさを嘆く時でもない。

スクリーンに気をとられて、足が纏れた。転びはしなかったが、バランスが崩れて足が止まる。

肩を捕まれた。強い力で引かれ、尻餅をついた。どろり、と涎がオレの頬を伝った。見上げた先にいたのはあの大男だ。

「なっ……」

集団に囲まれた時の恐怖心、それがオレの全身に侵食した。暗闇でいくつもの狂った眼がオレを射抜く。身体が少しも動かせない。震えさえない。ただオレは迫りくる手を呆然と見る。伸びる。手のひらがオレの顔を被う。

「不埒もの！」

大男が消えた。

「私の前で犯罪なんて」男が膝をつく。

「よっぽど自殺願望があるのですね」女が吹っ飛ぶ。

そして現れたのは白い生脚だ。

「ヴァンさん、大丈夫ですか？」

伸ばされた細い手首をギュッとつかんだ。

「助かった」

「いえ……」

頬を染めてはにかむのは、つい先ほど大暴れをした美少女だ。

「ハルカ、強かったんだな」

「こう見えても空手三段、柔道五段ですから」

彼女は清楚に微笑んだ。顔の横には握りこぶし、怖えよ。

息を整えてハルカの隣に並んだ。

「新宿が変だと通報があったんです。念のため来てみてよかったです」

「ありがとうな」

彼女は目を細めて周囲を見回す。もうここには狂ったDRとオレたちしかない。

「でも、あいつらゾンビみたいに沸いてきますね」

「ああ」

ぞろぞろと周りからジャンキーが集まってくる。また囲まれるのも時間の問題だった。

どうします？ と投げかけるハルカの視線に、オレは唇を釣り上げた。またスクリーンを出して、軽く操作する。

「まあ見てるよ」

徐に目当てのものを取り出した。

「えっ」

真っ青になるハルカ。オレはますます笑みを深める。

「AR技師舐めんな！」

触手が広がった。オレの足元からはゾロゾロと蟲が湧き出る。今日の今日まで作っていたARだ。プログラムも導入済み。蔦がどんどんジャンキーを搦め捕り、そこに数多の蟲が這い上がる。

「ドラッグプログラムよりも善い夢を見させてやるよ」

「ひいひい」

悲鳴はもちろんハルカから発せられた。

「ヴァンさん、鬼畜です」

不貞腐れたようにハルカは頬を膨らませた。女の子が拗ねた仕草が非常に愛らしいが、中身はハルヒコだ。オレは必死に現実を思い出した。

ジャンキーはあらかた堕ちた。それを見届けてオレのA Rも消した。残ったのは新宿に似つかわしくない静寂だけだ。

「じゃ、行くか」

「……」

「なんだよ」

「あの、ヴァンさん、実はさっきから考えていたんですけど、D Rで襲われたらとりあえず一回戻って別の場所に飛んだら良いんじゃないでしょうか」

その手があったか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2026j/>

void

2011年12月31日02時47分発行